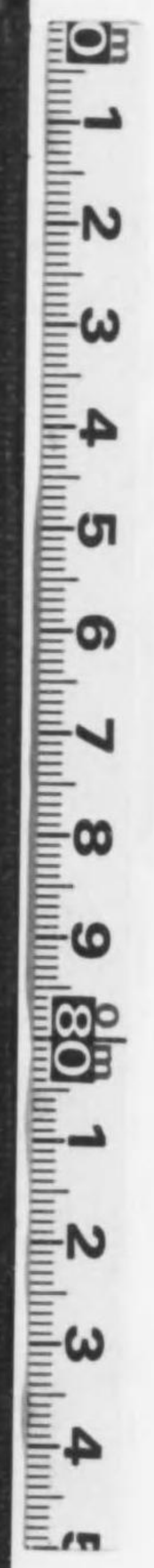
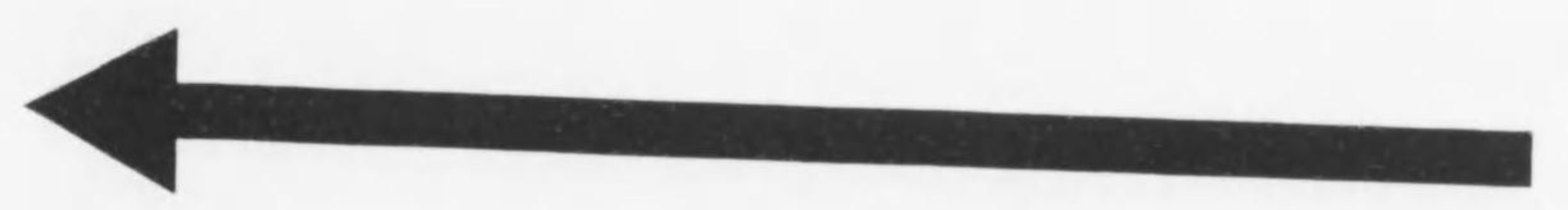


R910.33-F63ㄅ
1200500767854

R910.33
F63
ㄅ



始







62-99

R910.33

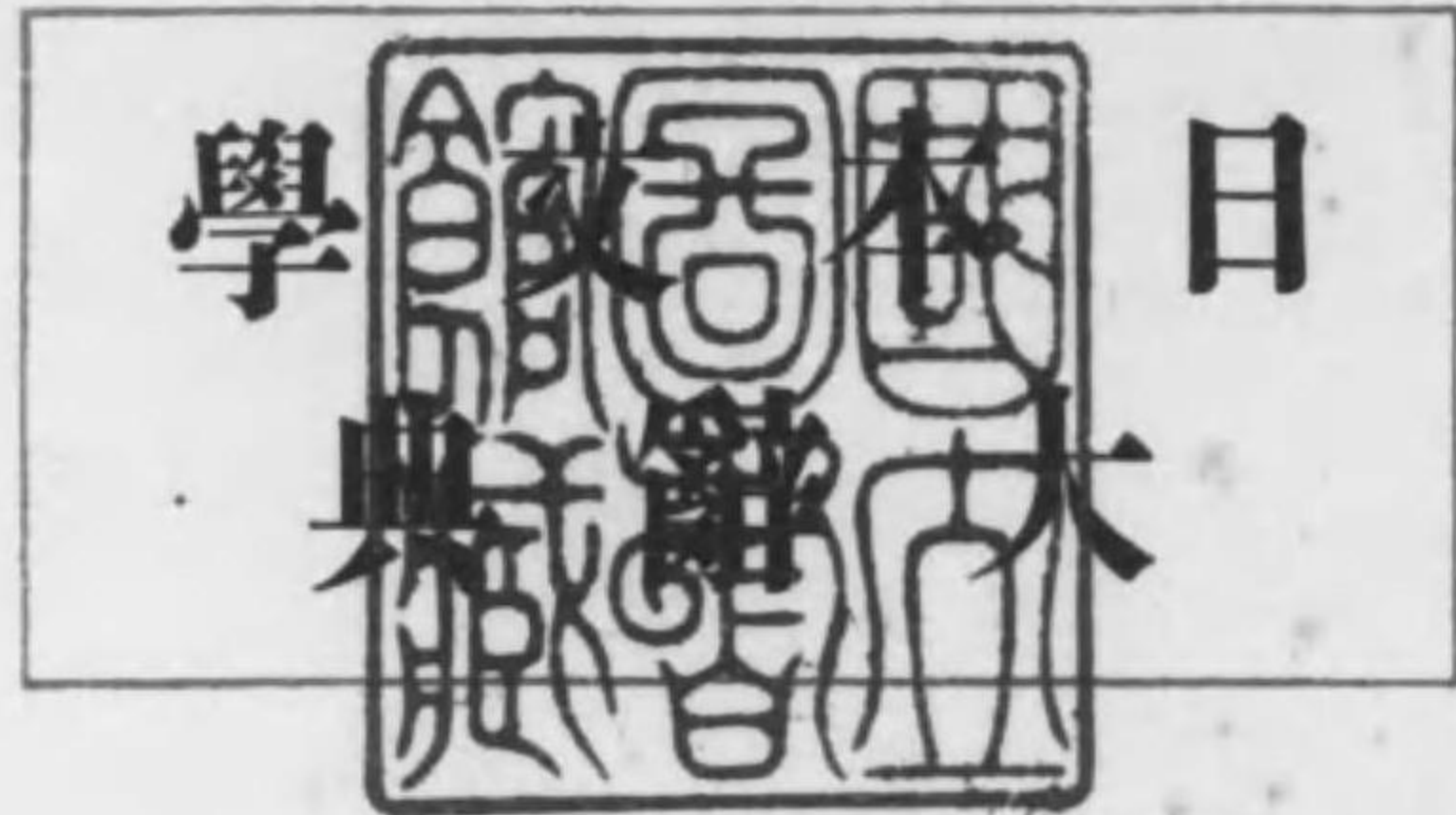
R910.33

F63

F63

(1)

(1) ⊕



第一卷

文學博士

藤村作編

新潮社版



顧問
早稲田大學 文學博士 坪内逍遙
東京帝國大學 文學博士 上田萬年



序

「摸擬ヲ戒メ創造ヲ勗メ」よとは、今上陛下の昭和の御世知らしめす第一日の朝見式に於て下し給うた勅語中の一節である。かゝる大御言葉は明治・大正の二代に於ても、嘗て拜したことのないものである。明治・大正の六十年は、我が國民の歐米諸國の追隨と、歐米文化の摸擬との中に過ぎて行つたが、今にしてこれを回顧すれば、追隨の中にも自主、摸擬の中にも同化の存したことはよくわかるのである。僅か六十年にして歐米文化を消化した我が明治・大正の國民は、決してその爲に我を空しうし、三千年傳統の偉大な精神を失うたものではない。寧ろ一千數百年前に祖先が亞細亞大陸地方より輸入した文化に由つて、大和魂の内容を豊富にしたと同様に、歐米文化の同化に由つて、舊日本を世界の狀態に對應すべき偉大な新國家に改造し、百般の文化施設に新面目を與へて、こゝに昭和新时代に於ける國民的大活動の基礎を作つたものといふべきである。この期待される國民的大活動こそ、昭和日本の大使命、昭和國民の大任務ではあるまいか。

抑、昭和日本の國民的大活動とは何であるか。外ではない、東西二大文化を基礎として、創造の一路を大膽に且つ細心に進むことであると信ずる。而してこの新なる創造は、東西二大文化の粹を集め有つ現代の我我にして始めて能くすべきものである。我々の成す創造である以上、それは必然に日本的なるものの創造の外に出づべきでない。我々は政治に、學術に、教育に、文藝に、産業に、軍事に、あらゆるものの上に、日本的なるものの新なる創造に大努力をなすべき覺悟を要する。

而して、かゝる國民的なる大創造は、我が國民の最も眞摯にして、正確なる自己認識より出發すべきであ

る。悠久なる我が歴史の中に日本精神の不易なる本幹を把握し、且つその時代を追うた展開の相をもよく知る。現代に於ける自己の認識に及ぶことは、この大創造に對する我々昭和國民の最も必要な準備である。我々が日本文學の研究・普及を尊い使命として盡瘁し、國語教育の振興・完成を唱道するの意は、實にここに存するのである。

思ふに、日本文學は、日本國民が過去一千餘年に互るその精神生活を自ら表現したもので、我々の爲には無比の寶庫である。我々はこの中に、祖先の有りのまゝなる影像を見て、祖先に對する心からなる懐かしみを覚え、祖國に對する深い深い愛着を味はふことを得るのである。併しながら、これをよく知ることは、一朝一夕の能くすべき所でない。我が日本文學は一千餘年の長い歴史を有する。この間に出た歌人・作家・學者の數は擧げて數ふるに遑なく、作品著書の量に至つては固より汗牛充棟である。事項の多岐複雑なる、専門語義の廣漠深遠なる、専門學者と雖もこれを究め盡すことは容易なことでない。こゝに於てか、専門學者の爲にも、又一般人の爲にも、日本文學辭典の必要が起つて來る。

然るに、文學に關する事彙辭典は西洋に於ても極めて稀である。我々の知つてゐる限りでは、獨逸の *Reallexikon der deutschen Literaturgeschichte mit Register*, 4 Bde. (Paul Merker und Wolfgang Stammeler) (1925—1931) *Sachwörterbuch der Deutschkunde*, 2 Bde. (Walther Hofstaetter und Ulrich Peters) (1930) が、最も秀でたものであるが、それすら量に於ては必ずしも大きいとは言へない。英吉利佛蘭西に於ては、純粹なる文學辭典と稱し得べき形を具へたものはない。いづれの國に於ても、知らうとする文學上のことを必要に應じて求めるには百科辭典や

文學史の索引に依る外ないやうである。而してこれ等には卷冊の浩瀚や、解説の不備や、項目の不足の伴ふを常とする。我が國に於ても、近時初學者の爲に著はされた一二の小辭典のあるのみで、文學辭典は世界の文化國を通じて未だ完成を見てゐない現状である。

思ふに、最近日本文學研究の隆盛は、實に空前のことであるが、多數専門の學者は皆孤立的に研究に従事し、爲に各自同一事の攻究に同一勞作を重複せしめてゐるが如きは、誠に勞のみ多くして、功の少いことである。若し學者が相互の間に密なる聯絡を保ち、各自の業績を順次に重積し得る道があるならば、その勞力の經濟となり、従つて斯學進歩の爲に利便を得ることは少くないであらう。それには日本文學辭典の刊行が最も望ましいことであらうとは、屢我々同學徒間の話頭に上る所であつた。

余も夙にこれを感じてゐながら、かゝる大業は到底一人の力の能くすべき所でないから容易に手を下し得ないであつたが、昭和二年の冬、遂に意を決して先づこれを余の同僚・友人たる東京帝國大學國語・國文學兩研究室關係諸君に諮つた。幸にその賛成を得たので、諸君と力を協せて公務の餘暇をこれに利用し、萬難を排して、これが實現に努力することにした。

それより彌々準備の活動を開始し、新潮社長佐藤義亮氏に、出版に關する一切のことと、編纂に關する經濟上の援助を求めてその快諾を得た。仍つて昭和三年一月編纂事務主任を置いて、文學士城戸甚次郎君にこれを委嘱し、編輯委員會を組織して屢協議を重ね、編纂大綱を定め、項目を選定して、専門學者に執筆を依頼し、執筆要項並びに執筆に關する注意を印刷してこれを配附した。尙ほ多數執筆者の手に成るべき原稿の

不統一を豫め防がんに爲に、項目の各般に互つて解説見本を作り、これを印刷に附し一冊子となして參考に供した。斯くして漸く準備は整うた。

爾來原稿は續々として到着し、月々に堆積して來たから、委員會に於ては、夜を日に次いでその整理に従事した。體裁の不備なるものはこれを所定の形式に整へ、文章の長きに過ぎるものはこれを壓縮し、誤記脱漏等の疑あるものは、これを一々質した。夏冬の公暇には、山の如き原稿を携へて、信州や伊豆の温泉に閉ぢ籠り、他事を棄て、訪客を避けて、専心この事に努力した。整理の外に又挿畫の選定、寫眞の撮影等のこともあつて、公務を持つものの事業としては、全く手に餘るものであると感じた。

余等の所期は、固より日本文學のあらゆる方面に於て、資料の發見にも、學問的研究にも、皆現時の頂點を集め掲げて、斯學進歩の爲に一階段を作らうとするに在る。故に客觀的記實に在つては最も正確なることを求め、史的地位・價值等の批判に在つては、定説、若しくは公平と信ぜらるゝ見解をのみ採ることとし、杜撰に流れ、主觀に偏することは努めてこれを避けた積りである。

今や第一卷を江湖に送るに當つて、過去を回顧すれば、筆者諸君の尋常ならざる努力に感謝措く能はざると共に、密に余等の淺學非才の爲に整理を過つて、累を諸君に及ぼし、兼ねて讀者を誤ることのありはせぬかと只管恐れる。若し萬一にもかゝることのあるならば、筆者諸君並びに大方に對しては、その寛恕を請ふの外はないが、幸に大方の示教にあづかることを得るならば、改版の機を得てこれを修訂増補して、完璧を他日に期したい。余等は寸毫も誤謬を固執し、過失を強辯しようとする心を持たないものである。

本書の幸に世に出づるを得るに至つたのは、余が大學研究室に於ける同僚であり、友人である橋本進吉・志田義秀・久松潛一・城戸甚次郎・池田龜鑑・笹野堅・岩淵悦太郎の諸學士、並びに嘗て同僚であつた島津久基・守隨憲治・笈五百里・西下經一・筑土鈴寛の諸學士の協力の賜であるといつてよい。これらの諸君は、計畫に、執筆に、整理に、稀なる熱意と豊かなる學殖とを以て、余と協力して本書の爲に盡瘁して下さつた。殊に橋本・志田・久松三君が委員會幹部として、各自分擔執筆の外に原稿整理の難業に當つて、渾身の精力を惜しまれなかつたことは、本書の爲に牢記すべきことである。

余は固より本書に依つて物質的利益を期してゐないが、貧學究の悲しさ、身に餘る債務を負うて累を他にまで及ぼすの結果に陥ることは堪へ難いことであるから、豫め極めて經濟的に計畫を立てた。随つて筆者諸君に酬いた所も甚だ菲薄であつたにも拘らず、諸君が喜んで本書の爲に各自の蘊蓄を傾けて下さつたことは、余の銘して忘るゝ能はざる所である。こゝに謹んで感謝の意を表す。

尙ほ貴重な圖書の撮影に就いて、特に多大の便宜を與へられた宮内省圖書寮・帝室博物館・帝國圖書館・内閣文庫・東京帝國大學附屬圖書館・同史料編纂所・早稻田大學圖書館・同演劇博物館・大橋圖書館・高野山大學圖書館・東洋文庫・岩崎文庫・靜嘉堂文庫・九條公爵家・前田侯爵家・三條西伯爵家・井上哲次郎氏・上田萬年氏・藤井乙男氏・松井簡治氏・佐佐木信綱氏・高野辰之氏・小田久太郎氏・伊藤松宇氏・井上辰九郎氏・町田博三氏・伊木壽一氏・山口剛氏・田中一松氏・田中親美氏・額原退藏氏・石割松太郎氏・田邊尙雄氏・野崎左文氏・加賀豊三郎氏・秋葉芳美氏・笹野堅氏に感謝の意を表す。

又佐藤義亮氏が、營利の立場を離れて翼賛協扶せられ、寢食を忘れ、細心の注意を以て盡力せられたことは、ここに特に記して置かねばならぬ。又本書編纂出版に關する雑務に執掌せられた新潮社員諸君の多大の勞苦も、決して忘るべからざるものである。

終に臨み、坪内・上田兩顧問を始め、陰に陽に、本書の爲に種々なる助言と便宜と援助とを賜はつた各位に深厚なる謝意を表する。

昭和七年五月

藤村作

第一卷訂正表

頁	段行	誤	正
二二	二ノ二	新居歌集(前項)	安賀原歌集
三二	二ノ二	最大花浦里	最大花浦里
三二	四ノ九	關する節	關する節
三二	四ノ七	初冠會表	初冠會表
三七	三ノ四	賀須川	賀須川
四二	四ノ四	夕陽曲(前項)	夕陽曲(前項)
四六	三ノ七	古文(前項)	古文(前項)
五八〇	編者(初項)	初冠會表	初冠會表
五八六	四ノ七	弘法外典抄は具平親王の著書なるにより削除	弘法外典抄は具平親王の著書なるにより削除
五八七	三ノ七	享保十三年頃	享保十三年九月
五八七	三ノ二	一説に玉村吉備	又二代上村吉備
六〇二	一ノ三	(小傳久保田)	(尾藤久保田)
六一	二ノ九	神の歌	神歌
六一	二ノ九	歌詠書考	歌詠書考
六二二	三ノ八	關原年記	關原年記
六二六	三ノ八	奇談七部之書	奇談七部之書
六二七	四ノ八	奇談七部之書	奇談七部之書
六三二	三ノ九	「笑話」	「笑話」
六三二	四ノ九	意義を示すばかりで	意義を示すばかりでなく
六五六	三ノ二	意義を示すばかりで	意義を示すばかりでなく
六六七	編者(文化七年)	(文化七年)	(文化七年)
六九一	三ノ二	實州	實州
六九八	二ノ二	三浦用晦	三浦用晦
七一三	一ノ三	著しい漢俳の影響であ	俳句の客觀句の如き着
七三三	二ノ二	京都御所	京都御所
七三〇	四ノ一	希世難産	希世難産
七三三	二ノ一	俳句(前項)	俳句(前項)
七三三	二ノ一	「新式今案等	「新式今案等

頁 段行 誤 正

一九八	四ノ二	道行「いろは新勅」	道行名額未詳
一九九	二ノ二	傳助	傳七
二二一	四ノ二	明治十二年一月	大正十二年一月
二三五	一ノ五	(前項)	トム
二四五	三ノ二	「文學の種類」を見よ。	「文學の種類」(歌集)を見よ。
二五三	一ノ四	枕歌集	歌詠集
二六一	四ノ三	「古今化物評判」	「古今化物評判」
二六四	一ノ七	文政十一年	文政十二年
九四六	四ノ六	延享三年生	實應六年生
九四六	四ノ七	九月十七日歿。享年七十九。	九月十五日歿。享年六十九。
九四七	一ノ六	三十一歳	三十一歳
九四七	二ノ一	然るに寛政二年二條公	然るにその翌年、寛政
		が雪月花の會を始めた	二年には、鳴臺と共に
		時、彼は鳴臺・關更・青	二條殿から、花の本の
		圖と共に宗匠の御免が	允許を得てゐるのであ
		あつた。	る。
一〇二	三ノ九	享保六年	享保十一年

第一卷訂正表

Table with columns: 頁 (Page), 段行 (Section), 誤 (Error), 正 (Correction). Includes entries like 二二三 二ノ二二 蘇我歌集(別題), 二二二 二ノ二二 蘇我歌集(別題), 二二二 二ノ二二 蘇我歌集(別題), etc.

Table with columns: 頁 (Page), 段行 (Section), 誤 (Error), 正 (Correction). Includes entries like 一九八 四ノ二五 道行いろは(新編), 一九九 二ノ二二 傳助, 二二二 四ノ二〇 明治十二年一月, etc.

Table with columns: 頁 (Page), 段行 (Section), 誤 (Error), 正 (Correction). Includes entries like 四五六 三ノ一七 「香檳」, 四六三 二ノ二二 「香檳」, 四六六 二ノ二二 「香檳」, etc.

Table with columns: 頁 (Page), 段行 (Section), 誤 (Error), 正 (Correction). Includes entries like 七三三 二ノ二五 「運新式」並に「新式」, 七四〇 一ノ二九 「から横巻」, 七四二 一ノ二九 「時代物」愛宕時節, etc.

第一卷増補訂正表追加

頁 段・行

二四 二〇一六 撰集もあつて

頁 段・行

二四 二〇三〇

頁 段・行

三四 一〇三四

頁 段・行

四〇 一〇三三

頁 段・行

五三 四〇一五

頁 段・行

八六 二〇一七

頁 段・行

八六 二〇三三

頁 段・行

八六 三〇一〇

頁 段・行

八六 三〇一三

頁 段・行

九二 四〇一六

頁 段・行

一〇五 三〇一九

頁 段・行

一四三 三〇三三

頁 段・行

一五一 四〇三一

頁 段・行

一五一 四〇三一

頁 段・行

一七八 四〇一三

頁 段・行

二二八 一〇一三

頁 段・行

二四二 一〇一四

頁 段・行

二四二 一〇一七

頁 段・行

二五〇 二〇一四

頁 段・行

二八四 四〇一〇

頁 段・行

二九四 一〇一四

頁 段・行

三二六 二〇一〇

頁 段・行

三三二 一〇一七

頁 段・行

三三三 一〇一〇

頁 段・行

三三九 三〇一六

頁 段・行

三三九 三〇一七

頁 段・行

三三九 三〇一九

頁 段・行

三四五 四〇一五

頁 段・行

三四五 四〇三二

頁 段・行

三四五 四〇三三

頁 段・行

三七〇 四〇三二

頁 段・行

四〇五 三〇一七

頁 段・行

四一三 四〇一〇

頁 段・行

四一七 四〇一七

頁 段・行

四一七 四〇一八

頁 段・行

四三六 一〇一七

頁 段・行

四三六 一〇二七

頁 段・行

四三六 一〇二八

頁 段・行

四三六 一〇三三

頁 段・行

四三六 一〇三三

頁 段・行

四三六 一〇三三

頁 段・行

四三六 一〇三三

頁 段・行

四三六 一〇三三

頁 段・行

四三六 一〇三三

頁 段・行

四三六 一〇三三

頁 段・行

四三六 一〇三三

頁 段・行

四三六 一〇三三

頁 段・行

四三六 一〇三三

頁 段・行

四三六 一〇三三

頁 段・行

七三七 一〇一

頁 段・行

七七三 三〇一五

頁 段・行

七七三 四〇一七

頁 段・行

七七三 四〇一七

頁 段・行

七八四 四〇一七

頁 段・行

七九四 二〇一三

頁 段・行

七九四 三〇一三

頁 段・行

七九五 三〇一九

頁 段・行

七九五 四〇一四

頁 段・行

八二八 一〇一三

頁 段・行

八三〇 三〇一四

頁 段・行

八五二 二〇一五

頁 段・行

八五二 三〇一五

頁 段・行

八六二 二〇一七

頁 段・行

八八四 二〇一四

頁 段・行

正

豊澤園平

綴録百部集

綴録五郎強勢談

綴録

貞享三年

八月二十六日没す。

病臥九年

「公平法門評」

「散木奇歌集」

太皇太后權大夫

佐々木信子

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

享年七十九。

凡例

一、編纂方針に就いて

- (イ) 日本文學大辭典は、國文學者・國語教育家の伴侶たらしむると共に、各般の學術・事業に關與する人々の參考に資せしむる爲に編纂したものである。隨つて古今に互る日本文學上の重要な知識は勿論、日本文學と密接なる關係を有する他の學術等にも及んで項目を選定し、これに簡明なる解説、批判を加へ、併せて參考資料をも示すこととした。
- (ロ) 本書は、解説の間に有機的關係を保たしむることを期し、一面、事項に關する總括的項目を設けて、これを一般著書の總論の地位に置き、一面、該項目中に含まるべき事項・人物・編著・作品等は、別に項目を立てて解説し、これを一般著書の各論に當らしめるやうにした。

二、項目の採擇に就いて

- (イ) 項目は、左の範圍に屬する事項・人物・作品・編著の中から重要なものを採擇した。

A 國文學全般

B 國語關係

國語學 國文法 國語問題 言語學 音聲學

C 前二項の外、國文學と密接なる關係を有する左の諸項

國學 文學論 藝術論 評論 修辭學 國史 有職故實 雅樂 雜藝 能樂 能狂言 演劇(歌舞伎・新派・新劇) 操 所作事 舞踊 講談 落語 日本音樂 日本畫 畫論 繪卷物 書道 書誌學 古文書學 金石文 神道 佛教 漢學 神話 傳説 民間 民俗學 隨筆 外國文學

- (ロ) 比較的重要なならざる事項・人物・作品・編著等は、別に項目を立てず、他の項目中に解説し、索引に依つて檢索し得るやうにした。

- (ハ) 解説の正確ならんことを期したので、信據するに足る資料を發見し得なかつた爲に、已むを得ず削除した項目も幾分ある。これ等は機會を得てこれを増補し得べきことを希つてゐる。

- (ニ) 時代範圍は、大體上代より大正末年までとした。但し人物に就いては、大正の創作家・評論家・詩人・歌人・俳人等にして、その完成を將來に期すべき人々及び現存の學

者は採擇しなかつた。

三、項目の標出法に就いて

(イ) 項目は、原名又は普通の書方に據る。
(ロ) 人物は名或は雅號(僧侶の場合には法號)を以て採つた。

山部赤人……赤人。弘法大師……空海。
瀧澤 解……馬琴。山鹿甚五左衛門……素行。
但し俳優・狂言作者及び明治以降の人物(俳人・漢詩人を除く)は、姓名又はペンネーム・藝名を以てした。
(ハ) 多くの雅號・戲號等を有する人物は、世に最も熟したものを採つた。

(ニ) 上田東作(和譯太郎・野枝崎人・御園・無器・休西・島守・二苦)は秋成。
岩瀬傳藏(山東京傳・甘谷・菊亭・菊軒・照香・照々・照世・實)は京傳。
書名又は作品名は角書を除いた。又俳諧何々・繪本何々等と冠したものの中、普通これを略して呼ばれてゐるものは、世間の稱呼に従つた。

河童 胡瓜遣……………胡瓜遣
相傳 御美 浮世床……………浮世床
新話 老實製法 親鸞防骨樂……………親鸞防骨樂
滑稽妙劇 俳諧京羽二重……………京羽二重

繪本通俗三國志……………通俗三國志

四、項目の排列に就いて

(イ) 項目は、原名又は普通の書き方に據り、漢字及び假名(假名遣は主として歴史的假名遣)で標出したが、項目の排列は、これ等の文字に拘らず、専ら發音に基き、左記の表記法に従つて發音の儘の假名に書き直したものと見做し、その假名の五十音順に排列した。

- 1 イ・エ・オと同音なるキ・エ・ヲはイ・エ・オに。
- 2 ジ・ズと同音なるヂ・ヅはジ・ズに。
- 3 フ・イ・ウ・エ・オと發音するハ・ヒ・フ・ヘ・ホはワ・イ・ウ・エ・オに。
- 4 カ・ガと同音なるク・グはカ・ガに。
- 5 語中に於てオと發音するアはオに(「あひ」(葵)をア・オとする類)。
- 6 ア列長音に發音するものはア列の假名の下にアをつける。
- 7 イ列長音に發音するものはイ列の假名の下にイをつける。
- 8 ウ列長音に發音するものはウ列の假名の下にウを

附ける。

ウ列長音に發音するイウ・イフはユウとする。

9 エ列長音に發音するものはエ列の假名の下にイを附ける。

10 オ列長音に發音するものはオ列の假名の下にウを附ける。

クワウもコの長音に發音するものはコウとする。

11 促音はツを以て示す。

12 撥音はンを以て示す。

以上の外は普通の假名の用法と同様である。但し外國語に於ては、長音は「符」を以て表した。(なほ委しくは檢索便覽の附表第一表を見よ)

(ロ) 排列の順序は五十音圖に従つたが、濁點の有無は排列に關係なく、次に來る音に據つて前後させた。但し全く同音の場合は、清音・濁音・半濁音の順にした。又一符で示した外國語長音は、國語長音の次に排列した。
(ハ) 同名のものは時代順に排列した。

五、解説に就いて

(イ) 簡明を旨とし、努めて同一解説の重複を避けてあるか

ら、参照や總索引に依つて關係項目の解説を併せ讀まれることを便利とする。

(ロ) 本文中(何々参照)とあるは、その項を参照して解説の全きを得べきもの。(別項)とあるは獨立の項目として解説のあるものを示し、(各別項)とあるは列挙しある各項目がそれ／＼獨立項目として存することを示したものである。

(ハ) 年號の下の括弧内の數字は、西曆と記したものの外は皇紀を示したものである。但し算用數字のものは西洋紀元を示す。

六、執筆者に就いて

(イ) 執筆者の名は解説の最後に「」の中に記した。
(ロ) 一項目に二名以上の執筆者のある場合は「以上何某」又は「此項何某」等として執筆の範圍を示し、その範圍の示し難い場合は、最後に連記した。

第一表

- I. この表は検索すべき項目を發音通りの假名に書き直す方法を示したものである。
- II. 音はローマ字で示した。ローマ字は羅馬字會式(ヘボン式)に據つた。
- III. ローマ字はabc順に並べた。
- IV. ()の中にあるのは外國語の場合である。

〔發音〕	〔本書所用の表記法〕	〔發音〕	〔本書所用の表記法〕	〔發音〕	〔本書所用の表記法〕	〔發音〕	〔本書所用の表記法〕
a	あ	gyō	ぎよう(ギョー)	mū	むう(ムー)	se	せ
ā	ああ(アー)	gyū	ぎゆう(ギュー)	mya	みや	zē	ぜい(ゼー)
ha	は	ha	は	myō	みよう(ミョー)	sha	しゃ
he	へ	he	へ	n (國語)	ん	shi	し
bō	べい(ベー)	hē	へい(ヘー)	na	な	shī	しい(シー)
bi	び	hi	ひ	ne	ね	sho	しよ
bo	ぼ	hī	ひい(ヒー)	nē	ねい(ネー)	shō	しよう(ショウ)
bō	ぼう(ボウ)	ho	ほ	nī	にい(ニー)	shu	しゆ
bu	ぶ	hō	ほう(ホウ)	nū	ぬう(ヌー)	shū	しゆう(シュウ)
bū	ぶう(ブウ)	liya	ひや	no	の	so	そ
bya	びや	hyo	ひよ	nō	のう(ノウ)	sō	そう(ソウ)
byō	びよう(ビョウ)	hyū	ひゆう(ヒョウ)	nu	ぬ	su	す
byū	びゆう(ビュー)	hyū	ひゆう(ヒュー)	nū	ぬう(ヌー)	sū	すう(スウ)
cha	ちや	i	い	nya	にや	t (國語)	つ
chā	(チャー)	i	い(イー)	nyo	によ	ta	た
chī	ち	ja	じや	nyō	によう(ニョウ)	te	て
cho	ちよ	ji	じ	nyu	にゆ	tō	てい(テー)
chō	ちよう(チャウ)	jī	じい(ジー)	nyū	にゆう(ニュー)	ti	ち
chu	ちゆ	jo	じよ	o	お	to	と
chū	ちゆう(チュウ)	jō	じよう(ジョウ)	ō	おう(オウ)	tō	とう(トウ)
da	だ	ju	じゆ	p (國語)	つ	tu	つ
de	で	jū	じゆう(ジュー)	pa	ぱ	tsu	つ(ツ)
dō	でい(デー)	k (國語)	つ	pe	ぺ	tū	つ(トゥ)
dī	じ	ka	か	pē	ぺい(ペー)	ū	う
do	ど	ke	け	pī	ぴ	ū	う(ウ)
dō	どう(ドウ)	kē	けい(ケー)	po	ぽ	va	ば
du	ず	kī	き	pō	ぽう(ポウ)	ve	べ
e	え	kī	きい(キイ)	pu	ぷ	vi	び
ē	えい(エー)	ko	こ	pū	ぷう(プウ)	vo	ぼ
fa	は	kō	こう(コウ)	pya	ぴや	vu	ぶ
fe	へ	ku	く	pyō	びよう(ビョウ)	wa	わ
fī	ひ	kū	く(ク)	pyū	びゆう(ビュー)	we	え
fo	ほ	kwa	か	ra	ら	wi	い
fu	ふ	kwō	こう(コウ)	re	れ	wo	お
fū	ふう(フウ)	kya	きや	rō	れい(レー)	ya	や
ga	が	kya	(キヤ)	rī	り	yo	よ
ge	げ	kyo	きよ	ro	ろ	yō	よう(ヨウ)
gō	げい(ゲイ)	kyō	きよう(キョウ)	rō	ろう(ロウ)	yu	ゆ
gī	ぎ	kyū	きゆう(キュー)	ru	る	yū	ゆう(ユウ)
gī	ぎい(ギイ)	m (國語)	ん	rū	るう(ルウ)	za	ざ
go	ご	ma	ま	rya	りや	ze	ぜ
gō	ごう(ゴウ)	mē	め	ryo	りよ	zē	ぜい(ゼー)
gu	ぐ	mō	めい(メー)	ryō	りよう(リョウ)	zo	ぞ
gū	ぐう(グウ)	mī	み	ryū	りゆう(リュー)	zō	ぞう(ゾウ)
gwa	が	mo	も	s (國語)	つ	zu	ず
gya	ぎや	mō	もう(モウ)	sa	さ	zū	ず(ズ)
gyo	ぎよ	ma	む				

検索便覧

一、本書は、普通の辭書とは違ひ、發音引にしたものである。その發音通りの假名書きは、各項目の處には出さず、唯各頁の柱に標出したのみである(各項目の名の下に附けた假名は、普通の正しい書き方で、必ずしも發音の通りではない)。それ故、まづ所要の項目の名を次の第一表(又は第二表)に示した表記法による發音通りの假名書きに直し、その通りの假名が柱の見出しにある所を搜つて所要の項目を見出すべきである。

例へば「奥義抄(あうぎせう)」は、發音通り「おうぎしよう」と書き直して、柱に「おうぎ」とある頁を開いてこれを見出す。

一、讀方の不明な項目は、別巻の索引(漢字及び假名索引)によつて検索すべきである。

一、本書に獨立して解説してない項目でも、他の項目の中に併せて説かれて居るものが少くない。これ等は別巻の索引によつて検索すべきである。また、これを大きな概括的項目、或は關係ある項目を引いて索めるのも一法である。

ある。

一、人名の引き方

イ、明治以前

名又は雅號で引く。但し、脚本作者は姓名又はペンネームで、俳優又は藝人は藝名で引く。

ロ、明治以後

姓名或はペンネームで引く。但し、俳人・漢詩人は俳號・雅號で引く。

別巻の索引からは何からでも引く事が出来る。

一、書名或は作品名は角書を除いて引く。

一、「俳諧何々」「繪本何々」「好色何々」等はその部になければ「俳諧」「繪本」「好色」等を除いて引く。

一、なほ委しくは凡例を見よ。

注意

第一表は發音から本書の項目排列に用いた表記法を知らしめるものである。

第二表は普通の書き方から前記の表記法を知らしめるものである。

第 二 表

- I. 本表は、本書の項目を検出するに必要な發音通りの〔表音式〕の書き方を、普通の正しい〔歴史的假名遣式〕の書き方と対照せしめ、普通の歴史的假名遣式の書き方から、本書の表音式の書き方を知り得るやうにしたものである。
- II. 歴史的假名遣式の書き方はアイウエオ順に並べた。
- III. 兩種の書き方が全く同一で、疑の起る憂のないものは、すべて省いた。

〔歴史的假名遣式〕	〔表音式〕	〔歴史的假名遣式〕	〔表音式〕	〔歴史的假名遣式〕	〔表音式〕	〔歴史的假名遣式〕	〔表音式〕
あう	おう	さふ	そふ	でう	じよう	へう	ひよう
あふ	おふ	ざふ	ぞふ	てふ	ちよう	べう	びよう
あを	おを	しう	しゆう	でふ	じよう	べう	びよう
いう	ゆう	じう	じゆう	なう	のう	ほ <small>(おと假音)</small>	お
いふ	ゆう	しふ	しゆう	なふ	のう	ほふ	ほう
えう	よう	じふ	じゆう	にう	にゆう	ぼふ	ぼう
えふ	よう	しやう	しよう	にふ	にゆう	ぼふ	ぼう
かう	こう	じやう	じよう	にやう	によう	まう	もう
がう	ごう	せう	しよう	ねう	によう	まふ	もう
かふ	こう	ぜう	じよう	のふ	のう	まを	もう
がふ	ごう	せふ	しよう	は <small>(つと假音)</small>	わ	みやう	みよう
きう	きゆう	ぜふ	じよう	ほう	ほう	めう	みよう
ぎう	ぎゆう	そふ	そふ	ばう	ぼう	やう	よう
きふ	きゆう	ぞふ	ぞう	ばう	ぼう	ゆふ	ゆう
ぎふ	ぎゆう	たう	とう	ばふ	ぼう	らう	ろう
きやう	きよう	だう	どう	ばふ	ぼう	らふ	ろう
ぎやう	ぎよう	たふ	とう	ばふ	ぼう	りう	りゆう
くわ	か	だふ	どう	ひ <small>(つと假音)</small>	い	りふ	りゆう
ぐわ	が	ぢ	じ	ひう	ひゆう	りやう	りよう
けう	きよう	ちう	ちゆう	ひふ	ひゆう	れう	りよう
げう	ぎよう	ぢう	じゆう	びう	びゆう	れふ	りよう
けふ	きよう	ちふ	ちゆう	ひやう	ひよう	わう	おう
げふ	ぎよう	ぢふ	じゆう	びやう	びよう	ゐ	い
こふ	こう	ちやう	ちよう	びやう	びよう	ゑ	え
ごふ	ごう	ぢやう	じよう	ふ <small>(つと假音)</small>	う	を	お
きう	きゆう	づ	ず	ふ <small>(おと假音)</small>	お		
ぎう	ぎゆう	てう	ちよう	へ <small>(つと假音)</small>	え		

執筆者氏名(順序不同)

<p>大和時代文學</p> <p>總説……………東京女子大學教授 藤次郎</p> <p>古事記……………東京女子大學教授 倉野田憲司</p> <p>祝詞・宣命・壽詞……………東京女子大學教授 次野田憲司</p> <p>風土記……………文部省 藤次郎</p> <p>萬葉集・記紀歌謠……………東京女子大學教授 久松義一</p> <p>同……………日本大學教授 森本吉</p> <p>同……………文部省 佐木信綱</p> <p>歌謠……………文部省 藤田徳太郎</p> <p>漢文・漢詩……………東京女子大學教授 山岸徳太郎</p>	<p>平安時代文學</p> <p>總説……………東京女子大學教授 久松義一</p> <p>物語……………東京女子大學教授 池田龜鑑</p> <p>同……………東京女子大學教授 入江相鑑</p> <p>同……………東京女子大學教授 西下經一</p> <p>和歌……………日本大學教授 中島光風</p> <p>日記・隨筆……………東京女子大學教授 池田龜鑑</p> <p>漢文・漢詩……………東京女子大學教授 山岸徳太郎</p> <p>歌謠……………東京女子大學教授 藤田徳太郎</p>
---	--

鎌倉室町時代文學

<p>總説……………東京女子大學教授 高木市之助</p> <p>歴史物語……………東京女子大學教授 大野木克豊</p> <p>戦記物語……………東京女子大學教授 沼澤龍雄</p> <p>説話文學……………東京女子大學教授 高津木武</p> <p>同……………東京女子大學教授 島津久基</p> <p>同……………東京女子大學教授 野村八良</p> <p>御伽草子・幸若舞曲……………東京女子大學教授 高島權一</p> <p>能樂・謡曲……………東京女子大學教授 島津久基</p> <p>能狂言……………東京女子大學教授 佐成謙太郎</p> <p>同……………東京女子大學教授 野村八良</p> <p>同……………東京女子大學教授 笹野堅良</p> <p>日記・隨筆……………東京女子大學教授 瀧田英二</p> <p>和歌……………東京女子大學教授 野村八良</p> <p>同……………東京女子大學教授 齋藤清衛</p> <p>同……………東京女子大學教授 松浦貞俊</p> <p>同……………東京女子大學教授 久松光一</p> <p>同……………東京女子大學教授 中島光風</p> <p>同……………東京女子大學教授 風巻景次郎</p> <p>連歌・俳諧……………東京女子大學教授 福井久藏</p> <p>連歌……………東京女子大學教授 志田義秀</p> <p>歌謠……………東京女子大學教授 藤田徳太郎</p>	<p>同……………東京女子大學教授 高木市之助</p> <p>同……………東京女子大學教授 大野木克豊</p> <p>同……………東京女子大學教授 沼澤龍雄</p> <p>同……………東京女子大學教授 高津木武</p> <p>同……………東京女子大學教授 島津久基</p> <p>同……………東京女子大學教授 野村八良</p> <p>同……………東京女子大學教授 高島權一</p> <p>同……………東京女子大學教授 島津久基</p> <p>同……………東京女子大學教授 佐成謙太郎</p> <p>同……………東京女子大學教授 野村八良</p> <p>同……………東京女子大學教授 笹野堅良</p> <p>同……………東京女子大學教授 瀧田英二</p> <p>同……………東京女子大學教授 野村八良</p> <p>同……………東京女子大學教授 齋藤清衛</p> <p>同……………東京女子大學教授 松浦貞俊</p> <p>同……………東京女子大學教授 久松光一</p> <p>同……………東京女子大學教授 中島光風</p> <p>同……………東京女子大學教授 風巻景次郎</p> <p>同……………東京女子大學教授 福井久藏</p> <p>同……………東京女子大學教授 志田義秀</p> <p>同……………東京女子大學教授 藤田徳太郎</p>
--	---

五山文學
江戸時代文學

總說……東京帝國大學教授 藤村 敬
 假名草子・名所記……東京帝國大學教授 水谷 不
 浮世草子……東京帝國大學教授 藤村 澄
 同……文部省編輯 吉田 澄夫
 同……東京帝國大學教授 城戸 甚次郎
 同……前名古藤野村大學教授 石田 元季
 同……長野女子專門學校教授 小泉 藤造
 同……國學院大學教授 山口 剛
 同……東京帝國大學教授 山崎 剛
 同……東京帝國大學教授 藤村 剛
 同……東京帝國大學教授 菅野 堅
 同……東京帝國大學教授 城戸 甚次郎
 同……東京帝國大學教授 小池 藤五郎
 同……東京帝國大學教授 山崎 剛
 同……東京帝國大學教授 藤村 剛
 同……東京帝國大學教授 小柴 值一
 同……國學院大學教授 山崎 剛
 同……東京帝國大學教授 佐佐木 信綱
 同……東京帝國大學教授 窪田 空穂

和歌……東京帝國大學教授 藤川 忠治
 俳諧……慶應大學教授 相原 弘
 同……文部省編輯 萩原 蘿月
 同……東京帝國大學教授 各務 虎雄
 同……東京帝國大學教授 志田 義秀
 同……東京帝國大學教授 野崎 左文
 同……東京帝國大學教授 高野 長雨
 同……東京帝國大學教授 高野 勘藏
 同……東京帝國大學教授 藤井 乙男
 同……東京帝國大學教授 守隨 憲治
 同……東京帝國大學教授 近藤 忠義
 同……東京帝國大學教授 高野 正巳
 同……東京帝國大學教授 佐田 久節
 同……東京帝國大學教授 和久 萬吉
 同……東京帝國大學教授 龜田 純一郎
 同……東京帝國大學教授 三田 村彦
 同……東京帝國大學教授 山口 剛
 同……東京帝國大學教授 山崎 剛
 同……東京帝國大學教授 窪田 空穂
 同……東京帝國大學教授 石井 直三郎

明治・大正時代文學

總說……府立高等學校教授 片岡 良一
 小說……東京帝國大學教授 石川 巖
 同……東京帝國大學教授 柳田 泉
 同……東京帝國大學教授 千葉 龜雄
 同……東京帝國大學教授 湯地 孝
 同……東京帝國大學教授 小島 政二郎
 同……法政大學教授 野上 豊一郎
 同……東京帝國大學教授 水木 京太郎
 同……東京帝國大學教授 德田 秋聲
 同……東京帝國大學教授 中村 星湖
 同……東京帝國大學教授 水上 瀧太郎
 同……東京帝國大學教授 吉江 喬松
 同……東京帝國大學教授 中村 武羅夫
 同……東京帝國大學教授 加藤 武雄
 同……東京帝國大學教授 宮島 新三郎
 同……東京帝國大學教授 舟橋 聖一
 同……東京帝國大學教授 沖野 岩三郎
 同……東京帝國大學教授 坪内 士行
 同……東京帝國大學教授 武藤 直治
 同……東京帝國大學教授 吉野 作造
 同……東京帝國大學教授 高須 芳次郎

評論……東京帝國大學教授 海後 宗臣
 同……東京帝國大學教授 五十嵐 力
 同……東京帝國大學教授 尾佐 竹猛
 同……東京帝國大學教授 長谷川 如是閑
 同……東京帝國大學教授 野々村 戒三
 同……東京帝國大學教授 畔上 賢造
 同……東京帝國大學教授 木村 毅
 同……東京帝國大學教授 本間 久雄
 同……東京帝國大學教授 千葉 龜雄
 同……東京帝國大學教授 齋藤 茂吉
 同……東京帝國大學教授 舟橋 聖一
 同……東京帝國大學教授 土田 杏村
 同……東京帝國大學教授 田部 隆次
 同……東京帝國大學教授 平林 初之輔
 同……東京帝國大學教授 大宅 壯一
 同……東京帝國大學教授 佐佐木 信綱
 同……東京帝國大學教授 金子 薫園
 同……東京帝國大學教授 窪田 空穂
 同……東京帝國大學教授 土岐 善麿
 同……東京帝國大學教授 齊藤 茂吉
 同……東京帝國大學教授 尾上 八郎
 同……東京帝國大學教授 石井 直三郎

装幀 吉村忠夫

日本文学大辞典 第一卷



の新聞記者を対象として書いたもので、誤謬と云ふよりは一種の觀察で、譯者自身の言の如く二人に聞いた話と自分の話として又他に話すつもりで書いたものである。人名も大半は誤謬名を用ひてゐるが、その中には藤子・小宮等の如く全く日本化されたものと、野村胡堂(原名フナエト)守安(ヘリユス)手嶋田(テナムラエ)等の如く、昔と幾分借りたものとある。或は或(ジャン・バルジャン)彌耳(マイリス)等は原語に漢字を當てたのみである。筋は食に傾いた或は或が唯一片の離れの森みによつて十九年間を牢獄に過した後、社會を離れたいために、あらゆる障害を排して奮闘せる雄々しい生涯の物語で、殆ど原作通りの筋を述べてゐる。「雄無情」と「羅宮王」(別題)は相

並んで誤香の二大名譯とされてゐるが、自らその間に怪誕がある。「羅宮王」は元來大衆小説であるから、よく誤香の筆に合つて、あの成功を得たが、「雄無情」は原作に比較すると、あれ程の名作を翻か通俗化し過ぎた傾向がある。例へば、ユーゴーの社會的正義の大理想が、誤香では通常の動機感化されてゐる。性格も善悪ともに幾分誇張されてゐる。それにも拘らず、或る點まで「ミゼラブル」の神髓を傳へ得てゐるのは、誤香にユーゴーと同じく正義を熱愛する心があり、それが行文の間に表はれてゐるからだと思ふ。

【備考】明治文壇に、ユーゴーを紹介した先覺の一人は森田思軒(別題)であるが、最初に「ミゼラブル」の翻譯に手をつけた人は、原題「愛麗斯」である。それは連字譯で、又相當良譯ではあるが、断片的なので、原作の面影を捉へ難い。福地健一の「あはれ浮世」は、この作を日本風に戯曲化したもので、原作の趣は殆どない。なほ「レ・ミゼラブル」には、豊島與志雄の空襲がある。【田中島】
【備考】熊樂(別名)熊間或は同狂言とも云ふ。【諸本】あひの本(半紙牛鹿橋本、刊年未詳)。狂言集成(赤陽堂刊所載)。【解説】一巻の間に、シテが前後装束をかへることが多く、この場合には大抵前シテの中入した後に狂言師が出現して、主題に就いて通俗的な説

明をする。即ち口上や、幕がはりや、能の補足をなすものを云ふ。その説明の様式には凡そ三種あり、所の者とて登場し、ワキの質問に答へる形をとるものを詰問。又は詰問といひ(例)田村、梅枝、末社神として出て、問はず語りに本社を起して、神徳を讃へて祝ひ舞ふものを末社問といひ(例)賀茂、白鶴。早打として舞出で、事件の急を觸れる形をとるものを早打問(例)鳥帽子折、羅生門)といふ。なほ詰問と云つて昔の間に替へる特別のものがある。これは多くその仕事や位取りが重い傳授を待つべきで、狂言方にとつて重き習とされてゐる詰問と稱するものに數へられてゐる。大藏堂(和泉流)それぞれその問や仕草に異同があるが、凡て前後場面の空気に上り重大な役目をして、全局の趣味を助成するものである。

【備考】同狂言の役柄分類(山崎樂齋撰)大正一四ノ四五。
相生獅子(例)石橋を見よ。
相問(例)相問を見よ。
相問(例)相問を見よ。
愛麗若(例)愛麗若。六段【成立】未詳。説書にも同名の曲がある。前後は同じ曲いが恐らくは説書が先であらう。寛文末年頃の刊行と思はれる十七行十六丁の輸入和字本(漢字不詳)は、比較的古いものと思ふ。今それによつて解説を加へる。

【解説】愛麗若は、二條藏人清平夫妻が初瀬川に新瀬して投かつた愛子である。その十三歳の時母は世を去り、八條殿の女雲井前といふ若い繼母を迎へた。雲井前は愛麗若に懸想し、侍女月小夜を介して執拗に口説かせたが、強く拒絶した。繼母は戀の叶はぬを憤り、二條家傳来の寶物友の太刀と所蔵とを盗み出して賣り、これを愛麗若の所爲であると誣ひた。清平は折檻のために若を庇木に縛した。その夜實母の亡靈が現れて罰を解き、伯父なる叡山の帥の阿闍梨の許へ行くと教へる。途上四條河原の護民工の者の世話になり、その翌日の夕方幸うじて通り着いたが、阿闍梨は不時の來訪を信ぜず、狐狼が我を欺くのだからとて追拂はせる。山を下つた若は、志賀の里で飢渴の餘り路傍の桃の實を取つて、畑の香の老妾に飲ませられる。老妾と連袂の縁父への遺書の小袖の袂に入れて傳技にかけ、叡山東麓の鶴生の巖に投身した。清平は遺書によつて繼母と月小夜の奸計を知つてこれを殺し、愛麗若は山王權現として祀られる。

【備考】各段には次のやうな見出しがある。
第一、あいの若(例)第二、藏人初瀬より下向并に六條判官謀叛の事。第三、御盛恩口井にみさき來り命を取る事。第四、繼母毒言并に愛麗若を出給ふ事。第五、愛麗若叡山に

文集【著者】倉田百三【刊行】大正十年三月...

アイヌ語

アイヌ語 アイヌ種族の言語【行はるる】...

土する限り、即ち全日本の地域に、アイヌが住んで...

は寧ろ當然である。ただ北奥、南羽には、今尚...

都合も無い言語である。音節は多く閉音節で...

形式、他動詞に於ては終然として一語の例外もなく...

アイヌ語

アイヌ語 アイヌ種族の言語【行はるる】...

の水は接尾の間に受けた影響にあらざることは...

ることは知られない。二重にこれを採つて、所謂...

の文獻は年代の明かな所では正保三年(1696)の...

であつて、「もしは草」の蝦和と相俟つて語語・アイヌ語、その何れからも語を檢索し得て、アイヌ語の手引は、之を以て「先」完成せられたる喜水七年(1850)の「蝦夷語彙」は、もしは草の焼直して、時流に投じて好事者の編纂したものに過ぎない。その他、喜水七年の「蝦夷風土記」(喜水七年)各元且の「蝦夷和行」(蝦夷風土記)(文化三年)にも多量の語彙があり、専らアイヌ語を集めた刊本に喜水七年の「蝦夷品彙」(和蝦及び蝦和對照語彙)の原本に能登屋吉の「蝦夷語彙」(文政三)がある。...

に至つて、空前のアイヌ語辭典が大成せられた。第三期は、維新後、我が國に來朝した英米人の北海道探査の研究時代に入る。この時代を形成するケムン(W. Denig)、ミル(J. Milne)、ケムン(J. M. Dixon)、サムズ(R. J. Sumner)の業績は、日本アジア協會報及び當時探査より出た雑誌「Chrysanthemum」誌上に發表されてゐる。...

初世に出てから四度改訂増補された。大正十五年(1926)辭書の第三版が出た時は、日常語の尙残したるもの及び神太方言が收録せられ、且つ巻尾にEnglish-Ainu 約百ページを附録し、かくアイヌ語學の上に全く一時期を劃成した。

つて来て、全く吟詠體に述べられるものであつて、是が正しく散文(アイヌ語に之を「ばらばらな言葉」)と「hak」といふ。口は「解解する」。口は「口」hakは「語・言葉」に對する律語(アイヌ語に之を「節もつ言葉」)と「hak」といふ。口は「節もつ言葉」は「持つ・有する」である。かうしてアイヌの生活では、全く實用的な律語或は律語の外は、ともすれば律語になる。...

ずしも不可解なことはない。【叙事詩】歌曲の中に、始祖の降臨、神々の起原、祭祀の由来、祖先の武勇談などを歌つてゐる叙事詩は最も注意するに足る。これ等の歌は単に聞いて楽しむものではなくして、アイヌの生活に取つては、聖經であり法典であると共に、又歴史であり哲學である。...

食べられ、感謝されることによつて初めて満足して天上のものに降られるのである。人間は神の恵みによつて幸福であり、神は人間に感謝され敬慕されて天上に榮えを増すのであるといふ。アイヌのこの思想が、具體的に歌はれてゐる無数の叙事詩が、その所謂神話なのである。時として、人間(悪魔)に對して、或は邪魔をして、人間(善魔)に對して、或は悪魔を懲らしめて、天上へも連れて行つて同族へ憤慨して以後人間へかまふなれと戒める神話が多々ある。...



アイヌの神話(後編)

び凡そ今日のアイヌの祭祀の盛衰、生活の淵源、神々を歌ひ傳へてゐる長大な叙事詩がオイナ(Oina)「聖傳」(傳承)と呼ばれる。アイヌ語でオイナカマイ(Oina Kamui)「傳承神」或はアオイナカマイ(Aoiaia Kamui)「我等の傳承する神」と讀む所以である。...

昔節にアクセントが来て多少長めに呼ばれ、末尾のrの次に、すぐ前のoの餘響が残つて、ユーカラと響く。ユーカラのヒーローは常にトマセンベチ(河の名)のシメタパカ(地名)人、或はユーカラカマイ(Yukar Kamui)「神曲」または小本島神(Kon-jan Kamui)と呼ばれる。...

主君信田の左衛門の後室を伴つて、浪々の身に心を砕く赤星頼母は甥の十三郎に主の命を救ふ爲め百兩の金を入用なことを打明ける。



（前編）折巻本陣の遺跡（花田麻呂）

出て行く。清松屋幸兵衛は駄右衛門を奥へ出して手厚くし、神の品物を差し出すと、駄右衛門は、誰ならばお金を残らずに所望だと刀を抜く。

れ、道を別にして逃げ、駄右衛門だけは鎌倉に隠れる事となる。五島藩は香合を賞父へ渡さうと戻つて来、南郷と共に捕手甲

を持つた宗之助が現はれ、清川、孔方十錢を落し天下の寶の慶のを惜んで、五十錢の松明を貸して獲させた香合のお蔭で、水底から香合を拾上げた事を知る。南郷の切腹、南郷、赤星、忠信の捕はれた事を知ると、天を知らず、駄右衛門は、善哉故に見送らうとする青

を授け、三幕目、清松屋の店から、四幕目、清松屋の五人男勢揃ひまでは、屢々上演される部分で、四幕目に於ける五人男のツラネは、好劇家の愛誦する所である。

承認する感傷の陳述を聞き、別に二人の眞犯人を導いてその疑を晴らしたが、旅僧は十三郎が生れる前に出家した兄で、弟の罪を負はうとしたものであつた。

埋の風習を疑した。（編者）頼母の愛を善くして頼母申と呼ばれた後徳の武士黒木申介は、妻青女娘小虎を作つて奈良の旅僧頼母に八方に留まり、頼母等の天井の裏を掘り出すが、由八は巧にその夫婦を刺して、青女を紫木鬼丸の密に周旋し、又小虎を連れて四天王寺の僧を頼らうとする申介を殺す。小虎は俄に現はれた頼母によつて救はれる。丁度此處を通りかゝつた頼母は、この事件を處理して由八夫婦を斬殺し、青女母子を無事に故郷に歸らした。

後徳頼母善吉の物語は、それらを總結した構想である。（影響）文化十一年八月大阪角の芝居でこの作を演じた狂言「定結納瓜腹」を發行した。作者は奈河崎助である。その翌年正月大阪の書肆河内屋天助、この歌謡狂言の根本を輸入にして印行した。前編四幕、後編三幕、京橋の間に二幕、又文政三年本書に附した「刀筆書石文（一名書屋風流）」が出た。馬琴唯一の門人櫻葉翁の作で、馬琴の助言添削を細らしたのである。〔原書〕前編に於いて事件が漸次複雑になり最後に頼母が義兵構成は、探偵小説として極めて効果的である。結論の種々外形的には前編と同じく頼母の裁判となつてゐるが、その中心をなす説話は寧ろ悲劇物と言はれるものである。〔書評〕青葉が遺體を葬る事、頼母が遺體を葬る事、答を見よ。

法然の弟子無住法師にその志を告げる。法師は法然の説教體裁の群衆の中に、内侍を見出し、内侍は今法然に於かれて是空といふ書で捨てし子に廻り逢ひ、その身も判別する。一方直實は頼母の頼主久直先と争ひ譲り、来て益々世を厭ひ、法然の弟子となつて名を獲せんと改め、是空、内侍に逢ふことを得た。是空は頼りに父を慕ひ直實と共に加茂の社に參詣してその業に併へんと、嘗て直實が内侍に頼つた教誨所持の名僧青葉翁を吹くと、満願の表示現あつたといふ谷の邊で教誨の業に會した。後空は須磨寺に住み、青葉翁は其處の實物となつた。又蓮生坊は自ら示寂の日を豫言して故郷に現した。

功力が讀へられてゐる。青葉の笛は一名葉二（一）と號し、その由来は博識三位が鬼から與へられたといふ赤雀門の鬼笛の名で知られて居るが（江談抄、拾芥抄、教訓抄、十訓抄、御宇記、續教訓抄（卷十二）には葉二に誤りあり）事になつて居る。本書では頼母が鬼の授けた其の笛の仙童である。通書にはこの笛が須磨寺の教誨愛の名竹とされて居るが、平家にこの笛の名を小枝としてゐる。

赤本猿蟹合戦



表ノ二



表ノ一



表ノ四



表ノ三



裏ノ五



表ノ五

紙表

裏ノ二

裏ノ四

七年二月申村座で、「西條野中の隠井」の外題で、草本齋宮大夫の浮瑠璃、坂東三津五郎の梅屋の由兵衛で上演した如きがそれで、場所は江戸に作りかへられるに至つた。かくて草本五郎の「阿呆娘」が生れる事となつたのである。

【参考】近年邦楽年表(義太夫の部)○世話浮瑠璃大全下巻 木谷不興○歌謡伎研究第二輯

【浮瑠璃解説】(一)

赤本 歌人 (三十六歌仙の一) 【氏姓】山部(生没)不明であるが、その歌から歌人として活動した時期を定めることによつて大體は推測される。即ち赤人の生年は最もおそく考へると藤原朝の半頃、早く考へれば飛鳥朝の中頃か終頃であらう。そこで赤人は藤原朝から奈良朝の初期にかけてその前半世を、奈良朝の中期頃(恐らく聖武の治世廿六ヶ年間頃)に、その後半世を造つたものと思はれる。【因縁】未詳唯「日本紀」や「公卿補任」等に彼の位官を記さない事、吉野、紀伊等に屢々從駕して赴いてゐる事、「萬葉集」に彼の名を記すに位官を併記してゐる所が「ヶ所」もない事等に依つて極めて舊儀の官人であつたと思はれる。なほ從駕の折の作は、大方は行幸地の山川の美を讃へると同時に帝徳の隆盛を讚美し祈願する内容と、一定の型に就つた表現とを持つ、ほめ歌である點から見て、宮廷詩人のやうな役をしてゐたのではなからうか。而して赤人は随分遠國へ旅してゐる。それが單なる遊樂であつたのか、官命を帯びて行つたのかは不明である。從駕で吉野、紀伊へ行つた外、東は淡路に富士を歌ひ(巻三、更に下總の關原に傳馬朝子の墓を訪つてゐる(巻三)、西は伊豫の湯(湯島)を訪ひ、播磨

の尾馬の浦を過ぎる作もある。この當時としては甚だ長途の旅を赤人が試みてゐたといふ事は、自然詩人たる彼の作品を考ふる上に、重要な點である。

【作目】「萬葉集」に出てゐる、後世の歌集等に採られてゐるものは、殆ど誤り傳へられたものか偽作だと考へてよい。彼の作だけを集めた和歌集「赤人集」も平安時代の初期まで

【萬葉集】の補訂の行はれたと考へられる時代は存在しなかつたと思はれる。彼の生前には勿論、その死後相當の年月の後に信憑すべき資料によつて編まれた彼の歌集の如きは無かつたものと見ねばならぬ。「萬葉集」に見ゆる彼の作品の数は巻三種部に、長歌四首、短歌十四首、巻三種部に、長歌一首、短歌二首、巻六種部に、長歌八首、短歌十五首、巻八種部に短歌五首、巻八種部に短歌一首、巻十七に短歌一首、總計長歌十三首、短歌三十八首、こゝに是非注意すべきは、(一)又種の歌数が甚だ少い事、(二)相同の作が全然無き事、(三)三首の種歌を除けば全部種歌である事、(四)三首の種歌を除けば全部種歌である事、(五)「赤人」を自然詩人だといふ批評は自然を材料にした歌の多い事からも、深く自然の本質を洞察してゐる事からも、至當な評言である。上に三首を除いた全部は種歌だと記したが、その種歌の殆どすべては自然を歌つた作で、印野の淺茅おし舞へき、自然の目長くあれば家は隱はゆ、(巻三)の如き抒情風のものである。なほどこかに天然自然と題した所がある。自然を自作に見出された。上代歌人中彼の右に出づる者を見出せない。特に抒情的な感傷を徹底的に却けて純客觀的な作風を採つてゐる點は、古今の作家にその類例がない。著名な「田子の浦に」

【参考】「み吉野の登山のまの」(巻六)、「清き河原に千鳥しば鳴く」(巻三)等の彼の代表作は、皆この純客觀的、非抒情的の態度から生れた名作である。この態度は彼の天性に根ざしてゐるもので、強い大きな情熱よりも徹底的に客觀的に材料を注視して現はすのが彼の傾向で、彼が長歌に劣り短歌に優れてゐるのもこれによるであらう。彼の技巧は、彼が自分の不足もなく再現してゐる。その表現の正確さ手堅さは古今同歩である。更に山河自然の美しさを鮮明に繪畫的に表現する技巧の巧みさは、千年後の俳人獨村に甚だ似てゐる。赤人の特色と言はれる清澄な作品の成功は、個へにこの正確鋭利な技巧の力に依るもの外ならぬ。最後に彼の多數の從駕の作は、型に就つた表現法で眞の精神のこもつたものではないが、これは彼のみを責むべきでなく、主として時代と境遇の罪である。

【影響】後世、柿本人麿と相違んで我が國の二歌聖と言はれてゐるのは「古今集」序文の「一人は赤人がかみに立たむ事かたく赤人は人丸がしも立たむ事難くなむりける」に基くのであらうが、これは平安時代初期の考へ、或は買の一人の考へで、奈良時代には、この二人を並べて當時の代表的歌人と考へてゐたとは必ずしも言ひ切れない。赤人の作品が餘りに少い點だけでもこの事は疑はれる。「萬葉集」巻十七に、大伴家持が池主へ興へた手紙の中に「山部赤人」に到らずと言つてゐるのを、従来山部赤人、柿本人麿と信じて奈良時代に於ける人麿、赤人二歌聖説の有力な證據として来たが、近頃山部の「山」は山上憶良を指すとの説が現はれて、この唯一の材料の價値

が危ぶまれてゐる。これは憶良が巻五の代表的作家として取扱はれてゐる程多數の作品を歌められて居り、憶良と大伴家とはごく親しかつた事からしても認容出来る。故に矢張り人麿と對比して赤人を後世崇拜したのは、奈良時代にはその確證がないから平安時代初期の考へに由来するとすべきである。

【参考】文學序説土井光知○萬葉集の鑑賞及其批評(赤本)

【赤本】草紙紙の一種【解説】赤本の名稱は、童幼の爲めの繪草紙なるため、表紙が丹色である所から附せられたのである。童幼の遊びである故に夙に散佚傳滅して、その

が危ぶまれてゐる。これは憶良が巻五の代表的作家として取扱はれてゐる程多數の作品を歌められて居り、憶良と大伴家とはごく親しかつた事からしても認容出来る。故に矢張り人麿と對比して赤人を後世崇拜したのは、奈良時代にはその確證がないから平安時代初期の考へに由来するとすべきである。

【参考】文學序説土井光知○萬葉集の鑑賞及其批評(赤本)

【赤本】草紙紙の一種【解説】赤本の名稱は、童幼の爲めの繪草紙なるため、表紙が丹色である所から附せられたのである。童幼の遊びである故に夙に散佚傳滅して、その

が危ぶまれてゐる。これは憶良が巻五の代表的作家として取扱はれてゐる程多數の作品を歌められて居り、憶良と大伴家とはごく親しかつた事からしても認容出来る。故に矢張り人麿と對比して赤人を後世崇拜したのは、奈良時代にはその確證がないから平安時代初期の考へに由来するとすべきである。

【参考】文學序説土井光知○萬葉集の鑑賞及其批評(赤本)

【赤本】草紙紙の一種【解説】赤本の名稱は、童幼の爲めの繪草紙なるため、表紙が丹色である所から附せられたのである。童幼の遊びである故に夙に散佚傳滅して、その

が危ぶまれてゐる。これは憶良が巻五の代表的作家として取扱はれてゐる程多數の作品を歌められて居り、憶良と大伴家とはごく親しかつた事からしても認容出来る。故に矢張り人麿と對比して赤人を後世崇拜したのは、奈良時代にはその確證がないから平安時代初期の考へに由来するとすべきである。

【参考】文學序説土井光知○萬葉集の鑑賞及其批評(赤本)



(畫巻演) 頁初紙表(鳥藏文大觀編)

起原を正確に見ることに苦しむが、現存せるものによつて推せば、大體繪草紙、或はその少し以前から存在したやうである。始めは半紙半張の小形の繪草紙であつた。謂はゆる赤本である。後に京保領からやゝ大形となり、

大半紙半截の中本形となつた。これが赤本の定式形である。尤もその後には墨豆本として極めて小形の赤本も出たが、これは勿論意功一時の玩具であつた。丁数はその始めには一定しなかつたが、享保頃から五丁を以て一冊とする定めになつた。装幀は丹表紙に黄色の染紙の外題を貼りつけただけであつたが、その裏を白に變へ、また軸を描くなどの工夫も行はれるやうになつた。内容は桃太郎・猿蟹合戦・文圃茶室などのお伽噺を、語られてゐるが、時に金平浄瑠璃物、また歌舞伎物の輪廓を描き出したものもある。これ等はすべて正月の刊行であるだけに、何等かの祝ひの意を寄せてゐる。長者嶺のあることは勿論であるが、妖怪退治などもその意味から題材とされた。「初春のいはひ」の如きは、初春の行事を旨としたもので、自ら當時の世相に關係する點に於て、注意すべきである。赤本は繪を主として、文字としては僅かに簡単な筋書き又は短い會話を書き込むに過ぎない。従つて文學としては殆ど價値を認められないが、後の賣表紙・合巻を導き來つた歴史的存在意義を考ふべきである。殊に粗書用紙が今日からは古拙の風格を示して、また鑑賞するに足りる。作者の名を著すことはなく、重工も始めには署名しなかつたが、近藤清春がその名を記し始めた。續いて羽川珍重・島居清滿・西村重長等の名を見る。板元としては藤屋屋が最も多い。(並見参考)

赤門派 明治二十八年一月「帝國文學」が、東京帝國大學文科内の帝國文學會によつて創刊されるや、同刊出身の後筆相續いで現はれ、評論に創刊「美文讀文」に感んに活躍し、忽ちして文學の一勢力たるに至つた。高山樗牛・大町桂月・佐々木啓武・島村抱月・島村新島・島井南江・津川龍風・土井晚翠等は、その尤なるもので、當時世人はこれ等の人々を目して赤門派と呼んだ。蓋し、東京帝國大學の門は赤く染られて、舊加賀邸の正門たるので、帝大を赤門と通稱したところから、この名稱が起つたのである。因より硯友社・早稲田派などの如く、グループとしての結集があつたのでないから、以上の人々が各自の據る所の立場を得て、「帝國文學」を離るゝに及び、赤門派の名稱赤門のつから消ゆるに至つた。その後、時に赤門派の名を口にする者があつても、それは單に帝大出身者を指す輕い意味に過ぎない。(並見)

秋篠月清集 歌集 四卷 六家集本二冊 別名「單に月清集」とも略稱する。【著者】藤原良經(名譽)良經は作者を式部史生孫孫月清と呼んだ。史生とは四郎官の下に屬する八位相當の車官である。福原の地位に名づけたものである。【成立】現存の本はその内容から考へて藤原俊成が元久元年十一月二十六日に發刊した以前に、良經の自撰したものであらう。【組織・内容】本書の組織を見ると、先づ六家集本では、卷一に「花月百首」「夜夜百首」「十訓百首」「歌合百首」「治承百首」の五つの百首を載せ、卷二に「南海漁父百首」「西洲隱士百首」「院初度御百首」「院第三度百首」「老若歌合五十首」「句題五十首」の四つの百首と二つの五十首を載せ、卷三・卷四には以上の如き編まれるもの以外の歌を分類して収めてある。即ち卷三には四季

部(春五十五首・夏四十九首・秋百六十五首・冬七十三首)、卷四には祝部七十二首・雜部五十二首・雜部二十五首・雜部七十三首・真經部六首・雜部二十二首・神祇部十六首・雜部二十首を載せてある。集中の作歌年代の判明する限りでは、建仁元年十一月十五日以後の歌を見ず、建仁三年(即ち九百九十一年)以後の歌を異にする定家本と稱せられるものがあつた。即ち藤原朝文所編の「飛鳥井朝野集」とあり、六家集本所載の百首五十首の目錄を載せてゐる。他の冊には、内題に「式部史生秋篠月清集」とあり、六家集本の三・四の巻の内容を月清集一・二・三・四の巻として収めてある。そして次の如き奥書がある。

是御平生之時所被注疏之本也夢後昏情之祖一見了御本體返上之間不見中書之草字誤無極不時覺事不能直行

安貞二年五月二日

藤原良經

此一冊加藤見候之東京中納言定家朝臣筆勿論也 左羽林將良廣 在判

即ち良經が平常自撰して、定家が寫し置けるものを原本として、朝野が寫したと云ふことを示してゐる。「式部史生」「百首愚草」など云ふ自ら單うした名稱、上記の奥書等によつて考へると、本集は先づ自撰したものがある。つたらし、後の編者の手によつて、二様の體裁をとつたのであらう。また六家集本の秋部に「内大臣のこと持りける頃無動寺の法印のもと「遣しける」と前書ある歌に、「此二首定家本に傳入之但實傳部に入」とある附記に依つて、上記以外の定家校本の存在も想像

されて居る。また明應二年の寫本には俊成・家隆の合點をつけてある點から、良經自撰の本書草稿の成立が、俊成の發刊以前にあつたらうと推定されてゐるのである。(並見参考)

【參考】月清集一巻(本居宣長著書(六))

後京補良經傳記(源氏物語(本居一八八)) (餘遺)

顯季 歌人【姓】藤原【別號】六條

修理大夫、母が六條鳥丸(一説六條藤原朝臣)に在つた爲め。【生没】天寶三年に生れ保安四年(七六三)九月段、享年六十九。【父母】父は隆經、實季の猶子となる。母は從二位猶子、白河院の御乳母。【國傳】諸國の守を経て修理大夫(轉作)に任じ、從三位に叙したが參議に任ぜず太宰大貳を兼ねた。白河院の御寵愛を蒙ることが深く、

實 曾て前光に所

上から、所

領を奪はれて院

領を義光に所

讀るやう御

識しになつ

た。義光は

恩に感して

守從の位を

授け、常に

彼の身邊を

守護したと

いふ(十訓抄

九)傳記は

彼を通じて

あかち あきす

させた。俊頼とは極めて親密であつた。...

秋月物語

【名題】女主人公が秋月の月に救はれて、その...

の親子物製愛蔵『ふせやの物語』(別項)とは...

廟じ、尼も意を覺つて二人を對面させた。九...

の院宣を授けて、『詞花集』(別項)を撰し、仁平...

Table with 2 columns: Year and Author/Title. Lists various literary works and their authors from the Edo period.

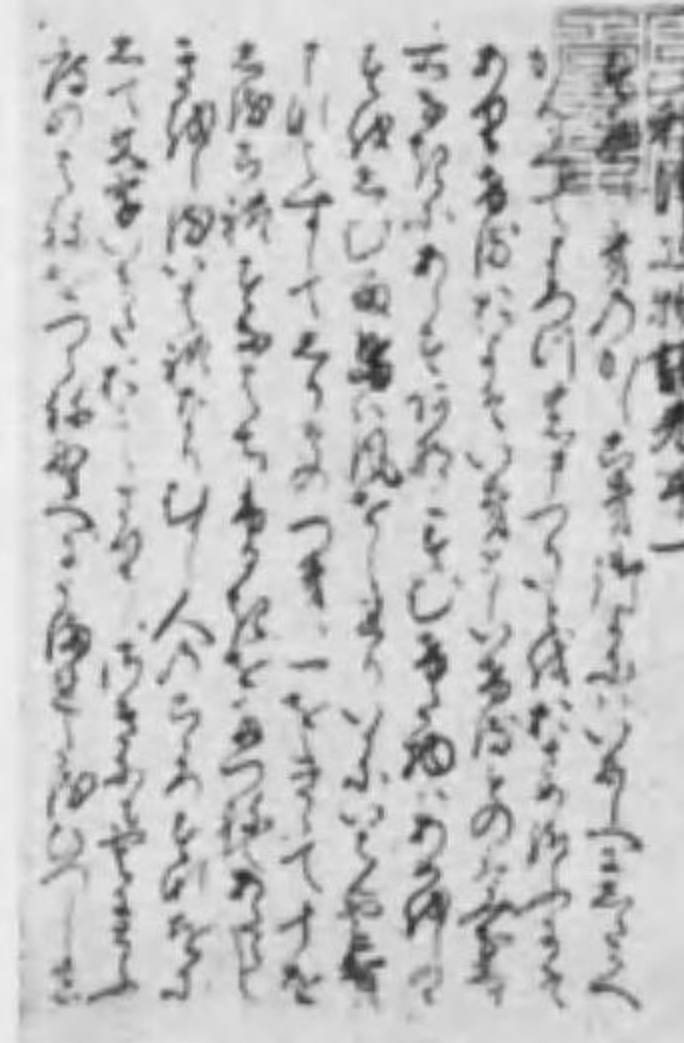
秋田雨雀

【名題】作家 【本名】徳三 【生年】明治十六年二月二日、青森縣津...

後、印度思想の研究によつて宿命論的、懷疑...

が、然らずとするを疑義を下らないもので、...

つて歸り来ようと思ひ、住吉明神においとま...



秋津島物語(藤野野矢)

あきた あきり

多くは書紀の本文によつて居るが、中には「書目」によつた所もある。
【價値】文體は素樸で雅馴味がある。序文は「雲にとぶ鷹の羽をつらね、野邊に生れたる羊のひさまづける」...

を失はない。著者のこの細心の用意を以てすれば、必ずや大観に於けるが如く、序に對する結びが無くしてはならない。
【附記】新編御代通記(新編御代通記)...

新興の精神は見えない。懸詞によるユーモアや嘲笑も注目される。
【商内神】酒落本 一冊 【作者】十返舎一九(名無) 商賣の神、即ち惠比壽の意。...

ど。【生後】享保十九年攝津會根崎に生れ、文化六年(西曆一七九九年)六月二十七日、京都百萬遍屋敷の利富信樂邸に歿す。享年七十六。
【關西】關西の田代氏、丹波米上郡上田村の出身で多田源氏の末流、祖父茂兵衛源助、上田と諱つて致官し大阪に假寓、父茂助源吉は...



田上秋成像

者風を脱し文學の本格的研究に入り、三十五歳の時、その古典詩と雅俗趣味とは彼をして不朽の名著「雨月物語」(別題)を成さしめた。
【著述】上田秋成全集(別題)刊行會刊、秋成遺文に収録。...

た。かくて生前自ら墓碑を建て、身邊の舊稿は井底に沈め、文化六年夏、數年七十六年の生涯を閉ざした。
【著述】上田秋成全集(別題)刊行會刊、秋成遺文に収録。...

不平不満は、自ら諷刺となり皮肉となり毒舌となつて進つたのは、寧ろ自然の傾向であつたらう。併しこれを見ても彼を別介奇矯と評し去るには餘りに彼は師友に對して誠情であり、又自己有様も正論を得て居た。
【著述】上田秋成全集(別題)刊行會刊、秋成遺文に収録。...



秋成小人心算(稿草)

では、通俗平明な素材と清新な個性的表现とが當時の因襲的な歌人の間に異彩を放ち、萬葉古今の中間を行く歌調は風格拘束すべきものが多い(藤野野矢)。
【著述】上田秋成全集(別題)刊行會刊、秋成遺文に収録。...

商人家職訓

【作者】江戸屋其儀【名稱】正しくは「あきん」と訓む。【刊行】享保七年正月吉日、谷村清兵衛撰【解説】八文字屋物町人物の中...

商人世帯

【作者】八文字屋其儀【名稱】精しくは「商人世帯」である。商人世帯の心得である。【刊行】享保七年...

【作者】江戸屋其儀【名称】正しくは「あきん」と訓む。【刊行】享保七年正月吉日、谷村清兵衛撰【解説】八文字屋物町人物の中...

【作者】江戸屋其儀【名称】正しくは「あきん」と訓む。【刊行】享保七年正月吉日、谷村清兵衛撰【解説】八文字屋物町人物の中...

あきん

【作者】江戸屋其儀【名称】正しくは「あきん」と訓む。【刊行】享保七年正月吉日、谷村清兵衛撰【解説】八文字屋物町人物の中...

【作者】江戸屋其儀【名称】正しくは「あきん」と訓む。【刊行】享保七年正月吉日、谷村清兵衛撰【解説】八文字屋物町人物の中...

【作者】江戸屋其儀【名称】正しくは「あきん」と訓む。【刊行】享保七年正月吉日、谷村清兵衛撰【解説】八文字屋物町人物の中...

【作者】江戸屋其儀【名称】正しくは「あきん」と訓む。【刊行】享保七年正月吉日、谷村清兵衛撰【解説】八文字屋物町人物の中...

【作者】江戸屋其儀【名称】正しくは「あきん」と訓む。【刊行】享保七年正月吉日、谷村清兵衛撰【解説】八文字屋物町人物の中...

で、制し困じた阿清の長が神宮に申し出で、官制も償つて公けに奏上すると、次盛は却つて激怒し、一族を集めて費の額を捕らざるを妨がした。この由を官制から告げたので、阿清は軍勢を催し大盛を襲つた。生捕られた次盛はふしげくと定まり、後悔して謝つたが赦されず、世のおきて通りと海に沈められた。この浦は安清明神が誓の守をして居られる爲め昔が賑しいのであるが、その後、次盛の怨霊の爲め疫病の流行甚しく、僧行儀が蘇りつたが休まず、三安友盛といふ神主が小祠を建て、君長年中、この祠を造り更へた時の棟札が、攝津の天王寺にあつて「平氏八幡社三安友盛奉行」とあるので、事の由が明かになつた。

【参考】室町時代小説集解題 (A世) あこぎの平次 (あこぎの浮瑠璃 五段) 時代物【作者】未詳【成立】未詳【舞台】山本土佐後正本、十行二十四丁本、京都山本九兵衛板【題材】古今六帖の「逢ふ事も阿清が浦に引く細もかす重ならば人も知りな」の和歌と、伊勢の阿濃の皇太神宮の魚食の爲めの禁漁区警備記とが、結び付いて作られたと思はれる「阿清の草子」(別題)や、漢曲「阿清」によつたものである。

且つ村上に傳家の賣刀飛龍丸の献上を強要し、これを拒まば切腹させようとしたが、この奸計は飛龍丸の奇蹟で破れる。(二段)戀の叶はぬ意態で將校は荒川に就かれ、近頃は行春の許に遇れる。荒川は行春の郎を憐れんだので、行春は娘と共に辛うじて落ちて娘の傳家人之介の庵室に迎り着く。家人之介はこれより先き、娘に不義は無いと主君將監に反抗し、勘當されて隠遁した者である。二人は家人入道の勲に従つて伊勢路へ落ち延び、家人は伊勢阿濃郡鳥ヶ崎に落着いて近衛と同様は追手を防ぐ。(三段)虎口を逃れた行春は、名を阿清の平次と改め、浦人となつて年月を送り、既に十二歳になる竹葉、七歳になる友若といふ二人の子がある。生計に窮して太神宮の御贄の爲めの禁漁の場所へ、密かに網を入れて居た。ところが或る夜妻の止めるを聞かずに海に沈められた。遺物を波打際に取り上げた上、更に高札を立てて諸人の見せしめとされ、母子三人は遺棄された。一方、荒川の追手を防いだ家人入道は、名も西遊と改めて行春の跡を尋つて伊勢へ尋ねて来たが、網に引返す上、更に行方を捜して東國へ廻り、都に引返す。阿清は横死の願末を物語り、妻の所在を告げ、形見として嫁に埋められた片袖を渡す。

【参考】大和春日の里に西遊を襲いて居る三人の親子の許に尋ねて来た西遊は、病中の母(近衛)に形見の袖を示してその夜の模様を物語ると、その袖を握り締めたまゝ、婦人入道。西遊は竹葉、友若を助して、白父竹葉と父の仇を討たせようといふ丹波(旅立つ「竹葉友若」) (五段) 荒川伊達右衛門は、主家を横領して

隠者を極めて居る。機を窺つて居た西遊は、荒川が青森山で昇野を催した日、竹葉友若を軍資に扮させ、荒川に近づいて討たせようといふ計を企てた。時に父平次の亡霊が現れて、平次の亡霊は、西遊が取出して示した長谷寺の開山道徳上人の名號の功徳で成佛する。

【参考】古浄瑠璃によく見るところの戀愛的動機に基づく家騒動と復讐譚とを取合せた仕組である。三段目の切阿清の浦の段は漢曲「阿清」の劇案で、こゝが全篇の山となつてゐる。「史的地位」阿清の傳説を浄瑠璃に仕組んだものとしては本曲が最も古いらしい。この劇案改作に、西澤一風の「阿清」と「田村實隆合戦」(別題)とがある。一風の「阿清」は、寛永五年三月、備久末松山」と同時に豊竹座に上場されたものかと思はれる。八行十五枚の短篇で、本曲の三段と四段とを襲案して、浮世草子張りにしたものである。

【参考】近世浄瑠璃考説浄瑠璃作者としての西澤一風 (黒木) 阿古義物語 (あこぎの義物語) 讀本 前編四巻四冊、後編六巻六冊【名題】詳しくは「阿古義物語」又一名を「大徳十人斬」といふ。【作者】式亭三馬(前編)、二十世南無笑齋(後編)【舞台】歌川豊國・歌川國貞(前編)、歌川國安(後編)【刊行】前編、文化七年、江戸鶴屋金助刊。文政九年後編を併せて、大阪内屋茂兵衛等刊【讀本】輸入文庫、式亭三馬集(近代日本文学大系)【題材】巻頭三馬本阿清草子や阿清浦事蹟並に地名考證を擧げて、これが題材を示してゐる。漢曲

【参考】東夷西遊記七十一卷奇味多代女の曹の漢文の序、斷簡七三三(其具、二回)の跋がある。多代女は九十の高齡を保つて、慶應元年八月二十日歿し、須賀川の十念寺に葬られた。朝顔日記(あこぎの朝顔日記) 浄瑠璃「生霊朝顔」を見よ。朝顔の露の宮(あこぎの朝顔の露の宮) 再版の時改題したと「新日本小説年表」に記してあるが、再版後も、改題本でないものも重版された。

【参考】東夷西遊記七十一卷奇味多代女の曹の漢文の序、斷簡七三三(其具、二回)の跋がある。多代女は九十の高齡を保つて、慶應元年八月二十日歿し、須賀川の十念寺に葬られた。朝顔日記(あこぎの朝顔日記) 浄瑠璃「生霊朝顔」を見よ。朝顔の露の宮(あこぎの朝顔の露の宮) 再版の時改題したと「新日本小説年表」に記してあるが、再版後も、改題本でないものも重版された。

【参考】東夷西遊記七十一卷奇味多代女の曹の漢文の序、斷簡七三三(其具、二回)の跋がある。多代女は九十の高齡を保つて、慶應元年八月二十日歿し、須賀川の十念寺に葬られた。朝顔日記(あこぎの朝顔日記) 浄瑠璃「生霊朝顔」を見よ。朝顔の露の宮(あこぎの朝顔の露の宮) 再版の時改題したと「新日本小説年表」に記してあるが、再版後も、改題本でないものも重版された。

はれ又その家に押入つた古香と廻り合ひ、左門の情によつて鎌倉に落ちのびるに會し、且つ實兵衛にも邂逅し、蘭軍の謀謀に依つて巧に運平の館に忍び入り、三助の助力を得て運平を討ち取つた。

【参考】作者が巻頭に擧げた注意に盡きてゐる。忠義節操を記して勳善の一編とし、奸邪の事を録して懲惡の一助とし、因果應報を示すといふのである。そして變化と興味を本位として、浄瑠璃歌舞伎にも扱はれてゐる阿清平次の物語を取り、情義談を結びつけてゐる。二世楚滿人の作意も亦これを繼承したものである。「史的地位」序文及び注意による、文化三年下總の佐原に在つて起稿し三回まで書いたとある。馬琴と京傳とが讀本を以て拮抗し互に競つてゐた時で、負けじ魂の三馬をも動かしたものであらう。馬琴張りの考證や引用書目等を並べ、開巻阿清の歌を紅毛擬きの詞案にして、世俗を驚かさうとしてゐるが、前編の挿案を賞めた馬琴も、作者の工夫で精妙ではあるが珍らしくらずと言つてゐる。初め全部八巻の計で、前編四巻だけ刊行し、遂に後編の成らなかつたのを見ると、餘り問題にはされなかつたらしい。式亭雜記に自ら「此よみ本はげれたと言つてゐる。後編は楚滿人が門人として局を結んだといふまでのものである。

【参考】馬琴は、その術學を賞め、師向等に就いても批評論評してゐるが、流石に才筆で、彼の神史中の佳作であらう。完結されなかつたのは残念である。これを編んだ後編はその遺意に従つたものらしく、事件の照應に不自然な所なども見えるが、主要人物たる豪傑白浪運平の前夜一貫して描かれてゐるのを多と

【参考】馬琴は、その術學を賞め、師向等に就いても批評論評してゐるが、流石に才筆で、彼の神史中の佳作であらう。完結されなかつたのは残念である。これを編んだ後編はその遺意に従つたものらしく、事件の照應に不自然な所なども見えるが、主要人物たる豪傑白浪運平の前夜一貫して描かれてゐるのを多と

戸近世地誌史 重友近

【著者】藤井高尙【刊行】文政二年【解説】

【著者】藤井高尙【刊行】文政二年【解説】

朝忠

【朝忠】歌仙(三十六歌仙の一)【姓】藤原【別號】土御門中納言

朝寝坊

【朝寝坊】幼名藤原【生没】安永六年に江戸

浅瀬のしるへ

【著者】藤井高尙【刊行】文政二年【解説】

【著者】藤井高尙【刊行】文政二年【解説】

朝比奈

【朝比奈】歌仙(三十六歌仙の一)【姓】藤原

朝寝坊

【朝寝坊】幼名藤原【生没】安永六年に江戸

戸近世地誌史 重友近

【著者】藤井高尙【刊行】文政二年【解説】

【著者】藤井高尙【刊行】文政二年【解説】

朝忠

【朝忠】歌仙(三十六歌仙の一)【姓】藤原

朝寝坊

【朝寝坊】幼名藤原【生没】安永六年に江戸

浅瀬のしるへ

【著者】藤井高尙【刊行】文政二年【解説】

【著者】藤井高尙【刊行】文政二年【解説】

朝比奈

【朝比奈】歌仙(三十六歌仙の一)【姓】藤原

朝寝坊

【朝寝坊】幼名藤原【生没】安永六年に江戸

大阪の書林河内屋太助、子の代になつて、馬

を知り難き遊技を加賀に向ひ、途に郷土相向

光と城中に會して義邦を救ひ出し、呼鷹奮戦

【梗概】近頃は人間が賢くなつて、八宗九宗に

『小説』 津州の老女お杉は共に悲... 津州の老女お杉は共に悲... 津州の老女お杉は共に悲...

『小説』 津州の老女お杉は共に悲... 津州の老女お杉は共に悲... 津州の老女お杉は共に悲...

『小説』 津州の老女お杉は共に悲... 津州の老女お杉は共に悲... 津州の老女お杉は共に悲...

『小説』 津州の老女お杉は共に悲... 津州の老女お杉は共に悲... 津州の老女お杉は共に悲...

『小説』 津州の老女お杉は共に悲... 津州の老女お杉は共に悲... 津州の老女お杉は共に悲...

『小説』 津州の老女お杉は共に悲... 津州の老女お杉は共に悲... 津州の老女お杉は共に悲...

『小説』 津州の老女お杉は共に悲... 津州の老女お杉は共に悲... 津州の老女お杉は共に悲...

『小説』 津州の老女お杉は共に悲... 津州の老女お杉は共に悲... 津州の老女お杉は共に悲...

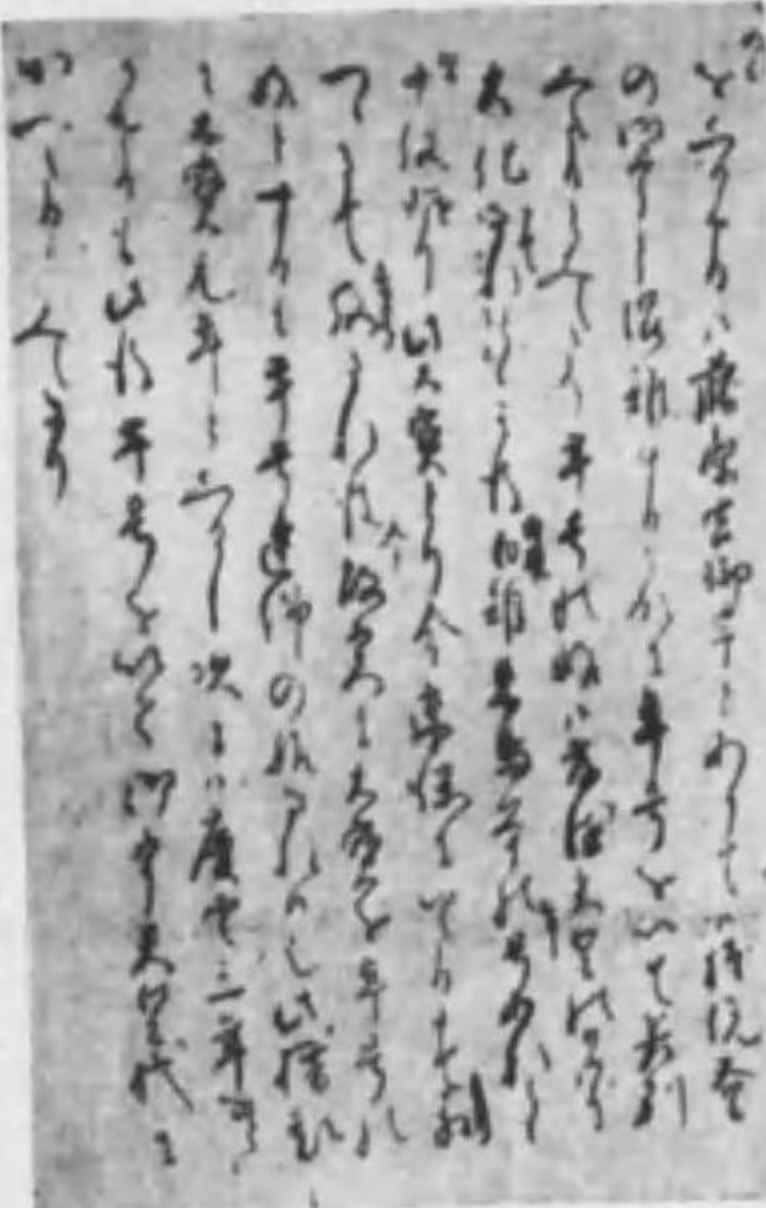
【系圖】

- 信友
 - 在漢集
 - 直子
 - 高稚
 - 若生子
 - 春滿
 - 夏蘭
 - 御風

に仕へ種々の下問に應へたり、諸國貢賦の舊記や文庫の官本査問の囑をうけ、校訂をま行つた。この間に種々の在漢を代行に仕官せしめ自分は歸郷した。歸郷後にも國學の研究を怠らず、子弟の爲めの講義を絶えず行ひ、「萬葉集」等に對する講義も多くつけた。「創學校」を上げて、學校建設の事を計畫したのは六十歳の時であつた。六十二歳、中風を發し、それから活潑も意の如くならず、多く計畫せられた著書も大抵未完成のままで没した。しかし、荷田一門に多くの學者を輩出したのは、春滿の薫陶宜しきを得たためであらうし、殊に晩年賀茂實淵を門人として得たのは、春滿にとつても、又近世國學の傳統にとつても幸な事であつた。

【人物】春滿の性格は風流に富み、熱情的であつたらしい。親しかつた赤松義士大高忠雄に、吉良家の繪圖を興へて力を盡したといふ話がある。

○國學史編纂者大庭(重定)著「國學全史」卷八頁



などもその一例である。同時に父親族故舊にも厚く、彼の一門から學者が輩出したものも、春滿の性格の力が大きかつたと思はれるし、彼が長女茂子の生んだ眞珠を杉浦風頭に嫁せしめた時の手紙など懇切な彼の人物の一面を示して居る。「創學校」の上請には彼が一學究に止まらないことが明かにされて居る。この春滿の氣概と熱情と親切とが、近世國學を生み出した大きな原動力となつたのである。

【著書】荷田全集(新編)三卷(萬葉集)中、(別項)○萬葉集(和名訓)○萬葉集(古)○萬葉集(新)○萬葉集(和名)○萬葉集(古)○萬葉集(新)を改題して書き改めたもので、卷首に「荷田春滿の書」云々とある。○萬葉集(和名)○萬葉集(古)○萬葉集(新)○萬葉集(和名)○萬葉集(古)○萬葉集(新)を改題して書き改めたもので、卷首に「荷田春滿の書」云々とある。○萬葉集(和名)○萬葉集(古)○萬葉集(新)○萬葉集(和名)○萬葉集(古)○萬葉集(新)を改題して書き改めたもので、卷首に「荷田春滿の書」云々とある。

○神代卷代註(一)○神代卷代註(二)○神代卷代註(三)○神代卷代註(四)○神代卷代註(五)○神代卷代註(六)○神代卷代註(七)○神代卷代註(八)○神代卷代註(九)○神代卷代註(十)

あづま物語 假名字「一作」名義 あづま男の物語の義【作者】未詳。徳永種久の作といふ説があるが疑はしい。【諸本】本書の原本は、もと岡山と新吉原玉屋山三郎の二個所にあつたが、今その所在不明で、極めて稀本である。この二本を寫したものが今多く傳はつてゐる。これについて、神澤修彦と豊芥子との説を綜合すると、初版は紙數二十五丁で、繪が三所あり、終半丁の末に寛永十九年六月廿日はんや清兵衛開帳」とあるもの。再版は終に二丁増補され、二十七丁裏の末に「寛永二十年九月廿日」と彫入れ、初版の奥半丁はその儘二十七丁の次になつてゐる。なほこれには二丁丁表の首に「一、半兵衛内云々」の一行情が入木してある。又右の増補二丁を削つて、別行二丁、内に繪半丁の追加を最後に添附した一本もある由で、即ち初版、再版増補、三版追加の三種がある。豊芥子が岡山本の増補を影寫して、更に玉屋山の追加を書き加へたものが今日傳はつてゐるがそれだ。同書には豊芥子の書名がある。

【内容】あづまのものを寛永十九年の夏、故郷を見捨て、江戸に来り、一二の友人と先づ上野に參詣、御城を望見し、不忍の池谷中の寺、淺草觀音を拜し、芝原町の繁昌寺を眺め、袋町に入つてまごつくうち、神船の上頭が、やりにかぶるを伴ひ、美々しく新橋り少くを見て、東男は不審に思ひ、或る人に問へば、これどうき川竹の流に沈む人々と聞かされる。さては白拍子であつたか、と白拍子の由来を説き、又成人は太夫、格下、騎女郎の階級に及び、説明をなす。これより興に乗つて腹内一見に及ぶ。

あそび

【一、おやち内】 あはち まんこ まんよ おはな おまん ては おせん こはた よしの たゆふい おり とし廿三 ある人はいく、かうしのうちにしてさむい つくし御かたち見させ、たまごこそ、あめがしたにけれなき、なだかき、きみておはします、まづはりあひだいにしと、御すがたいふに、たへなればしたはざると、いふひとなし、あわれこのきみの、御なによそへしゆつくり、たまへとありければ、あづまおとこ、とりあへず きみあはしほしほのいをりにしなん ひしきものにはそををしつゝも 右のやうな書きぶり、腹内を軒並に名を掲げ、太夫には一々品評を加へ、結局 一、 たゆふ 七十五人 一、 かうし 三十一人 物舎九百八十七人 一、 はし 八百八十一人 の物名客が出來てゐる。【解説】要するに元吉原の案内書即ち細見である。前半の東男が故郷からはる／＼出て來て、吉原に辿り着くまでの紀行の部は、この書の發端で、後々の評判記細見の開口(序文)に當り、その他問答體の文の如き、江戸時代に行はれた、あらゆる評判記、細見類の源流をなしたものである。併し文は拙く、假名遣の誤り多く、和歌の如き三十一字を並べたといふに過ぎない。文學の才あ

る人の作ではなく、何人か歸郷が、木強な東男の紀行めかして書かれたものらしい。若しこれを徳永種久の作とする、紀行以来二十年を越えて、彼は依然たる舊阿彌で、何等の進歩も見ておられないの疑はざるを得ぬ。なほ雑誌「江戸生活研究」第三年一號「あづま物語論」中に、徳永種久が否認した三田村氏の説がある。尤も「あづま物語」と「あづま物語論」は、一作者の手になつたものに相違なく、吉原の事は、この物語に詳説したから、「色香酒」の方には、省略した形跡が見えてゐる。いづれにしてもこの書は、寛永時代の江戸の遊樂、元吉原の唯一の細見として、評判記、細見の爲めに道を開いたものであり、貴重な風俗研究資料であり、且つ遙に浮世草紙の先驅をなしてゐるものである。【参考】あづま物語 一巻(豊芥子書)本(書庫蔵)會蔵(○)吉原書籍目録(新詳書目録(新詳書目録(三))) 吾妻問答(別項) 連歌書(一)【著者】宗祇(別項) 岡田川【名義】文明二年三月二十三日の自跋によれば、武藏國岡田川近きあたりに寓してゐた時、人の間に答へたところであつて、それに依つて岡田川といふのである。吾妻問答の稱は、二條良基の「就波問答」(別項)に倣つたものであらう。【諸本】内閣文庫(圖書寮)等に古寫本があり、連歌をだまきや、群書類從連歌部に收められてゐる。【解説】古來の連歌を上古、中古、當世の三期に分ち、その代表的作家とその佳句を挙げ、後成定家以來、和歌の理想としてゐた長高、幽玄有心の體を、この道の指針とすべきものとなし、附句の法や、作法等も細かに説示してあるなど、宗祇が五十年代當時の連歌觀を

の評判に據ると、羽左衛門が眞の辨慶と天狗の扮した辨慶との二役を演じたため、その區別が判らぬと批難されてゐるが、單に長唄の曲として見れば、明和期を代表する名曲の



【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺
【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺
【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺

安宅關

【作者】 櫻取安宅 脚本 一幕二場 時代物
【上演】 初演は明治三十七年十一月十三日
【上演】 初演は明治三十七年十一月十三日

【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺
【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺
【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺

【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺
【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺
【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺

【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺
【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺
【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺

【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺
【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺
【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺

【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺
【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺
【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺

【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺
【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺
【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺

不明。序に老年の作とある。致仕の後成つたものであらう。この作を大衆寺堂性法親王が、後水尾天皇の御覽に供へられた所、御感嘆からず詠を賜はつた。更にその後鳥丸光胤が詠を書いて刊本に載せぬが、社寮松葉集巻二十八に収めてある。【脚本】 初版寛永十七年二月、京都松屋五兵衛刊。再版本年は年譜は同じで四巻に分冊され、書肆は中村五兵衛。近世文藝叢書第三に収録。

【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺
【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺
【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺

【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺
【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺
【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺

【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺
【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺
【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺

【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺
【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺
【参考】 櫻取安宅の騷擾 秋田芳美(人形)と舞臺

頭であつた頃、殿上の人々をあまた具して大井川に追着した時、彼も俊頼、仲實、隆源等と共に...

【参考】日本歌學史 佐佐木信綱『國文學研究』史野村八良

【参考】歌仙傳 ○公卿補任 ○草草分限 ○百人一首一夕話

【参考】歌仙傳 ○公卿補任 ○草草分限 ○百人一首一夕話

氏、後平田、本姓平氏(通稱)初正吉、後平兵衛(號)大軍、氣吹之舎(生殺)安永五年...

【参考】日本歌學史 佐佐木信綱『國文學研究』史野村八良

【参考】歌仙傳 ○公卿補任 ○草草分限 ○百人一首一夕話

【参考】歌仙傳 ○公卿補任 ○草草分限 ○百人一首一夕話



平田氏

を差止められ、且つ秋田に追はれた。彼の日本の神道建設の主張は、幕府成立の基礎を...

○天說辨(六別項) ○印度志(二十五卷) ○出定笑語(六卷) ○悟道辨(二卷) ○古今狂龍...

【参考】日本歌學史 佐佐木信綱『國文學研究』史野村八良

【参考】歌仙傳 ○公卿補任 ○草草分限 ○百人一首一夕話

【参考】歌仙傳 ○公卿補任 ○草草分限 ○百人一首一夕話

態度を取つたのは、眞心の説の缺點を補へるものと云ふべきであらう。これを要するに...

【参考】日本歌學史 佐佐木信綱『國文學研究』史野村八良

【参考】歌仙傳 ○公卿補任 ○草草分限 ○百人一首一夕話

【参考】歌仙傳 ○公卿補任 ○草草分限 ○百人一首一夕話

【参考】日本歌學史 佐佐木信綱『國文學研究』史野村八良

【参考】歌仙傳 ○公卿補任 ○草草分限 ○百人一首一夕話

【参考】歌仙傳 ○公卿補任 ○草草分限 ○百人一首一夕話

【参考】歌仙傳 ○公卿補任 ○草草分限 ○百人一首一夕話

【参考】日本歌學史 佐佐木信綱『國文學研究』史野村八良

【参考】歌仙傳 ○公卿補任 ○草草分限 ○百人一首一夕話

【参考】歌仙傳 ○公卿補任 ○草草分限 ○百人一首一夕話

【参考】歌仙傳 ○公卿補任 ○草草分限 ○百人一首一夕話

【参考】日本歌學史 佐佐木信綱『國文學研究』史野村八良

【参考】歌仙傳 ○公卿補任 ○草草分限 ○百人一首一夕話

【参考】歌仙傳 ○公卿補任 ○草草分限 ○百人一首一夕話

【参考】歌仙傳 ○公卿補任 ○草草分限 ○百人一首一夕話

【参考】日本歌學史 佐佐木信綱『國文學研究』史野村八良

【参考】歌仙傳 ○公卿補任 ○草草分限 ○百人一首一夕話

【参考】日本歌學史 佐佐木信綱『國文學研究』史野村八良

【参考】歌仙傳 ○公卿補任 ○草草分限 ○百人一首一夕話

【参考】日本歌學史 佐佐木信綱『國文學研究』史野村八良

【参考】歌仙傳 ○公卿補任 ○草草分限 ○百人一首一夕話

【参考】日本歌學史 佐佐木信綱『國文學研究』史野村八良

【参考】歌仙傳 ○公卿補任 ○草草分限 ○百人一首一夕話

齋密に至る五朝とあるは誤。その間、儒者として多く文章の功があつた。即ち魏書の第一

【参考】台記○少外記重忠記○外記日記○中右記○本朝世記○一代要記○本朝新修往生

【参考】古事類聚卷十七○今昔物語三○古事類聚

【参考】古今著聞集第十八○發草子卷一○古今

【参考】伊勢物語七段 第六年成親、第一

物語から誕生したものであらうが、作品として

【参考】水鏡三年五月、今川義元が大家を率いて

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

【参考】平家物語卷九「教盛最期の事」を本として

田中宗平次兵衛文相の娘(新三郎) 田中幸三(小川吉太郎) 小田幸三(小田幸三) 中村次郎(三)

【題材】 本願寺座主を異はせし悪僧、忠臣蔵客多頭等と、悪僧・悪僧と、春水・久吉からまたたきあふ物語。

【解説】 小田幸三と結託した悪僧は、悪僧法師の権を東山退道寺を奪はうと、妖術を以て種々策動する。一方紛失の神書の御前を取り返さんため、小田幸水は退道寺を攻めてこれ

【案内手本通人】 小田幸三(小田幸三) 草野春三(草野春三) 小田幸三(小田幸三) 小田幸三(小田幸三)

【七】 提灯屋の世先、伊香提灯の相ひする七文字を見て悟る所がある。七文字は「きをつらにめて」である。

【姉妹達大礎】 姉妹達大礎(あなご) 三州栗島家の娘を嫁ひ、白拍子に現を演かして遊興の處へ三州の使者松江蔵人、練達の引出物を持参する。

【案内手本通人】 小田幸三(小田幸三) 草野春三(草野春三) 小田幸三(小田幸三) 小田幸三(小田幸三)

【七】 提灯屋の世先、伊香提灯の相ひする七文字を見て悟る所がある。七文字は「きをつらにめて」である。

【七】 提灯屋の世先、伊香提灯の相ひする七文字を見て悟る所がある。七文字は「きをつらにめて」である。

れた(天正)白鳥(鳥居) 語學書 十三卷 姉小路式(未詳) 姉小路式(未詳) 姉小路式(未詳)...

學的である本書を補訂正したもの、歌 道徳歌集(十三巻) 寛文十三年刊、和歌 には姉小路式(一巻) 寛文十三年刊、(春樹)...

ト、シカゴ、エール講大學で、日本文化、佛教 等に關して講演、大正四年歸朝し、翌年雜誌 「人文」を發行した。大正七年、四度外遊、カ...

第二女に仕へてゐたが、後歌道の名門藤原爲 家(別名)の継室となつた。爲家の關係は遺 やかな情交の結果らしい(寛文日記支那)...

風の音も吹き響るなりとてに我がいねがての 歌の夜月 是等は初期の作中で比較的純粋なもの、例 である。特定の歌詞の重視、技巧上の病的化...

物語(即ち愛文)の筆致が優へられてゐる。 【参考】扶桑叢書(國文學研究史)第八頁 油槽(未詳) 佛蘭集 一册(著者)松木貞 徳【名】「新大波瀾」(別題)の上巻に附...

際情されたので、貞之進は憤怒して、小歌の 寫眞を着せたり返へて油槽へ投げこんで滅茶 滅茶にした上、「小歌めが、あの小歌めが」と 繰返して罵つた。 【解説】本篇は「流石」の一言文、致意で、す たらと書かれてゐる。結構の単純な作品であ...

翌年秋歸朝。爾來今日まで東北大學に奉職。 その間主として力をゲエテの研究に注ぎ、諸 家の美學體系を渉獵した。【著書】三太郎日 記(別題)○三太郎の日記第二○著者○人格主 義○北郊雜記○學藝論(徳川時代の藝術と 社會)○イナエのツアラウストラ(批評)...

14

事、その他世間の官職、装束に關した故實を記し、「應永廿七年庚子五月廿三日宣守充判」とあり、更に僧侶重頼事、忌中佛事、勸進の田榮齋、兒の美裝束、書札、建築、家々の文、食事、女房次第等諸種の故實を順序なく書き加へ、終に「同七月日重子加筆」とある。「石巻」

て居たので、内侍からその姫が今己が家にある山を奏上すると、強つての御召を蒙り、中將を忘れ難い姫は、泣く泣くも水着殿に迎へられて御寵愛を一身に蒙る身の上となつた。左大臣の姫も慶喜殿に上つたが御も御寵愛がないので、兄の中將は帝を懇んで出仕せず、怒つて帝が召された、中將はその途上、先の呪詛に用ひられた我が形代を見失して一切を知り、切つた髪を水着殿に贈つて、叢山の横川で出家した。それを聞いて左大臣の姫も落飾、左大臣も亦世を捨てた。その後、水着殿は三皇子二皇女を生み、皇后となつて榮えられた。

狹守藤原吉次正本。正保四年六月、西河院長者町草紙屋九兵衛板。輸入細字十四行十四丁本。(一)法藏比丘阿彌陀本地轉入細字本。京都山本九兵衛板。相模鎌倉の山本正保正本。(二)「あみだの御本地」表紙題簽「四十八願記」。八行三十丁本。京都山本九兵衛板。山本土佐藤正本。現存の正本としては、最後の第三本が最も多い。今これについて解説する。

で、夫人は二十七歳を一期として病死する。二人の若君は母を葬つて、更に七日間放を續けて、夫人を迎へる太子の行列に出遇ひ、母の臨終の模様を父に物語る。「五段」夫人の塚に手向をして歸國した太子は、一念發起して出家し、法藏比丘と稱へて修行の六十願を立て、その中十二願は特に夫人の爲め、残る四十八願は一切衆生済度の爲めと精進修行する。若君二人も出家して早離・遠離と稱へ、臣下六十人も共に出家した。かくて法藏比丘は四十願を成就し、早離・遠離と共に諸國修行の途次、夫人の塚に參詣して念佛を唱へると、塚が二つに割れて夫人の姿が現れ、本願の功力によつて正覺獲ひなし、最期の痛苦に堪みて末世衆生の痛苦を救はんと、法藏比丘より附屬の十二誓願を立て、忽ち藥師如來と現じ、東方淨瑠璃國土に飛行する。かくて法藏比丘



阿彌陀地獄 浄瑠璃 五段本

是行本願成就して正覺阿彌陀佛となり、早

離・遠離も願を滿たして觀音・勢至と現じ、阿彌陀佛の左右に立つた。【附記】近松の「女殺油地獄」(彌生中巻白痴傳の法印の詞に、「そも、法藏比丘の淨瑠璃に曰く、阿彌陀と藥師は御夫婦と云々」とは、この淨瑠璃を指したのである。又江島其の「世間眼容紙」(軍使先代巻)の第二巻に、哀れな事が好きの長髪材木屋の娘は、伊能出羽津の芝居の阿波太夫がウレヒ節に打込み、四十八願記の三段目を覚えて、之を誦つて目を泣きはらして居たところ、本曲に取つては興味ある記載と思ふ。【黒木】

阿彌陀地獄 浄瑠璃 五段本 地物 【作者】六字清無右衛門との説がある。【発行】慶長十九年九月二十一日、後陽成院御所のお庭に於て撰として演ぜられ(浄瑠璃中、また同年に加賀金澤城下でも興行された(浄瑠璃中)といふから、浄瑠璃で語られた浄瑠璃中、最古の曲の一であると云へる。説初にも同一曲名のものがあるけれど、その先後は明かでない。【梗概】(初段)天竺の毘舍利國にかんじ兵衛といふ長者があつて、榮華に心酔り、不信佛道を極めたので、檉杉山の釋迦は地獄の大火鬼に命じて長者夫妻を魔道に墮し、財寶を焼き盡させた。(二段)釋迦の慈悲によつて命を助かつた長者の遺子天壽姫と、ていれいと



浄瑠璃 阿彌陀地獄

んだが招かれられたのを憤り、兵を率ゐて攻め寄せ却つて敗北した。その原花月二郎は捕はれて斬られると、その首は天へ上る。(四段)大満長者の子孫若は、難病にかゝつて醫藥も加持も効を奏しない。博士のトビによつて、同じ相性の女の生體を取つて吞ませることとなり、年十二歳の女三善美人の中から天壽が選ばれた。(五段)天壽は喜んで犧牲となることとなり、その代りに、親の誠罪生善のために、七間四面の黄金の御堂を建てて彌陀三尊の安置を望み、長者は快くこれに應

【作者】「二世何竹新七」(歌留本)【名稱】「傾城玉菊」と「小娘七之助」とをこの題下に綴り合したもので、前者は「花柳御前」の名稱によつても上演せられ、又後者は「花柳御前」の名稱によつて、或は「高島島」(浄瑠璃)、「時傳傳」(浄瑠璃)、「傾城玉菊」等の名題によつても上演せられた。「諸本」黙阿彌全巻第三巻【題材】乾野坊良齋の講談から得たもの。【初演】安政四年七月市村座。【役者】七之助、中萬字屋主小島長徳、市川團次、七五郎、中萬字屋、阿彌陀、新之丞、三郎、玉菊、山本、尾上五郎等。【梗概】(傾城玉菊の條)傾城山軍十郎は、妻に所望したお民が小身の頼木新之丞の妻となつたのを恨み持つて、中間阿士のいさかひから新之丞へ難題を持ちかける。新之丞は養子の身とて家名に拘はることがあつてはと止むを得ず中間の加助を斬る。その時、加助は自分の娘、中萬字屋の玉菊の行末を依頼する。(二幕)新之丞と言交した玉菊は、新之丞の養父からお民の父親に對する義理を聞かされ、又お民の健康な言葉に義理を立て、新之丞を遠ざけようとして決心する。(三幕)中萬字屋の彌兵衛は、軍十郎の父とは同輩關係のある所から、假令三日でも軍十郎に身請されてくれと玉菊に頼む。新之丞に對する愛情とその父と妻に對する義理、軍十郎に對する嫌惡の情と彌兵衛に對する義理、この情義に絡まれて玉菊は自害する。

【小娘七之助の條】(序幕)新之丞の弟、酒屋の手代四郎は、品川島崎屋の抱へお杉に通つてゐるが、お杉は軍十郎の弟坊吉三と誤ひ交はる。吉三の中間阿打七五郎は、與四郎が島崎屋からの歸路をつけて、七五郎を

本の道を描いた。斯くて晩年は俳人としてよりも寧ろ小説家・兼人として立つに至り、幾かに明和七年」とは正草(文化十三年再刊)を著して「氣韻を揚けたに過ぎなかつた。明和末年、再び江戸に還り、更に關東各地を巡遊し、安永三年武州熊谷に病んで客死した。

【葉書】涼袋の俳諧は先づ野坡や美濃派に倣ひ、次で伊勢風に移したものであるから、自ら平俗の趣を以てその風とした。また附合に就いては極めて自由な考を抱き、三句のわたりを拘泥して自在を失ふよりは、一句の立に働きの見せがよいとし、その附句の法を説くに當つては、頗りに奇因・梅路の例を示し、「俳仙富」南北新話後編」等には、特に梅路の附句のみを抄出して、これを範とすべきを説いて居る。元來附合に一句立を賞する事は、伊勢風の特徴とするので、「葉林中一句立」の如き書も行はれたのであるが、涼袋は特にこの風を賞び「續三正集」櫻徳の梅「續百韻集」等にその特色を發揮した。發句は因より平俗を旨とし、且つ多く獨巧に傾いて居るが、決して無理に難せず、又附合に至つては誠に発句自在の妙技を發揮し、一句の趣向を驚うた事は、後に「武玉川」の如き前句を省いた句向を厭くも感せず、而も伊勢風の説き方によつて別に一家を成さうとした。實際その機略と放才とは恐ろしく高く、相當の門人も集めることが出来たのであつた。併し片歌の説を唱へ出してからは、餘りに奇僻に過ぎるものもあつた爲めに、却つてその門に歸するものが少なかつたが、藹藹として價値の乏しいものではない。併し必ずしもかうした十九言の形をとらねばならぬ理由は認められない。これは、彼の御學對に山師的な野心が手

障つて唱へ出されたことであらうが、一面から考察すれば、當時の文學界に瀰漫してゐた古典崇拜の一つの現はれとも言ふことが出来る。即ち「萬葉」一派の國學鼓吹に刺戟されて、時代的な風潮となつた古典への憧憬が、俳諧の世界にも一激を與へたに至つたので、これは俳諧史上特殊の意味を持つべきものであつた。なほその讀本「西山物語」は所謂雜文體小説の先驅をなし、「本朝水滸傳」は水滸傳體小説の最初の試みで、馬場等の讀本を誘發させた點で、文學史上重要な意義をもつもので、文學として優秀なものとは言へないまでも、彼の日記・紀行・隨筆等と共に、その文才を窺はしめるに足るものがある。ただ新方面の開拓に急であつた爲めに、何れの方面にも熟達と大成が見られない。「門流」門人は多く地方に散在して居たので特に傳ふべき者はない。涼袋の著書に最も多く關係を持つてゐた秋光庵素軒、武州の双輪・百梅・上州の素齋、雲南等が終始よく忠實に師事して居た。なほ片歌道守の號は、涼袋の歿後その妻が、嘗て涼袋の門にあつた一陽井素外に譲らうとしたが、素外が受けなかつたので、傳はらずに終つた。

【著作】南北新話 二卷(寛政元年刊)○俳諧源氏(同二年刊)○涼袋傳略 一卷(寶曆四年刊)○在門風物語 一卷(天明二年刊)○紀行併集 一卷(同七年刊)○片歌二夜問答(二年刊)○片歌百夜問答(二年刊)○西山物語 三卷(天明二年刊)○伊勢物語考異(同六年刊)○蕪本伊勢物語 一卷(同四年刊)○孟喬蓮重 五卷(同七年刊)○建氏實苑 三卷(同八年刊)○本朝水滸傳(前編) 九卷(天明二年刊)○本朝水滸傳(後編) 四卷(同四年刊)○安永四年刊)○すゞみ草 一卷(寛政六年刊)○漫遊記 五卷(天明十年刊)○折々草(天明)○俳諧百韻集(古今俳諧明題集)○俳諧言行傳 二卷○詞草小苑 ○はし書ふり ○はし書ふり(後編) ○片歌の始め ○片歌東風流 ○草のはり道 ○片歌宣道 ○梅日記 ○櫻日記 ○山吹日記 ○とは草 ○杖のさき ○伊勢のはなし ○櫻徳の梅 ○山居の春 ○田家の春 ○南北新話後編 ○戀百韻 ○花盛人 ○片歌萬宜集 ○綾太理家集 ○女調ひとへ衣 ○山良物語 ○寒葉齋奇書

【參考】寒葉齋建部時足 著 讀實言 ○爾近世時本編 心在花(七ノ五八)○建部時足 宮崎三味(國民之友六ノ七)○練足と秋成 藤井勇(心花二ノ三) ○建部時足の歌 佐佐木尾編(心花二ノ三)

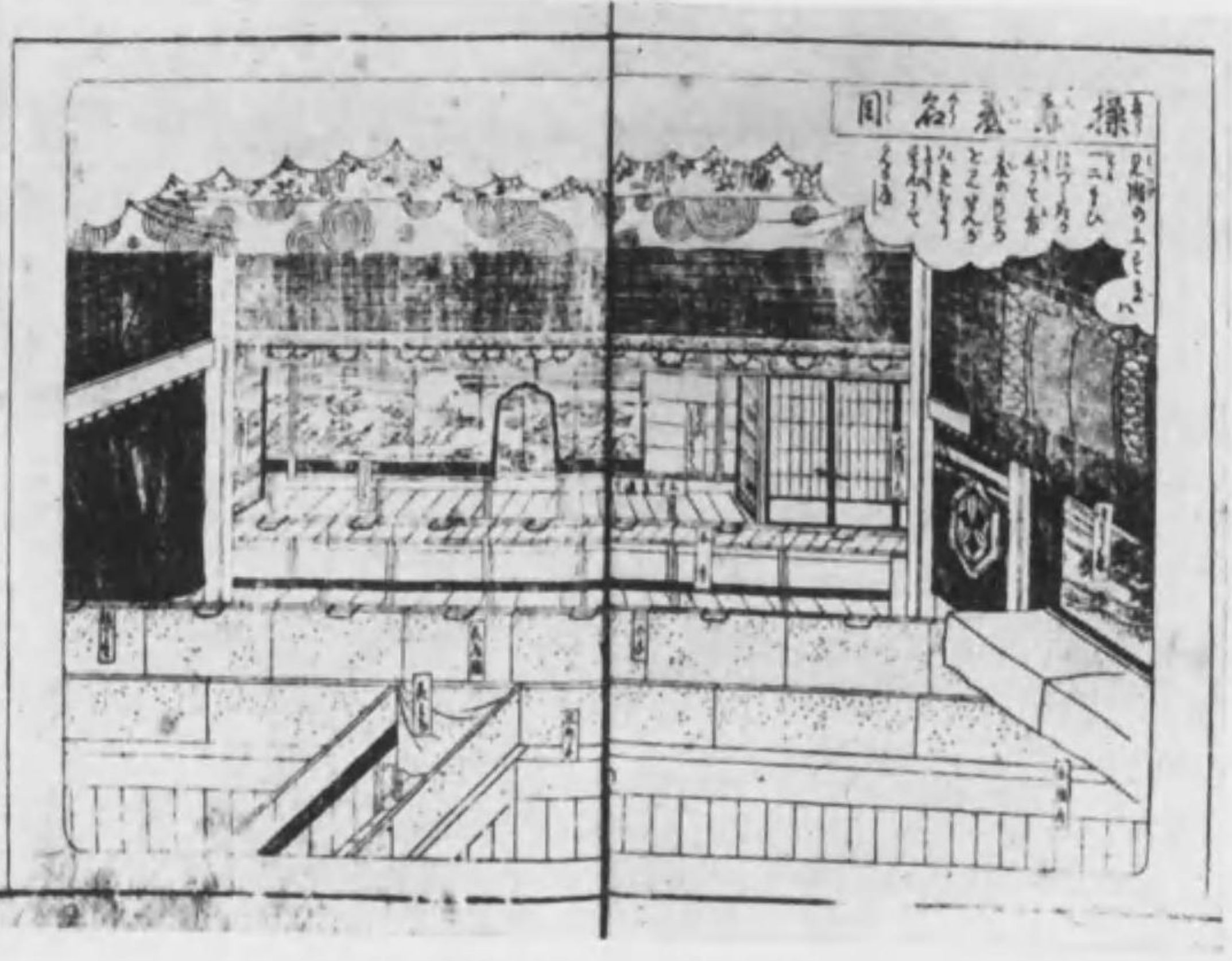
【名義】操芝居、または操淨瑠璃芝居の略【異稱】人形芝居、單に人形【性質】淨瑠璃・三味線人形、各別種、の三要素より成る特殊の演劇をいふ。發生當時に於いては、三味線は伴奏の位置に置かれてゐたが、發達を遂げた浄瑠璃では、三味線が主になる場合さへ多く、何を缺いても操は成立しない。【起源】王朝時代の傀儡(大羽)に端を發して、夷舞、或は夷舞といはれてゐた人形が、發達して操となつた。王朝時代にあつて、土・偶・木・偶を操つて、轉々と諸國を巡遊した夷舞の民が、即ち傀儡子である(後子參照)。

【沿革】「屋間往來」に琵琶法師や獅子舞と並べ稱へられてゐる記事又は「看聞日記」廣水廿

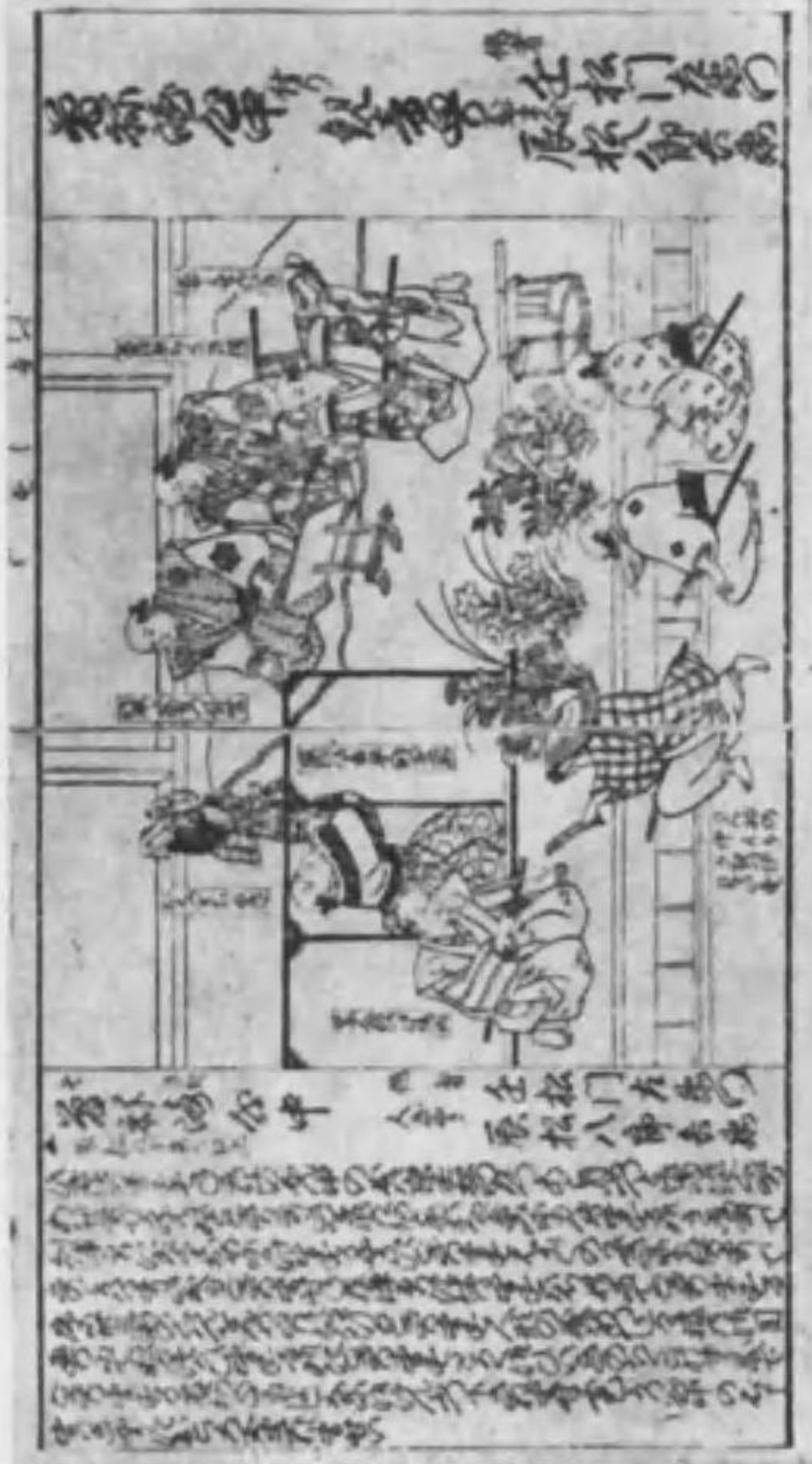
七年の條、奈良大業院承平十二年記等によるに、彼等の生活状態は、純然たる品玉造ひ或は木人を舞はして門付藝人の群に入り、宿禰や神社佛閣の盛り場に土着したものと見える。宿禰に止まつたは女で、歌舞と色とを賣つて、後の飯盛女の先驅をなし、神社佛閣に土着したものは男で、淨土宗の行者の手に付いて、後には傀儡子が行者となり、その特技の木人の技を以て人形を舞はし、諸國に淨土宗の宣傳、一向宗の動化の用を勤めたものである。一方平曲を母胎として生れた所謂淨瑠璃が、如來の信仰を基調として、如來の信仰・本地を説いた。なほ永祿年間、泉州堺の津に渡來した三味線は、琵琶法師の手によつて、新興の民衆藝術である淨瑠璃と相換へて、勃然として播種した。かくて、語り物を藝師如來の信仰から出發して本地物(浄瑠璃)に低迷してゐるうちに、同じく寺社の動化、念佛の宣傳に携はつてゐた夷舞が、淨瑠璃と握手した。淨瑠璃・三味線・夷舞との三者は、相提携して新時代の尖端に立つて、文・慶長の新興時代の潮先に乗じ、そして徳川期における大流行の端を拓いた。この提携直前の夷舞の状況を語るべき多くの資料は、今日残らず、僅かにその一つとして、福津西宮夷宮附近の産所に屯してゐた夷宮所屬の夷舞について一種の概観を示してゐるに過ぎない。併しこの西宮の産所に屯してゐた夷舞が恐らく數に於いても實に於いても代表的なものであつたから、淨瑠璃・三味線との提携は彼等が多く實行し、又上方及び淡路の操(浄瑠璃)の發達の端を發しては自然消滅したのであると思はれる。西宮の夷宮に所屬したから「夷舞」で、他は夷舞とは言はなかつたらう。それは



京西原に於ける初期形人舞臺(圖)の原



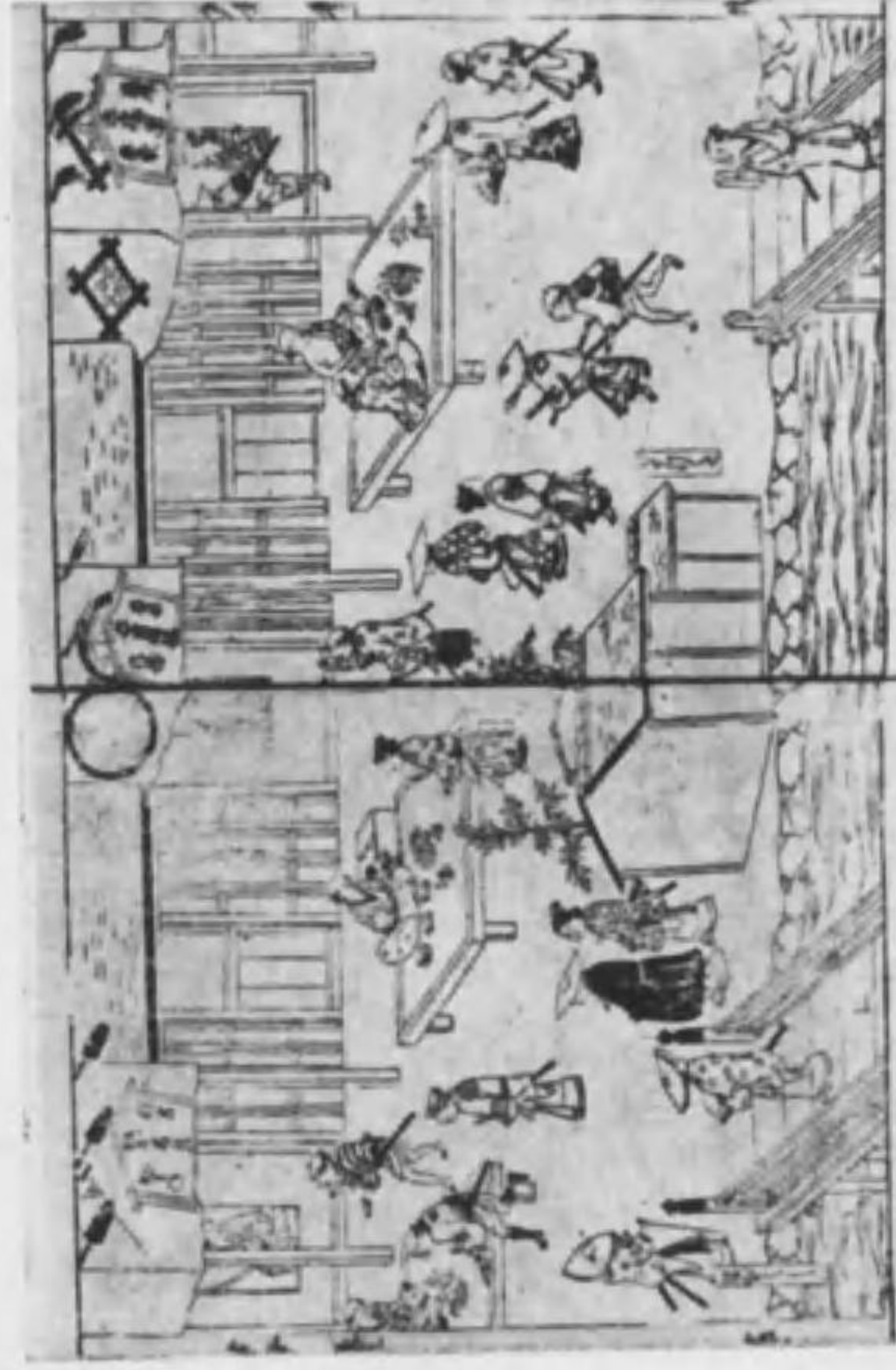
發達したる人形舞臺の遺構(圖)の原



江の川町野島屋敷の圖



繪芝居の頭たえ菜の屋田竹谷



歌舞などの言葉がこれを裏書してゐる。古風な舞臺を維持して時代に取残されたものは、或はもつと古い時代に都會生活も傳へず、都を落ちて地方へと出た。今日では琉球首里の娘が村にその形骸が保存されてゐる。琉球では人形舞を京太郎、人形を徳、徳を舞はすことを舞、木偶を入れる物を舞と呼ぶ。その村の宮には阿彌陀堂と記した願額が存してゐるといふ。

語りであると共に、人形にも科が出来て、夷舞としての人形に一大飛躍を與へた。樂器は塙の琵琶法師の手によつて新生命が吹き込まれた三味線である。これは石村檢校を中心として研究され、新渡來の樂器は從來我が國に嘗て無かつた音階を提供した。これが時の好尚に投じて新時代の人々に喜ばれた。石村檢校から虎澤・澤住兩檢校に傳はり、澤住と三味線とを結び付けたのは澤住檢校であり、平曲を加味してこれを助けたのが澤野勾當である。澤住檢校が、塙の仲小路に住んでゐたから、一つに仲小路檢校と稱されたのである。然るにその後澤住、澤野兩百人の手から離れ、一方夷舞と提携して更に一段の躍進を試み、人形劇が完全に成立することとなつた。「三才會館(豊島橋)」の傳によると、澤住檢校の門人日置屋長三郎が、西宮の夷舞引田某を誘つて、十二段草子「源」の外に、「都めくり」といふ新作を以て、始めて人形劇の工夫に成功した。この新編浄瑠璃を、後藤成院の上置に供し、御座に預つて、長三郎は淡路津を受領した。後藤引田某の受領説は誤である。澤野の澤野屋敷。又、澤野勾當の門人引田某、京の大郎兵衛の兩人が、西宮の後藤引田某を誘つて浄瑠璃に人形を合せ遣つて成功し、引田某は慶長十八年正月十五日、河内日受領し、これが浄瑠璃語り受領の始めとされてゐるが、日置屋長三郎の淡路津受領との先後は、俄かに斷じ難い。且つ兩人の名が、何れとも判ぜられぬ。日記類によると、夷舞は風に能の所作をその技に取容れてゐた

が、他の所作よりも阿彌陀佛(彌)の曲に、堂上人が奇異の目を散つたと記されてゐる。永祿・天正の頃は御幸で上置に供したが、十九年には御座に鞍子幕を引廻した設備があつて、浄瑠璃と提携の後であることは見のがしてはならぬ。

一月、長崎で名道七郎兵衛が浄瑠璃を興行した。技に注意を要するは「櫻水種久紀行」に見られる如く、櫻の創始期に於いて、縁掛に支那からの影響があつたことである。

狐の尾から火を出す。唯は鼓笛三味線... 人形を遣ふ者は操つたり引いたりする間に...

例へば「七人比丘尼」などがその一例で、元祿... 江戸開港の年月を詳にしないが、寛永十二...

で、江戸開港の年月を詳にしないが、寛永十二... 寛永十三年、江戸幕府の御用金主丸の二つの人形...

衰微し、僅かに土佐少将正勝が土佐節(別項)... 一定の本夫がなく、岡本文彌(山本佐藤)...

つた。然し辰松座は辰松八郎兵衛が歿すると... 寛永十三年、江戸幕府の御用金主丸の二つの人形...

少将正勝となり、寛永元年七月受領して上總... 寛永十三年、江戸幕府の御用金主丸の二つの人形...

つた事だけは判るが、この頃には播磨屋はま... 寛永十三年、江戸幕府の御用金主丸の二つの人形...

若本太夫居屋(別項)である。出羽屋は、... 寛永十三年、江戸幕府の御用金主丸の二つの人形...

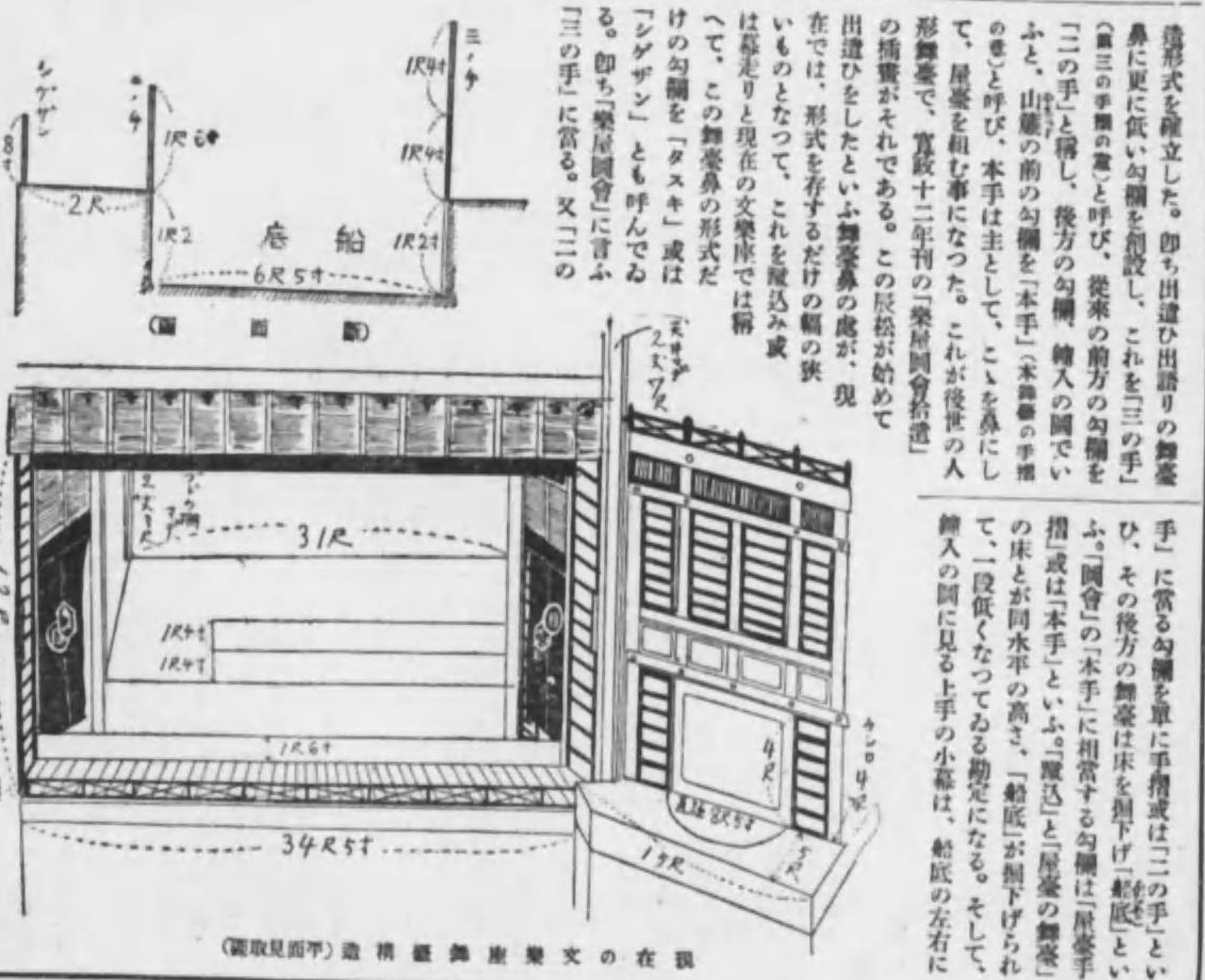
横、明解の大火で、江戸を逃れて西上し、寛文二年から道頓堀で、名代御免となつたものである。

操芝居の舞臺

浮瑠璃時代、四條河原に興行された當時の舞臺は、中央正面に舞臺を設け、横長五間、縦幅を構へ、その上下に幕を張り、人形遣は幕内をやり、上下幕の間に人形を出して操る。そして上段の幕は人形遣ひの頭を隠す所から面隠といふ。...

的確なる舞臺は、「人倫園會」七巻所載の山本土佐蔵の舞臺裏の圖である。この圖によつて、舞臺表面の構造が十分想像され、よく分る。この古浮瑠璃時代の舞臺は相當發達したもので、寛文二年竹田出雲が、竹本座の座元となるまで、舞臺構造には變化はなかつたらしい。...

和八年の近松半二の工夫になる「嵯香山崎女座間」の山の場の大道具、引道具の工夫は蓋し人形舞臺の極端な道具のものであつた。...



手」に當る勾欄を單に手構或は三の手といひ、その後方の舞臺は床を削り下げ「船底」といふ。「園會」の「木手」に相當する勾欄は「屏臺手」或は「本手」といふ。...

設けられ人形の出入口となつた。なほ享保二年に、竹本座に於て大幕の上に小幕を引き始め、享保十九年の舞竹座では、正面にあつた語り場なる床を横に直した。これ今日の、舞臺上手遣ひの鼻から、見物席へ突出して、斜に床が設けられた最初である。...

【舞臺】(發生期) 古浮瑠璃時代・義太夫時代即ち過渡時代ともに、一枚の定紋幕及び僅かな造り物・城などの切出し位で、何の装飾もなかつたが、寛文二年出雲棟が竹本座の座元となつてから、道具は次第に手が込み華美となつた。...

和八年の近松半二の工夫になる「嵯香山崎女座間」の山の場の大道具、引道具の工夫は蓋し人形舞臺の極端な道具のものであつた。...

【舞臺】(發生期) 古浮瑠璃時代・義太夫時代即ち過渡時代ともに、一枚の定紋幕及び僅かな造り物・城などの切出し位で、何の装飾もなかつたが、寛文二年出雲棟が竹本座の座元となつてから、道具は次第に手が込み華美となつた。...

の女で、富裕の家に育つて、賀茂貞園の門に入り、貞園も我が子の如くつくしみ教へたりが、寛保二年二十歳で死んだ。その紀行文の「伊香保の道ゆきぶり」は十八歳の時の作である。...

て、本書を見るについて注意すべきことを記してゐる。(一)冒頭に名をもつて物ごとわり、装をもつて事ごため、挿頭・脚結をもつてことばをたたく」と品詞を定義し、(二)次に品詞の起原について、「あめつちのことたまは、ことわりをもつてしつかにたり、よそひ、あゆひにもあらず」と云ひ、又この(名)裝・挿頭・脚結の四のくらはは、はじめのひつこのことだまなり」と云ふ。...

「伏見」(伏見)「立本」(立本)の九段とす。(八)次に挿入名義、脚注に通ふもの、脚注が名義に...

實に成草である。爾後鈴木、東條、西門等も品詞の分類をして居るが、それは成草の分類の影響を受けた事なる大なるものがある。(二)整の研究。整について...

有するが成草の門下が榮えなかつた爲めに、本書の類は甚だ少い。○脚抄抄(葉本)...

と云ふ形になつてゐる。この形は、「日本書紀」仁徳紀の、武内宿禰に賜ひし御製にも見える所...

ところがその婿は養父の甥で、雇人も同様な薄給の作だとすると、お島は生家へ逃げて歸つた。間もなく頼まれて作と式を辭げさせられたが、その夜のうちに又逃げ出してしまつた。...

なるまいと決心した。四度目に本地で持つた店に相應に奮闘するやうになり、若い腕の入りつてゐた。それによつては、長...

雄主義の芝居が、初代と二代の市川團十郎によつて基礎づけられ、中期に於て大成された。武藏つて狂言であるから、主役は武者人形のやうに男まゝで、強く、無邪気であるのを精神とする。...

も三人の息子は、既に一人前の青年に生ひ育つて、各々の性格のまゝに深く、新しい時代を呼吸し始めてゐる。父の深い心遣ひは子供達の幼なかつた頃とは又別の切ないものがある。けれども新しい時代を何處までも自由に生かさねばならぬ事を知つてゐるこの父にとつては、深い心遣ひをうましく自ら抑へて、息子達の行く末を見守らうとするのだ。三人のうち、長男は既に家を出て、故郷の父祖の古い屋敷跡に家を新築して若い農夫としての奮みをはじめてゐる。父はその新築祝ひに出かけてみると、其處にも若者の世界がひらけてゐた。それに力を得て、世家を志す次男をも、農事の傍らに業を學ぶことを勧め、兄の家に送り出してやる。父は父「子は子でなく、自分は自分、子供等は子供等ではなく、ほんたうに自分たちの道が見えはじめた。」

しと致へ、野太は「野太」野太に正風を見聞... 野太は「野太」野太に正風を見聞... 野太は「野太」野太に正風を見聞...

評がある。【参考】伊藤問答 遺稿六(伊藤問答五編)○... 伊藤問答 遺稿六(伊藤問答五編)○... 伊藤問答 遺稿六(伊藤問答五編)○...

た時、野太はその範圍を限定せられて第二種... 野太はその範圍を限定せられて第二種... 野太はその範圍を限定せられて第二種...

卒た新田義孝を中心として、これに管領山田... 卒た新田義孝を中心として、これに管領山田... 卒た新田義孝を中心として、これに管領山田...

念する新田明神の幣帛が、衣紋之介の身代り... 念する新田明神の幣帛が、衣紋之介の身代り... 念する新田明神の幣帛が、衣紋之介の身代り...

中巻に宗且・鬼貫・織道・後村・赤松・豊助... 中巻に宗且・鬼貫・織道・後村・赤松・豊助... 中巻に宗且・鬼貫・織道・後村・赤松・豊助...

文學を渉獵し、遂に西鶴の偉大なるを發見し...

合世鏡

作者 鼻山人(續川東里山人) 職工 無署名...

久兵衛の妾おみは喜六に言寄つたが、喜六は...

花は出て行き、肌介は妹おみはの家へ厄介と...

しとあるが黒いかと問はれ、蘭子の脚絆をし...

【発行】初演 明治二十二年十一月東京本郷春木座...

【提要】(序幕) 小森家の重宝たる栗田口と稱せられる...

許にて養生する事となる。(五幕) 山口巴に身を賣つたおみは...

【参考】(一) 歌謡 三巻 宮 〔著者〕 梨田雅之...

【提要】(中幕) 高申にあつては、矢切村の世話場に於て...

【参考】(二) 歌謡 三巻 宮 〔著者〕 梨田雅之...

【提要】(終幕) 小森家の重宝たる栗田口と稱せられる...

しない生活をしてみた。幼い彼にはこれらの事情が解き難い謎であった。(前編) 祖父の死後、謙作は分家してお茶と一緒に住み、父から貰った金で生活には困らなかつた。彼は創作に志した。幼い時から冷たい周囲の中で育つた彼には、唯一人の信頼してゐる義理の叔母があつた。彼はその叔母の頼に求婚して失敗した。この事から受けた心の傷は案外に深かつた。失態といふよりは、信頼してゐた叔母に裏切られたことが一層彼の心を暗くして烈しくなると、却つて心は固くなり、常に不快がついて廻つた。それに邊端を始めてからお茶に纏ひ難い愛慕を感じて苦しんだ。それを通して彼は尾の道に移つた。東京と暮るで異つたその土地が始めは彼を喜ばせた。やがて退屈と孤獨に堪へかねて、更にそこから旅に出た。旅でも孤獨に苛まれた。思ひ切つてお茶と結婚することを決心して尾の道へ歸り、親しくしてゐる兄の信行を介して尾の道へ歸り、お茶と結婚することにした。信行からはお茶が不承知だといふ運事と同時に、彼の背負はされてゐる恐ろしい過去の運命の報告が書らされた。彼は父の子ではなかつた。父の洋行中、祖父と母との間に出来た子であつた。この知らせは餘りに致命的な打撃であつたが、彼はその打撃に崩れしめる代りに、却つて堅忍した。今は彼にとつて唯一の血路となつた創作への精進を心に期した。すると何も知らなかつたがために、變に歴し扱さつて来るやうな不安を感じさせられてゐた以前より、寧ろ落着いた氣持で暮すことが出来た。ところが兄の不用意から、お茶に求婚した事が父に知れ、父はお茶を放逐しようとした。

それを知つた彼は急いで歸京した。信行は父と弟との間に板挟みとなり、遂に會社を止め、鎌倉の禪堂へ籠つてしまつた。お茶の放逐はお茶と一緒に大森に移つた。當座彼はまだ引き懸つた氣持でゐたが、間もなくその緊要が崩れ、それにつれて生活も亂れて来て父もとのやうな濃霧がはじまつた。一方、信行が来るする前、高野山へでも上りたいやうな心も頻りに動いてゐた。(後編) ふとした機會が、京都に棲むやうになつた謙作は、段々調和的な生活気分が落ちて行つた。古い寺や古美術や、さういふものに相應しい京都といふ場所の空氣が、彼の心を平靜にくれてくれた。お茶は、彼が心平靜にしてくれたのだから、一方ではお茶が從妹に被さされて、お茶を淋くした。その上直子との間に生れた愛兒の直達も丹毒で死んだ。もつと思ひことは彼の旅行中に、直子が従兄の要に犯されたことだつた。謙作は不用意に陥れられた妻を惜まむとしなかつた。彼が理性がさういふな事情が彼をいへらへさせられてゐる所へお茶が放浪した揚句、無一物同様にやつて歸つて来た。お茶と直子の間は案外うまく行つたが、謙作自身はともするとお茶に心を惹かれない。どうしたか、かゝる苦惱に引摺られてゐる自分を克服する爲めに、一年程の孤獨な生活を暮ひつゝ、彼は山陰の旅に出た。(終編) この作品はすべての部分が、如何にも有機的な緊密さを以て運ばれてゐる。長篇

小説にあり餘りな筋の上の甘みや作爲的な飛躍が殆どない。たゞ前編で母の過失を兄から打ちあけられる迄の邊で、後編でも弟の子の妻が同じやうな罪に陥つて行くと云ふ點だけは、考へやうによつては随分作爲的だと云へないこともないが、兎に角明治大正を通じて長篇小説でこれ程遠い、地味な構成を有つた作品は、徳田秋聲の諸作などを別にすれば、例が少くない。と同時に作品の各部に示された彫刻的な精巧さ、寫實描寫の正確さ、文章の作りに示されてゐる作者の人生觀の深き鋭きに於ても優れたものも示してゐる。言はば作者はこの作品で、人生の暗さを徹見してゐる。たゞ作者の努力、解脫への道が、非常に強い積極的な一面を持ちながら、結局個人的な心坎へ進出し、沈潜して行かうとするところに多少物足らない點があるが、それは、一つには時代の必然でもあつたし、勞々作者の心坎が、さうした方向に深く蝕いてゐるが故に、この作品は非常に深く、然も靜かに澄みきつた味わいがたゞ々としてゐることもあつてゐる。作者自身の心境及び藝術家としての成長の歴史に、大きなエポックを劃した點から、特に注意すべきは勿論、大正期を通じての傑作の一つである。

【問歴】幼にして佛道に入り、京都靈應寺の住職となる。茶道を金養宗和に學び、(一)説に宗和の實弟とも云ふ。又笑話に巧であつたため諸侯の門に出入し、特に豊原秀吉の寵を受けた。曾利新左衛門と同席の際にはその詠出した狂歌を題として、即席の笑話を演じ座興を助けたと云ふ。元和九年七十歳で歸隱し、霊應寺の末寺竹林院の住職となり、更にその傍に安樂庵を創建して住んだ。晩年となり筆談を以て用を足した。徳川時代に入つては、京都二代の所司代板倉周防守東宗の眷顧を受けた。「醒睡笑」はその求めに依り、隱居して後、自作の笑話を劇化したものである。

【著作】醒睡笑○數言集○昨日は今日の物語各別題の二書には署名はないが、醒睡笑は重刊するもの多く、當時館外に於て、醒睡笑を著者無しと思はれ、文壇も混同して居るから、醒睡笑と指定する。

【笑話】笑話に古來古典中に散見するが、「醒睡笑」の如く、笑話のみを多数集めたものになつた。この點に於て、策庵を笑話作者の祖と稱して得るのである。且つ一面に於て彼は單なる作者ではなく、演説して聽かせるのである。公然それで報酬を得たものではあるまいが、諸侯に招かれたのは單に茶道の爲めのみで無い事は推定し得る。この點醒睡笑の落語家の祖であるといへよう。

【参考】江戸の落語 醒睡笑 ○近代日本文學 大系(原書二編一五編)(山崎)

いゝる

移^レ古文書【解説】所謂書體の關係なき八省以下内外諸司互通の公文書。大寶令の規定に依れば、

いゝる、古はまた秀句ともいつた。日本文學の特長である。即ち一語に二つの意義を兼ね表はさしむるもの。例へば「たまは」のたよりなきの白露もれば袖の雨とこそなれ」のきくに「雨」と「袖」との二義を兼ねさせてゐるが如きである。

【文例】いつか我身も尾張なる、熱田の八咫伏拜み、沙干に今や鳴海海、傾く月に遠見て、明けぬれぬ夕沙に、行く道の末はむくく舟、沈み果てぬる身にしあれば、誰かははれと夕暮の、入相なれば今はとて、池田の宿に著きたまふ(本歌見)。(武島)

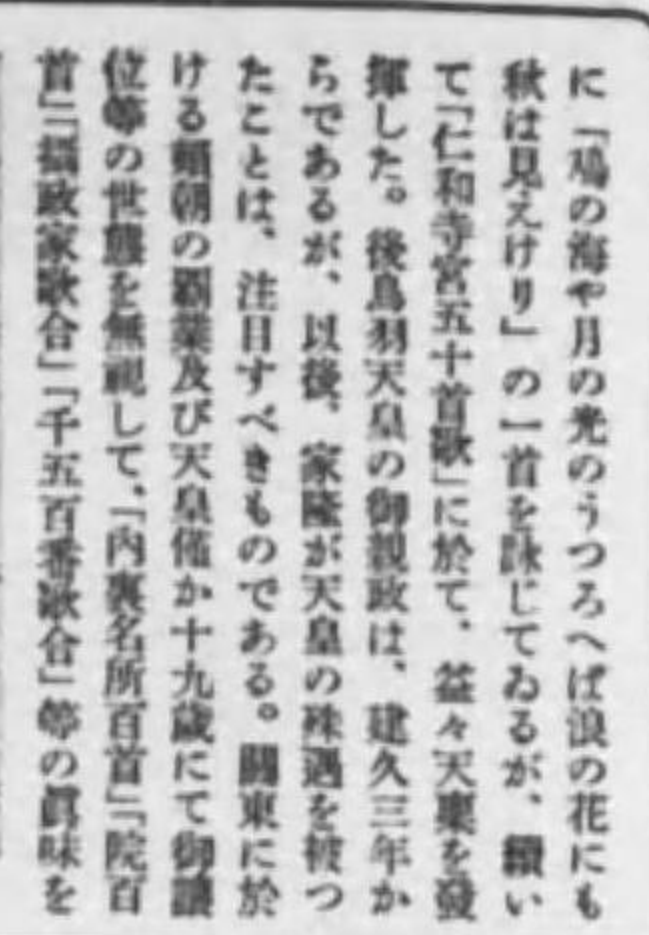
【問歴】幼にして佛道に入り、京都靈應寺の住職となる。茶道を金養宗和に學び、(一)説に宗和の實弟とも云ふ。又笑話に巧であつたため諸侯の門に出入し、特に豊原秀吉の寵を受けた。曾利新左衛門と同席の際にはその詠出した狂歌を題として、即席の笑話を演じ座興を助けたと云ふ。元和九年七十歳で歸隱し、霊應寺の末寺竹林院の住職となり、更にその傍に安樂庵を創建して住んだ。晩年となり筆談を以て用を足した。徳川時代に入つては、京都二代の所司代板倉周防守東宗の眷顧を受けた。「醒睡笑」はその求めに依り、隱居して後、自作の笑話を劇化したものである。

【著作】醒睡笑○數言集○昨日は今日の物語各別題の二書には署名はないが、醒睡笑は重刊するもの多く、當時館外に於て、醒睡笑を著者無しと思はれ、文壇も混同して居るから、醒睡笑と指定する。

の即めた新選劇は、文壇青年伊井孫の志した純粋演劇の爲めに指導されて行つたのである。

【家】小説「作者」島崎藤村「発表」上巻(署名「福生」)は明治四十二年一月より讀賣新聞に連載、下巻は同四十四年四月・十月の「中央公論」刊行、同四十四年十一月、雑誌「新選劇」として刊行、上田屋。後に大正四年改題、新潮社。同一年、藤村全集第六巻所収。

年ほど経て、三吉の家には三人の幼い娘も生まれ、彼も新しい仕事の希望を抱いて家族を引越め山を下りて都會に出る。【下巻】都會に出た三吉はその勞作が社會に迎へられて、前途の生活が一時にひらけるが、家庭の中には恐ろしい嵐が吹きまくつて、三人の娘達を次々に奪はれて了ふ。正太と豊世との不和も、兄弟達の引續く烈しい失敗も、また妻と娘との關係の緊張も、三吉を苦しめないものはない。



(藤村 井西) 藤村 家

に「一場の海や月の光のうつろへば浪の花にも秋は見えけり」の一首を詠じてゐるが、續いて仁和寺宮五十首歌に於て、益々天運を發揮した。後鳥羽天皇の御親政は、建久三年からであるが、以後、家隆が天皇の殊遇を受けたことは、注目すべきものである。關東に於ける頼朝の親政及び天皇御十九歳にて御親政等の世を無視して、「内裏名所百首」二百首三編歌歌合「千五百首歌合」等の詠詩を

年四十八歳で、後鳥羽天皇の勅命を受け、家等と共に「新古今集」編纂と云ふ大事業を果した。この頃が彼の最も油の乗つた活動期である。その後十数年間の家隆は、影の如く上皇に仕侍し、院に二十首歌奉ると云ひ、御書(建久三年)たりしが、承久の亂起つて、上皇の隠岐遷御となり、失意の地に置かれた家隆は、「恨みし世や」と云ふ歌を、上皇に奉つた。上皇、或る時は題を家隆に賜ひ、家隆は詠草を贈返に贈り寄せ、上皇また、御自ら家隆の歌合に判詞を賜はると云ふやうに、その後も殊縁の關係は續いてゐたが、家隆の餘生はとなく忙しむものであつたらしい。

良辰及び家隆の詠草を抄して題したものである。○勅撰集に入れる歌は、千載集五首・新古今集四十二首・新古今集四十三首・續後撰集十八首・新古今集四十五首・續後撰集十七首・新古今集十八首・玉葉集十五首・續後撰集十七首・續後撰集十九首・風葉集十四首・新古今集八首・新古今集十九首・新後撰集十一首・新古今集十一首。○土御門天皇に上る文(後鳥羽天皇)一首。○土御門天皇に上る文(後鳥羽天皇)一首。○土御門天皇に上る文(後鳥羽天皇)一首。○土御門天皇に上る文(後鳥羽天皇)一首。

言で壬生を號した。即ち家隆の實父で、母は參議信通女(公卿任には太皇太后宮亮藤原女と云ふ)である。【生歿】保元三年生、嘉祿三年(八九七)四月九日歿。享年八十。【墓所】京都市千本通五辻の北に石像寺と云ふ知恩院の末寺あり。その堂東、竹林の丘を家隆山と呼び、家隆の塔があつたと傳ふ。【附傳】父母兩系とも特に名家ではない。また文事に秀でた家隆とも思はれない。治部卿光俊の次男として生れた彼は、十八歳安元元年の時、從五位下に叙せられ、翌年侍從となつた。家隆の改名はこの前後らしい。早く俊成の邸に出入しその顯微な歌道上の質問を以て俊成を頼りたといふ。俊成初め男子無く、藤原定長を養子としたが、家隆の生れるに及び、定長は家を出て出家し寂蓮と稱した。家隆はその寂蓮の婿となつた。家より四歳の年長である。官位は順調に進み、阿波介(治承四年)、從五位上(建久二年)、越中守(文治元年)となり、侍從をかねてゐた。文治四年、三十一歳の時、勅撰「千載集」が編まれ、五首の選入(先家は八首を受けたが、なほ建久時代の特色を發揮する所が乏しい。惟ふに、家隆の歌道上の進歩開發は三十歳迄の精進時代を越え、建久の交に至り一躍に獲得されたものらしい。これには、當時に於ける歌道の急激な發展、例へば、定家や良経の如き後進の輩足の輩出等も相俟つてゐたことと思ふ。曾て家隆が、良経から當世第一の歌人を呼ばれた時、定家を挙げたといふ。良経が傳はつて居り、また、後鳥羽天皇が當代第一の歌人を良経に訊かれた時、良経が家隆を推薦したと云ふ傳説の如きも、彼等歌人が相互に尊敬しあひ精進してゐた體を語るに足ると思ふ。建久元年「和歌歌合」

「高橋鶴屋」(笠金村)田邊鶴屋等は家集の起原をなすものであらうが、今傳はらな

日用至近の理に照ひ、且俗語俚語の言葉にす

「む鹿」である。「刊行」貞享三年三月「諸

なつて居る。全體に能がかつた仕物である

「云波草」(五巻)著者「田中

「云波草」(五巻)著者「田中

「能狂言」(別名)小原梅

「異學の禁」(別名)江戶幕

伊賀越

歌舞伎・浄瑠璃「題材」

較る故までは「兼掛合羽」により、その後「沼

者おのづか化する傾向

「伊賀越増補合羽」(別名)江戶時代文

gesch. 5. Aufl. 1923. || Wa. d. i. |
 Vaterpsychologie—Sprache. 211. 1922.
 (附: 8. Kapitel.) || Sprach. z. i. Einfuhr-
 ung in die Reden, 1923. ||
 Mathys, Sprachw., Wort- und Redewur-
 ungskunde, 2. Aufl. 1926. ||
 Hatfeld: Leitfaden der vergleichenden
 Romanologie, 2. Aufl. 1928. || Die-
 rich: Probleme der Sprachpsychologie,
 1913. || Marty: Untersuchungen zur
 Grundlegung der allgemeinen Gram-
 matik und Sprachphilosophie, 1908.

〔註〕 Marty の紹介及び解説 O. Funke:
 Inner Sprachform, eine Einführung
 in A. Marty's Sprachphilosophie, 1924. ||
 O. Funke: Grundfragen zur Bedeu-
 tungstheorie (Sonderdruck aus: Eng-
 lische Studien, Bd. 62 & 63), 1928.
 〔註〕 哲學的(論) Ogen und Richards:
 The Meaning of Meaning, and el.
 1927. || Cassirer: Philosophie der symboli-
 schen Formen, I. Teil: Die Sprache
 1923. || Husserl: Logische Unter-
 suchung, 3. Aufl. 1922. || Gomperz:
 Weltanschaulicher, I. Teil: Semi-
 ologie, 1908. || Aumann: Die mensch-
 liche Red. I. Teil, 1925. — II. Teil,
 1928. (後述の(論)の註) Blücher
 für Deutsche Philologie, herausgege-
 ben von Hugo Fischer, 4. Bd. Hoff u.
 Berlin, 1920. (註) 〔註〕

生きてゐる小平次 オモロカ 戯曲
 三幕 【作者】鈴木三郎 【発表】大正十三年
 八月 【演劇新聞】刊行 翌年五月、鈴木三郎

として世界屈指と数へられ、劇力その全集を
 観望完成した彼は、沙翁劇がわが歌舞伎劇と
 相違する構造を有することを認め、これに依
 るわが國劇の刷新を思ひ立つた。されば名作
 「第一幕」(前編)の如き仔細に點検すれば、そ
 の可成り濃厚な影響が認められる。(例へば、
 演劇場所の場、ハムレット中のオフィリア
 狂風の場があり、その茶坊主珍相を刺
 す一節は、ハムレットが鼠々と呼んでコロ
 アスを刺す技巧の適用なることが分り、石川
 伊豆守の片側且元寇を演ぶ一節は、ジュリア
 ス・シーザーの中のカシアスが、ブルタス邸に
 忍ぶ一節を参照せしめる)。又「牧の方」の創
 作に當つて、作者は「マクス」を暗示として
 思ひ浮べてゐた。劇譯でなく、劇案でもなく、
 又撰版でもない、渾然たる自家創作に英國文
 藝の影響を生かしたのもとして、これらの作
 品は最高水準を示してゐる。なほこの沙翁の影
 響は必ずしも劇の中に限らない。断片的には
 小説の中にも無数に拾へる。後に家庭小説の
 「名作として傳へらるゝ大倉橋の」(「櫻吹雪」
 の、狂風の女主人公が櫻吹雪の中に歌ふ有名
 な一節は、直接に中間に「ハムレット」中
 のオフィリア狂風の場から構想を吸き取られて
 思はれる。沙翁劇を除けば、直接わが
 劇壇と交渉の著しいのは近代劇のみである。
 初め島村抱月・小山内薫などによつてビネロ
 やショウや、オスカワイルドによつてメネ
 ンテである。未だ大なる勢力をなすに至らな
 かつた。然るに松村みづ子などが率先してア
 イランド劇を移植紹介するや、俄然として
 劇壇の注目を集め、イーワッ、ランダ、ゲンセ
 ニイ、グレゴリー夫人などの作は、わが創作

三郎戯曲全集に收載。後、現代戯曲選集第六
 巻、日本戯曲全集第四十七巻所収【上演】作
 者没後、大正十四年六月、新橋演舞場。配役
 は小平次(勘十郎)、太九郎(第五郎)、女房お
 ちか(奥丸)笠置田中良。次いで昭和二年十月、
 近代劇場演出、市村座。
 【解説】(一) 劇 奥州郡山安積沼。陰曆四月末、
 沼の中央に小舟。そこで、役者の小平次と囃
 方太九郎の二人が釣をしてゐる。突然思ひ切
 つたやうに小平次が、自分は太九郎の女房と
 四年前の不義を續けてゐるが、あきらめて女
 を失ふわけにはゆかぬかと切り出す。太九
 郎は嫌だと言ひ、女房は分相違の役者をして
 ゐるに過ぎぬと突放す。寶言葉に買ひ入る
 二人は激しい口論の末、太九郎が打下さ船板
 で小平次は帆を破り沼に落ちる。更に血まみ
 れで這ひ上らうとするのを半で腕打して突落
 す。(二) 沼の太九郎の家。おちかが鏡臺
 に向つてゐる。小平次が傷復生々しく入つて
 来、太九郎を殺したから一處に逃げてくれと
 云ふ。女も且驚いたが承知して支度する所
 へ、太九郎が歸つて来て道中差で小平次に切
 つける。女も小平次の虚構を怒り共に馬乗
 になつて逃げ出す。(三) 幕 海は近き
 二人は江戸を逃げる。男はまだ小平次は生き
 てゐる、彼は何處までもつて来ると、その
 死を誓ふが、女は却つて度胸が揺るがり、
 男の熱病風を嘲る。太九郎は女を置いて去ら
 うとする。二人の後から小平次に似た旅人
 うたとす。(四) ついでゆく。(註) 〔註〕

劇にも濃き陰影を落した。松居松葉の「茶を
 作る家」(前編)、久米正雄の「地獄廻り出来」(「茶を
 作る家」)など、前者は劇案として、後者は暗示を受け
 たものとして、著しい例であらう。最後に菊
 池寛がある。彼はショウやを初め、英國現代劇
 の造詣に於ては公然と自負する所がある。
 そして、自家の創作を「現實主義の勝利」と言
 つたが、これを外國文學影響と云ふ一點のみ
 から観察すれば、英國現代劇の勝利と置き換
 へて考へよう。
 【評述】坪内逍遙の沙翁劇に於ける如く、深
 き小説の餘になる顯著な感化を、小説に於て
 見てゐるものは、夏目漱石に於ける「メレ
 イ」である。英國文學に造詣の深い彼は大陸文
 學全盛の日露戦争後の明治文壇に、自家獨白
 の旗幟を樹立した。初期の作「倫敦塔」がメ
 イズ・オースの同名の作の暗示になれるは自ら
 もこれを語つてゐる。「倫敦塔」(幻の府)は、ア
 ーサー・ウェルズより出た。「吾輩は猫である」も
 英國文學特有のユーモアとサタイヤを採擷し
 たもので、そこには数多くの作家等の暗示が
 混入してゐる。「廣島人草」がメレダイスの環
 境を思はしめる事は、當時から批評があつた
 が、筆致の全く一變した晩年に近い諸作、即
 ち「行人」などに至るまでも、やはりメレダイ
 スの匂は著しい。その中間に彼の「阿」(「そ
 れから」にはメレダイス以外彼の推稱してゐ
 たジェーン・オースチンの風格をともむこと
 が出来る。芥川龍之介が晩年に試みた獨自體
 の心理解剖なる諸作は、プラウニングが獨
 特の調べる「ドラマチック・リリー」なる詩體
 の研究から創案したものであることは自らも
 認めてゐる。併し以上の外、別に謂つて十分
 の研究を要するは、初期に於けるわが政治小説

妖氣が漂ひ、殊に第一幕小舟の中の對話は圓
 轉自在で、且つ鬼氣迫る効果を十分に持つて
 ゐる。第三幕の女もよく描けてゐるが、第一
 幕で二人の説明したおちかとは感じの違つた
 女になつてゐる。圓轉を圓轉として取扱はず、
 而も脅迫心理の説明に簡潔なかつた所に新し
 い見方と形式がある。史實傳説の戯曲化は数
 多いが、所謂生きた表現を得るものは少ない。
 實に彼の作品中でも傑出したものであり、大
 正後期戯曲時代の代表的作物の一つである。(註) 〔註〕

意義變化 (一) 言語學 【解説】言語
 の音韻變化(音韻)に對する事項。或る単語・連
 語について、その臨時意義(意義變換)を考
 へる時は、その慣例意義と比べて、必ず何か
 の差を生ずるものである。例へば「花」とい
 ふ語を、或る實地の場合に眼前の菊について
 用ひたるとすれば、「その菊が臨時意義であつ
 てる」といふ。また「花」の慣例意義である
 加する。尤も廣く、これを一つの意義
 變化であるが、通常慣例意義の變化につ
 いてのみいふ。變化の種別、単語・連語の意義
 を表す方面(感情)の二に分ければ、その
 各々に對して變化を發見することが出来る。第
 一、表音方面では同音(イ)廣くなる。例へ
 ば「瀬戸物」がすべて陶磁器の意となる如
 き。(ロ)狭くなる。例へば英語のポトス
 (小舟)が日本語に入つて、西洋型の特殊
 の小舟の意となる如き。(ハ)推し移る。例へ
 ば「かね」(金屬)が、金屬でない器物(貨
 幣)となり、更に轉じて、金屬でない紙幣
 をもかねといふ如きに分類される。第二、
 感情方面では、(イ)向上。例へば「あなた」
 (方角)より轉じて人の尊稱となる。英語で

説と英國文學との關係である。元來政治小説
 (如く)は英國の文學者にして政治家なるデー
 スレリに依つて創始せられた新ジャンルであ
 るから、求職論・須藤南翠等の諸作の評價
 には、特にそれとの關係が留意されなくては
 ならない。
 【評述】明治の文化は全面的なスタートを英
 國の影響の下に切つたと見てよく、初期の開
 拓者、福澤諭吉から坪内逍遙に至る迄、よき
 意味の實主義的養分をその文體の末に至る
 まで見せ、徳意のそれと亦その内外のもの
 には、一層に徹する高田半華の「吾輩は猫である」
 以て最初と見なすべきであらうが、これそれ
 の形式から用語まで英國的である。併し明治
 文壇に最も大きな感化を與へた批評家の雙璧
 であらう。後者は先づ文學界に誌上平田亮木
 であらう。彼らは先づ文學界に誌上平田亮木
 に依つて紹介されたが、その風格をより多く
 認むべきものは寧ろ上田敏であった。彼は
 心算にメメタアを師として仰ぎ、その學得せ
 る所も大部分メメタアに負つたと告白してゐ
 る。彼が知識の範圍、論評の方法は因り、そ
 の典雅優婉な文體にまで影響が認められる。
 アイノルドに學んで而も渾然としてその風格
 を留めた批評家は島村抱月であつた。用意の
 周到さに於て、理解の味に徹せることに於て、
 元來抱月にはアイノルドに似た風格があつた
 のみでなく、海外からの歸朝後「早稲田文學」
 の創刊號に載せた「因はれたる文藝」の如き
 ノルドの「下したるもの研究」の冒頭に心に
 描いた筆を下したるものと思はれる。彼が「レ
 ニズム、ヘライズムの對立として解釋した

(古代英語 Blytts 食物の世話をする人の
 義)より轉じて、主人・殿様・紳の義となる。
 (ロ)下流。例へば「吾輩」(人の畜ふ生物より
 轉ず)「貴族」等に分けられる。ウットは意義
 變化を心理學上より細かに分類してゐるが、
 まだ實際各國語の研究に多く適用されてゐな
 い。(註) 〔註〕

〔參考〕意義學及びその參考書を見よ。
イギリス文學の影響 【解説】英
 國文學は歐米文學中、最も長期に亘つて著し
 い影響を、文學の各分野に與へてゐる。翻譯
 は不完全ながら翻譯を通じて幕末既に試みら
 れ、明治になつてから泰西の組織的な文學概
 論的知識も先づ英國を通じて紹介された。
 西澤の「知能」を初め、「明六雜誌」に掲げられ
 た諸篇は因り、久しく文學史家の間に原典
 の疑問とせられてゐた菊池大豊の「修辭及華
 文」もチン・ナアの百科辭書中の文學の部の翻譯
 文にチン・ナアの百科辭書中の文學の部の翻譯
 文に外ならなかつた。更に明治新文學の嚆矢
 となつたと言はれる坪内逍遙の「小説神髓」に
 至つては、當時の英米諸雜誌に現れた各種
 の小説論の取捨整配の上に基礎を築いたもの
 である。爾來英國文學の影響は、劇小説評
 論、詩等、頗る廣汎に亘つてゐる。
 【註】古劇にあつては、極めて稀な例外を除
 けば、シークスピア以外の作家は殆ど吾が
 創作の培ひとなつて居るまい。その劇案
 は最も早く、明治九年の頃、ウエニス商人
 の譯「蘭間」の奇談が出現する。十八年に至つ
 て宇田川文海は「阿波後醍醐天皇」ウエニス
 商人劇を筆頭に、數篇の劇案を新聞紙上に
 發表した。併しこの古今に絶た大劇作家の
 影響を自家創作の中に見せてゐるものは、何
 と言つても坪内逍遙である。後に斯道の學者

歐米文學史の二つの基本的觀點も、やはり
 アイノルドに出てゐる。メメタアとアイ
 ノルド以外では、アイサー・シモンズの影響が
 大きい。なほ純粋に文學批評のみとは言へぬ
 が、ミル、スペンサー、カーライル、ラスキン
 などは、思想家として間接に明治文壇を培
 育したことも多大である。
 【註】明治に初めて詩を創始した「新詩抄」
 の中には若干の英詩の譯があり、それから推
 しても泰西の詩と言ひながら英國詩から主と
 して思ひつゝ、彼等はあの前後に於て一
 手手した事がある。日清戦争の前後に於て一
 派清新な情懷を吹き込んだ「文學界」の同人
 は、特にシエリ、キーツなどの浪漫派の英詩
 を歌んだ。窪田泣菫や蒲原有明にはロゼッ
 ヤスキン、ポールを學びしめるものが數々あ
 る。又泣菫の如きはプラウニングの「懷郷詩」
 を、指辭構想と云ふ。なほ「十月大和」にあらま
 しかば「作つてゐるが、感化を受けたものと
 してこのやうなものも珍らしい。それから兒玉
 花外が日本のバイロンと稱されたやうな例も
 ある。だが逍遙の沙翁劇、漱石のメレダイス
 にも比して、或る特定の一家から深甚の感化
 を蒙つてゐるのは、却つて國木田獨步が、そ
 れも詩の上でなく、小説の上に見せたワ
 ーヌワースの深き影響である。獨歩のほど、自
 分のものとなり切つてゐるかどうかは疑問だ
 が、厨川白村の論文「近代の文學變遷」に於ける
 プラウニング(のし)「のし」の言及なども註に
 附記しておくことは無用であるまい。(木村)
 【參考】明治の翻譯文學研究 外國日本文學
 内田嘉康(上) ○明治大正時史 日露戦争之介
 ○明治翻譯文學概観 本村政道(文學史學)

意義論

言語学【名詞】(國) Die Bedeutungslehre; Die Semasiologie【語】

居枕【名詞】(内) 居枕なる者が、平生出入する某の所で、よく来たと言つては頭を打たれるので、清水へ参籠して被る

生島新五郎【名詞】(俳) 生島新五郎(いんこうごろう) 俳 傳【初名】野田新五郎(いんこうごろう) 寛保三

生田

生田 生田小幡町で歿す。享年七十三。【簡歴】大阪に生れ、早く江戸へ下り、中村七三郎の

生田 生田小幡町で歿す。享年七十三。【簡歴】大阪に生れ、早く江戸へ下り、中村七三郎の

生田 生田小幡町で歿す。享年七十三。【簡歴】大阪に生れ、早く江戸へ下り、中村七三郎の

生田

生田 生田小幡町で歿す。享年七十三。【簡歴】大阪に生れ、早く江戸へ下り、中村七三郎の

生田 生田小幡町で歿す。享年七十三。【簡歴】大阪に生れ、早く江戸へ下り、中村七三郎の

生田 生田小幡町で歿す。享年七十三。【簡歴】大阪に生れ、早く江戸へ下り、中村七三郎の

生田長江

生田長江【名詞】(俳) 評議家【本名】弘治 鳥取縣日野郡根野町大字員原に生る。【簡歴】

生田長江【名詞】(俳) 評議家【本名】弘治 鳥取縣日野郡根野町大字員原に生る。【簡歴】

生田長江【名詞】(俳) 評議家【本名】弘治 鳥取縣日野郡根野町大字員原に生る。【簡歴】

生田

生田 生田小幡町で歿す。享年七十三。【簡歴】大阪に生れ、早く江戸へ下り、中村七三郎の

生田 生田小幡町で歿す。享年七十三。【簡歴】大阪に生れ、早く江戸へ下り、中村七三郎の

生田 生田小幡町で歿す。享年七十三。【簡歴】大阪に生れ、早く江戸へ下り、中村七三郎の

生田

生田 生田小幡町で歿す。享年七十三。【簡歴】大阪に生れ、早く江戸へ下り、中村七三郎の

生田 生田小幡町で歿す。享年七十三。【簡歴】大阪に生れ、早く江戸へ下り、中村七三郎の

生田 生田小幡町で歿す。享年七十三。【簡歴】大阪に生れ、早く江戸へ下り、中村七三郎の

生田

生田 生田小幡町で歿す。享年七十三。【簡歴】大阪に生れ、早く江戸へ下り、中村七三郎の

生田 生田小幡町で歿す。享年七十三。【簡歴】大阪に生れ、早く江戸へ下り、中村七三郎の

生田 生田小幡町で歿す。享年七十三。【簡歴】大阪に生れ、早く江戸へ下り、中村七三郎の



茶見世の場に於ては、大阪の風流で、曾根時十三回忌が演ぜられたのを曾根さんだとして、曾根時心中(曾根)に類似の場所が多く、殊に上野天満宮内には、曾根時心中の上野生玉社頭(曾根)によく似て居る。殊に曾根時長作(曾根)に就いては、作者自身も作中で「風の曾根時(曾根)が面白うて、再々見るとかしたが、よう見覚えだ。取りも直さず油屋の九平次、惣じて狂言浄瑠璃はよしあし人の體になる。おれははたりの手本にして、かゝる師匠の九平次より倍越した大かたり」と、寛平次に罵られて居る通り、全く九平次型の敵役で作られて居る。中野九平次(曾根)に出見世の場で、五兵衛が寛平次におきかるとの精進を強ひて承知させ、その固めの蓋にとて寛平次の差出す藁藁の大皿(曾根)から、から、さらさらと酒にはあらぬ一歩銀を山とあけて、慈悲知らぬ親の酒を見よ、誠の慈悲の味を飲んで知れよ」と言つて泣く條は、「心中二枚銀草紙(曾根)の中野市郎右衛門が芝居へ供へた神酒利から酒と思つて一歩銀をつぐ趣向からの脱化と思はれるが、場面が緊張感に比較にならない上に、親の眞情がよく溢れ出て居る。

自の作として傳へられるものは一曲も無い。彈法に真行草を分つことは、この人に創まると稱する。上方歌は、元來京阪地方に於ては三味線に合せるのを主旨とした。八橋流や生田流では、これを筆に移して手調子で弾いた。これを移したのが生田流らしい。手技は正徳五年六月六十歳で歿した。【曲風】手事を重んじ、筆に對して斜に坐ると右手が動かし易くて姿勢をよくなし得る。これが山田流と異なるので、特徴も亦ここに存する。今京阪地方に専ら行はれる。【著者】

池田大伍 (いけだ おおご) 劇作家。【本名】銀次郎。【出生】明治十八年九月、東京京橋區銀座四丁目。生れた。【開業】家は舊幕時代以来の商家。明治四十年、早稻田大學英文科に卒業。同四十二年才藝協會(劇團)の再興に際して、それに關係した。大正二年、同協會の解散後は、東國織造・土肥春彌等と共に無名會を興し、始めて同劇團の爲めに脚本を書いた。無名會解散後は専ら劇作家として立つに至つた。主な作品は、「瀧口時頼二親友」天木屋半三「名月八橋」(一)雨澤庵(二)南方女兒國(三)紙繭「等がある。東西演劇を研究し、殊に支那劇に精しい。【作風】その作劇の手法は、深い研究によるもので、一々の成果を原作の上に實踐して得た。一々の成果を原作はれる。聰明な理解の人であり、手回し手法の作家である。回顧的な趣味と上品なユーモアと、而も一味清新な感傷とは、その作品を重からせる所以である。【名月八橋】(一)西郷と阪屋「等がその代表作である。【著者】

名づけたので、巻末に「かきつむる波の瀟瀟に深からぬ池の心のかに見ゆらむ」の自作歌があつて居る。又著者の漢語の師である江村北海の序文に、「吾所以名池瀟瀟、取義於瀟瀟後百首中、伊勢則可謂瀟瀟事之和歌云」とある。【成立】昭和八年一月一日起稿、二月十五日完成【讀本】(一)原本、自筆本は所在不明。著者の夫、廣徳如松筆のもの(六巻、紙本とある。(二)史蹟集(巻本、第六十六頁四十四頁)原本と比べて、假名遣の差異の通じ難い所が十数ヶ所ある。(三)覆刻本は、國文叢書第十一巻、女流文學全集第二巻、日本文學大系第三三巻に載せられてゐる。

【組織・内容】「瀟瀟」の記事に次で、後醍醐天皇の元弘三年(一九三三)から後醍醐天皇の慶長八年(一三三三)まで、十四代凡そ二百七十年間の記事である。その内容は、第一後醍醐天皇、第二光厳天皇、第三光宗天皇、第四崇光天皇、第五後光嚴天皇、第六後醍醐天皇、第七後醍醐天皇(以上北朝の天皇を宗とし、南朝の天皇を附載)、卷第八後醍醐天皇、卷第九後醍醐天皇、卷第十後醍醐天皇、卷第十一後醍醐天皇、卷第十二後醍醐天皇、卷第十三後醍醐天皇、卷第十四後醍醐天皇である。四巻に及び、石山寺の老尼との物語に擬して、古曲趣味を主として書いたものであるから、平安朝風の情趣を現はすべき朝廷の儀式・典章・遊宴・管絃・歌合等、及び宮廷間の情事遊談等は悉く述べてあるが、南北朝の争、應仁の大亂等に關しては極めて簡略に記してある。成氏、義満、秀吉、家康等の性格も武人めなく、極めて温雅な平安朝風の精神らしく描いてある。

資料は「太平記」「吉野拾遺」「新葉集」「大関記」等により巧に取扱接挿して居る。【價值】學問として、これほど簡明に系統だてて四十餘日間で、これほど簡明に系統だてて纏めあげた技術は誠に推賞すべきで、和歌・古典・漢詩の造詣が頗る深い故、その編者用は自由自在、中に四六辭體の影響を受けて、全篇を通じて平安朝風の趣致にふさはしくない所もあるが、概して語彙の豊富な爲めに情景の描寫に生彩がある。「大関」に於ける道長や、「瀟瀟」に於ける永久・元弘の變の如く、作者の熱意の凝集した力量の現れならぬのは最も惜しむべきであり、本書の價值を低める所以であるが、或は巻末細川藤孝の「やき春は寒にけり」の歌を以て纏束したのである。【著者】池田大伍

池邊三山 (いけべ さんざん) 新聞記者。【本名】吉太郎。【別號】鐵屋。【生歿】元治元年(一八六二)に生れ、明治四十五年(一九三二)享年四十九。【開業】池邊吉太郎の長男、十四歳西南の役に父を失ひ、佐賀縣令徳田龍樹の補助によつて慶應義塾に入つた。中退後、大阪に出て「報世評議」に執筆し文才を認められた。上京して日本新聞の客員となり、明治二十六年、若

藩主細川護成に隨つてフランスに留學。巴里から日本新聞に送つた巴里通信が、鐵屋の筆名と共に、俄然有名となり、異彩ある記者としての地位を認めしめた。二十九年大阪日新聞の主筆として入社し、三十三年、東京朝日新聞主筆に轉じ、厚利を極めた外交論、その他豐富な問題と老實な議論をもつて、第一流の大記者たる實力を確立した。その後十數年に亘つて朝日新聞の筆政を主成した。

【批評】鳥谷透春は、彼の文章を、その文通倍なれども、これを知らず、氣魄と筆力を以てするが故に、文品自ら尋常の時文家を抜くこと一等、文字往々散漫にして緊約を缺くと雖も、用語朴茂にして立論老成情熟せず、靈敏せず、譯々として能く理を悉す所、居然として大家の風あり」と批評してゐる。三山は随南・隨堂(如雲)・蘇素と共に、明治新聞界の時文の四大家である。彼はまた新聞に於ける文藝の要素を最もよく理解した記者で、夏目漱石・二葉亭四迷を朝日新聞に入社せしめたのも彼の發意によるものである。【著者】

池邊義家 (いけべ ぎけ) 國學者。【本名】生茂。【生歿】文久元年十月に生れ、大正十二年三月六日歿す。享年六十。【開業】熊本藩士池邊軍次の子。明治十一年西南役起るや、父兄は薩軍に屬した。その規定後神宮古典講習所に後上京して、同十五年東京大學古典講習所に入り小中村清邦に就いて學び、同十九年卒業後その弟子となつたが、同三十年事情あつて原姓に復した。その間、宮内省圖書寮に就任し、第一高等學校、女子高等師範學校の教授に任ぜられ、帝室博物館歴史部員を兼ね、史料編纂委員となつた。同三十一年フランスに留學。同三十四年歸朝。同三十五年京都帝國大學講

師として古代法制史を講じた。大正三年御歌所寄人筆臨時寄室編輯局編輯官に任じ、明治天皇御紀」を編纂。同十二年その執務中、腦溢血で倒れた。病床にありて、一時小廉を見た時「玉の緒をつなぎとめり諸人のあつさまことのくる方に」と詠んで看護者の勞を謝した。「著者」頗る多いが、特筆すべきは萩野山之、齊合直文等と共に編輯校訂した日本文學全書二十四巻(復成館刊)で、明治二十三年より二十五年至つて完成した。收むる所「竹取物語」以下「源氏」に至る三十八種(古事記通釋「新撰日本外史」(國風風俗問答等、及び少年文學書として、「武士道英辭」(宮本無三四一等の傳記性の著述がある。又法制史家として「日本法制史書目解題」の著がある。その他同時の論文としては、「泉典講究所講演集」「國學院雜誌」「京都法學界雜誌」「史學雜誌」等に所説を發表した。【著者】

夷國滑稽羽栗毛 (いげん かくし どりべ) 滑稽本。【作者】宇多榮虎九郎(名) 外國を飛行して見物する滑稽旅行の意である。羽栗毛は勝栗毛のちり。【刊行】文化四年。後編の廣告は出なかつたらしい。【題材】羽栗毛が飛行する趣向は「風流志道軒傳(羽栗毛)」にも見るものである。名稱から察すれば、外國の珍しい風俗・怪談・傳説などを取り入れる心であつたらうが、前編には未だそれが見られてない。

なく幾枚かの場羽栗毛、羽衣を作れとのお告げであつた。漸く出来上つた羽栗毛を身につけて見ると、不思議にも體が軽くなつたので、特長山邊を飛んで見た。一寸熱風と空遊つた下で、屋敷店の朝子を見たが、それは土團子であり、屋敷店の婆を始めて見ると、天狗だと大驚きした。田助は秋葉の森まで飛んで、これ位で疲れたのは諸國飛行も驚かない。秋葉の森の天狗にもつと自在に飛べる方法を尋ねる。秋葉の天狗は何れも通人達の如く、酒落や穿ちを言ひ、古原のことも幾多の事など落着めずさばり、田助も堪えかねたので一處にあつた食物で腹を食ひ、とろろと眠ると一人の天狗が現はれ、完全な飛行の術を授けた。目覚めて見ると、いつしか日本を離れて異國に來てゐる。一軒の大家の中に入つて見ると、姉の爲めに自分の妻は人に見えない。そこで方々を見物し行くうちに道が絶え、茫然と佇んでゐると、白髮の老人が小船に乗つて來た。この老人に案内されて古石場に至り、仙女の心に従へと命ぜられて、その間隙へ導かれる。

【構想】一九の「勝栗毛」より暗示を得たものであることは疑はれぬが、一九のは實際に即して寫實であるに對して、これは傳奇的・架空的性質を加味しようとしたものである。従つて單に「道中勝栗毛」の模倣とのみいふことは出來ない。多少創作態度を異にしたものである。【著者】

傳、「いさ」とは男。功の義で、上古の俗男神を「なまき」、女神を「なま」としたといふ説(新井自白)、「いさ」の「あま」、即ち「いさ國の男神」と、「いさ」の「あま」即ち「いさ國の女神」とであるとする説(日本文學研究)、「あま」を「あま」として「あま」を男子の敬稱、「あま」を女子の敬稱と解し、「神聖の男君」「神聖の女君」を意味するとする説(日本古事類考)等、頗る多くの解釋がある。【神格】國土・諸神・山川・草木等を生んだと、明かに生成神の性質を具へてゐる。而してこれ等のものを生み出す神は、ヘレネア(ヘレネア)に於けるランギ(Cat)とババ(Tia)と、希臘神話に於けるオウラノス(Uranos)とガイア(Gaia)の如く、天地とであることが多い。【神二神】も恐らく本原には天地と地とであつたらう。伊弉諾の兩眼から日月神が生れたとなす神話、伊弉諾が黃泉大神となつたといふ神話の如き、いづれもこの推定に味方する。日月が天の眼とせられ、大地が死人を收めるところが、多くに大地女神が死の掌管者となる事は、多くの民族に見出される宗教的、若しくは神話的現象であるからである。國土諸神の生成者として古史神話の上には、頗る重要な地位を占めてゐるが、その系譜に關しては區區の説があり、天照太神の兩親であるに拘らず、皇室の血統上の祖神と認められてゐなかつたことは、淡路國津名郡の伊佐宗伎神社が、貞觀元年に始めて一品を授けられた事實(神皇正統記)のあるによつて窺ひ知られる。

本原的には、天照太神がこの二神との間には關係が無くあつたかも知れぬ。【神話梗概】諸・册二神が、天神から瀆へる國を修理せよとの命を受け、天照太神を授かつて、

天浮橋の上から海原を探ると、矛の先から滴る雨が、涙つて自國島となつた。二神島に降り、天之御柱を見立て、八咫鏡を遺り、左右より柱を懸つて、男女・川・草木・風等の神を、大八洲に、次に海・山・川・草木・風等の神を、終りに天照太神を降すべくと定め、これを三大神の掌管すべきことと定めた。これが謂ゆる「國生み神話」である。その間に鮮兒を生んだが、三年たつても脚が立たぬので、天之御柱を廻るとき、女神が先づ喜びの聲を出した災であるとして、葦船に二人を流し渡したといふ神話や(記紀)、諸・册二神がことを行はんとして、その術を知らなかつた時、鶴鶴が飛來してその首尾を捕かしたといふ、二神がこれを見て交遊を學び得たといふ神話(一)書が述べられてゐる。伊弉諾は、諸神を生んだ都りに、火神道具土師(別稱)を生んで黄泉國に神遊りしたので、女神がその後を追つて女神の許に至ると、女神は「黄泉戸を閉めた爲めに、上界に歸られなくなったが、一應黄泉神に相談をして見る故、わが姿を見給ふな」と戒めて、殿内に入つた。女神の戒を破つて覗くと、女神の體に蟲が湧き八つ子の雷が生じてゐた。女神は怒つて、黄泉國の雷を打つて、女神を逐はせると、女神は雷・槌を投げて來た。女神は又槌を投げつけてこれを追ひかて來た。最後に女神自ら退却した。天神黃泉比良坂に石を置き、夫婦の契を絶つ契を立てる。女神は一日に千五百の産屋を立てると答へ、畿内へ行つてゐたからと、日向の橋小門で産屋をした。これが所謂「黄泉行き神話」とことわたしの神話である。

【著者】

【解説】 國生みは、天父と地母とによる太初...

【伊豆下田】 伊豆下田在藤堂寺村に彦右衛門と...

【解説】 伊豆下田の止むなきに至つた事情を述べ...

なるものと相知つた。銀次郎の姑は姫婦で、...

【傳習批評】 本篇は罪過を重ねた末、罪罰的...

【解説】 近松門左衛門全集第十巻所収は、其...

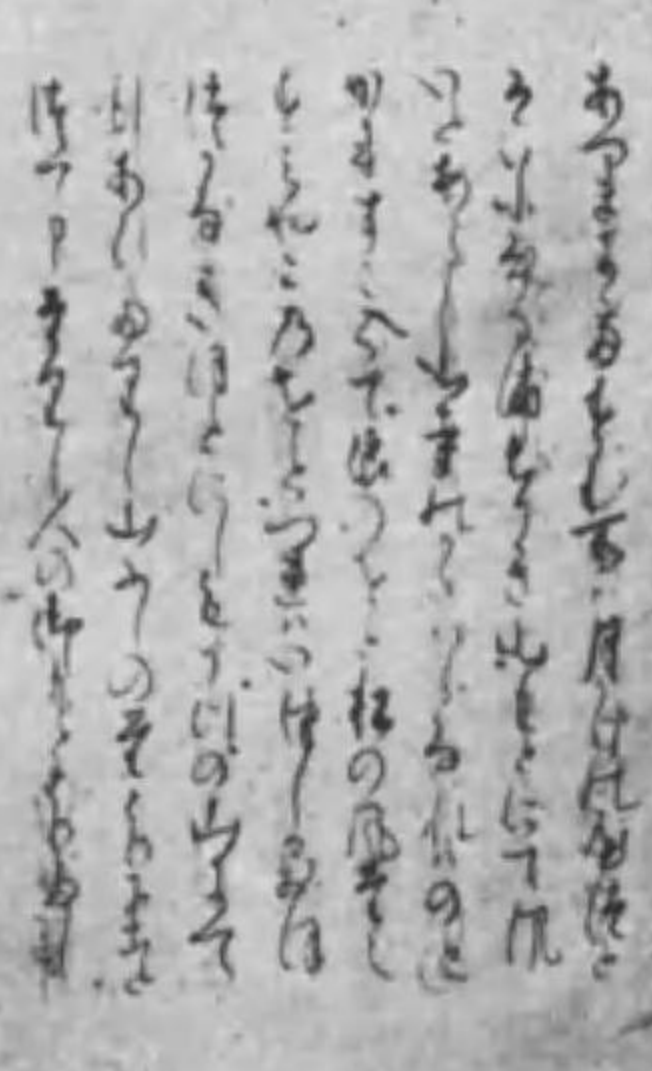
【伊豆下田】 伊豆下田在藤堂寺村に彦右衛門と...

【十六夜日記】 『いさな』の「いさな」...

【解説】 『十六夜日記』とは、『いさな』の...

【内容】 この書の内容は次の三から成つて...

【解説】 『十六夜日記』とは、『いさな』の...



記日作藤西門左衛門

【解説】 『十六夜日記』とは、『いさな』の...

【解説】 『十六夜日記』とは、『いさな』の...

て母の腹に従つて實子なる弟を斬らうと決心した利那に、爲家の申し下した救免状を携へた使が届けつけて、目出たく助かる。(五段)爲家は直ちに人々を具して参内すると、御恩斜ならず、兄弟を左右の兵衛に任じ、越後守に補せられ、十六夜は平内侍に授けられ、四衛尉と稱へて、安室門院に仕へることとなつた。母は勅許を得て、十六夜の幼年時代の教育に當り、實女を養育するに當り、御恩がては、同様に爲家の家となり、播磨の國を賜はり、うち連れて来てたく入部。

【構想】筋のよく通つた平明の作であるが、取立てで首ふべき特色も認め難く加賀屋の正本中ではさまで勝れた作とも評し得ないが、やや注目すべきは、二段目の人身御供話法に法華經の功德を取合せて、十六夜の悪業を逃れる仕組になつてゐるが、これは説經の系統に屬する古澤瑞穂に見る「御供話」の一種で、四段目の五世河原の場は「切實我がの御案」であり、「實女」は例の御供話の一種で、物産しの節の一代表と見られる。(黒木)

伊澤修二(いざわ しゅうじ) 教育家、國語學者【號】樂石【生没】嘉永四年六月二十九日信濃國伊那郡(現上伊那郡)高遠城下生まれ、大正六年五月三日歿、享年六十七【墓所】東京府北豊島郡高田町難波川谷墓地【開眼】六歳外祖父に就きて學び、八歳越前館に入り、二十歳明治三年高遠實業通生に挙げられて大學南校に學び、明治七年(二十四歳)愛知縣師範學校校長に任ぜられ、翌年文部省から米国に派遣せられた。同十一年秋歸朝後、多の官職を経て同二十三年文部省参事官となり、東京音楽學校校長、東京盲啞學校長を兼ねた。同二十四年非難。

同二十八年臺灣總督府民政事務局事務官に任ぜられて事務局長となり、次いで貴族院議員に就任。同三十二年東京高等師範學校校長、翌年病を以て辭任。同三十六年樂石社を創立し、餘生を吃音矯正に費した。

【著書】文部省編輯局長として「國定小學校本の編輯」を企て、臺灣に於ける諸報の教育制度を定め國語教育の根本方針を確立した。又師範學校の組織を整理してその基礎を築き、普通教育に體操科の必要を唱へ、音楽教育の創設並に整理に盡くす等(「天長節の歌」「紀元節の歌」は彼の作曲したもの)その功績は多方面に亘つてゐる。而も就に彼の名を不朽ならしめるものは、説話法(「義経」「源平」)の將來と盲啞教育の確立である。説話法とは、言語を用ひる音を發する際における發音機關の狀態を簡單な圖式符號にて示し、これによつて發音法を實際に修得するの便を得しめようとする一種の記號組織であつて、米人アレキサンデル・ベルから直接これを傳へられたのである。歸朝の後これを應用して啞生を救済し、更に吃音矯正法を考案し、その矯正の道標となつた樂石社を創立して言語の不具者の教育となつた。要するに彼は研究を實際の上で試みた街頭の學者であつた。

【著書】(普通書) 説話法(明治三十四年刊) ○國語發音指導(三十五年刊) ○國語發音新編(三十九年刊) ○説話法(四十一年刊) ○國語東北發音矯正法(四十年刊) ○國語正音法(四十三年刊) ○國定小學校本正音法(四十五年刊) ○吃音矯正の原理と實際(四十五年刊) ○吃音矯正練習書(其他) 日本語教科書、東語初編(支那人のために編した日本語の教科書、支那語學

書) 日清字彙(國語清國官話韻一收(三十八年刊) ○同文新字彙(四十二年刊) ○支那語正音練習書(大正四年八月刊) ○支那語正音發音(四年十月刊) ○國語支那語正音韻(五年刊) ○生理的心理學(明治三十四年刊) ○教育學(三十八年刊) ○教授法(三十四年刊) ○漢語教育學(三十八年刊) ○進化理論(二十二年刊) ○進歩理論(論説) 吃音の矯正(教育學第七三三) ○最近の國語問題に就いて(同上二一五六一) ○最近の國語問題の爲めに上田文學博士に與ふ(國學院雜誌一〇二二) 假名遣の變遷(同上) 論じて音義の本原に及ぶ(國學院雜誌一〇六六)

【著書】 石井宗叔(しらいむねぢ) 落語家【號】水魚【生没】生年不明、享和三年四月歿。應春石【生没】生年不明、享和三年四月歿。【開眼】世々落語を業として、中橋に住んだ。或は德川家の御坊主として下谷で生まれたといふ。狂歌狂句にも巧みであつたが、特に落語に興味を持ち、終に三笑亭可樂(羽田)の門人となり、屢々自作の落語を披露し、十哲の一入に數へられるに至つた。天明頃から既に一流落語家としての名譽があつたらしく、百戲途路にも「天明中は石井宗叔ならぬ」と有之とある。然らば可樂の門人とはいへ、或は先輩であつたかも知れない。彼の得意とされたものは長話であり、それは朝飯坊むら、別とよみも草、長話の祖といはれる。それと共に座敷仕話(新話)を好み、屋敷方(噂)せられて大いに評判をとつた。更に彼をして名をなしためは、話に音曲三味線を入れたことである。

石井宗叔(しらいむねぢ) 落語家【號】水魚【生没】生年不明、享和三年四月歿。應春石【生没】生年不明、享和三年四月歿。【開眼】世々落語を業として、中橋に住んだ。或は德川家の御坊主として下谷で生まれたといふ。狂歌狂句にも巧みであつたが、特に落語に興味を持ち、終に三笑亭可樂(羽田)の門人となり、屢々自作の落語を披露し、十哲の一入に數へられるに至つた。天明頃から既に一流落語家としての名譽があつたらしく、百戲途路にも「天明中は石井宗叔ならぬ」と有之とある。然らば可樂の門人とはいへ、或は先輩であつたかも知れない。彼の得意とされたものは長話であり、それは朝飯坊むら、別とよみも草、長話の祖といはれる。それと共に座敷仕話(新話)を好み、屋敷方(噂)せられて大いに評判をとつた。更に彼をして名をなしためは、話に音曲三味線を入れたことである。

石井宗叔(しらいむねぢ) 落語家【號】水魚【生没】生年不明、享和三年四月歿。應春石【生没】生年不明、享和三年四月歿。【開眼】世々落語を業として、中橋に住んだ。或は德川家の御坊主として下谷で生まれたといふ。狂歌狂句にも巧みであつたが、特に落語に興味を持ち、終に三笑亭可樂(羽田)の門人となり、屢々自作の落語を披露し、十哲の一入に數へられるに至つた。天明頃から既に一流落語家としての名譽があつたらしく、百戲途路にも「天明中は石井宗叔ならぬ」と有之とある。然らば可樂の門人とはいへ、或は先輩であつたかも知れない。彼の得意とされたものは長話であり、それは朝飯坊むら、別とよみも草、長話の祖といはれる。それと共に座敷仕話(新話)を好み、屋敷方(噂)せられて大いに評判をとつた。更に彼をして名をなしためは、話に音曲三味線を入れたことである。

これは長話と共に落語に一層の効果を與へたもので、音曲三味線入の祖とも仰がれてゐる。【系統】(二世)八丁堀の醫師鈴木某の男。通名會文馬と號した。讀み話を創始し、人情話にも巧みで、一派を開いた。(三世)二世の實子、中橋に住んでゐたが早世した。(四世)二世の門人で石井宗叔と云つた。(五世)喜久亭壽庵の門に入り、二世壽庵と名乗り、後、五世宗叔となつた。(六世)一落語家計奴部頼二(四代目石井宗叔)と號する。頼二は宗山といひ、羽州山形にて四代目より名を請ふとある。【附記】なほ「落語家譜」によれば、二世宗叔は喜鶴であり三世は二世の門人で宗山と言つたが、初代喜鶴喜鶴の餘孽で三世を襲名したといふ。喜鶴は明かでない。茲には根拠の「江戸の落語」に據つておく。(小糸)

石井飛騨権(いしひらふみ) 落語家【號】小川の岸で、樂石が手洗つて居た。きたない風體の僧が通りかゝつて所望すると、この岸は堅く食はれませぬと喰を吐いた。それ以來此地に岸を作れば、石同然で食ふことが出来ない。その縁は弘法大師であつたと云つて、今でも絶対に岸を築かせぬ村と、昔ばかり食用とするやうな岸だけしか作らぬ村とがある。【附記】この系統の話は、全国の隅々に行渡り、且つ略々弘法大師の通方に由ると解するに一致してゐる。北と南の例を比べて見ると、この傳説の發生は二段の順序があつて、後者は他の一方が既に相應に著名になつて又土着してその地の音語りとなつたことが想像される。暖かい土地には通例この傳説に伴なうて、岸が化して傳へられる手とよ

七歳の時、達に入道學して上京したが、翌年二月病を得て郷里に歸つた。これを機として詩興に湧き、二社に立ち「徳意」に相次いで新聞の長詩を新聞誌の編輯(明治)に發表した。それらを讀んで同三十八年五月、詩集「あこがれ」を出版。上田敏は序詩を、續詩は跋を寄せ、少年詩人の聲名はいよいよ高くなつた。翌月相思の相合節子と新妻とを感同市路に會ひ、雜誌「小天地」を創刊したが、物質生活の苦難に堪へず、流民村に退いて同村小學校の代用教員となつた。月手當八圓。當時友人に送つた書簡のうちに「詩人のみ眞の教育家なるべし」といひ、「詩人の眞實の友は、詩人ならず、讀者ならず、讀者ならざるべし」といひ、神のごとく無邪氣なる田圃の兒女あるのみ」といひ、小學校員としての使命を感じたことが窺はれる。偶々第二詩集の出版を計策して上京し、自然主義運動漸く盛んならんとするに會し、新聞の小説を讀む機會を得て、小説の創作に志し、「初もかげ」(「雲は天才である」「非列」)などを執筆したが、生活の衰を得るには至らなかつた。流民村に歸り、再び代用教員となつたが、校長柿原のストライキを起して職を去り、窮乏の極、北海道に放浪し、まづ函館にとゞまつて、同地の新聞社同人が發行しつゝあつた雜誌「紅首」を主宰し、職を演習業會議所に得たが、間もなく辭して、同地學生小學校代用教員となり、久しく離散の運命にあつた一家を創め

く似た植物が繁茂してゐる。これは多分石芋又は喉子芋の名を以て知らるゝ、Andrea Marichina であらうと思ふ。即ち外説は芋の如くにして、食用に堪へないこの芋の不思議なる存在を、曾ては神の罰であつたやうに解した信仰が、次には手に作るに適應せぬといふだけの村々にも移つて行つて、又新たな傳説を支へて居るのである。青森縣の三戸郡などでは、これを野老といふ植物の根の落つて食はれない理由として、また奈良縣南部の山村などに於いては、腫の多い鱧しか出来なない原因を始めとして、蓋置といふ菜の出来ないのも、又牛の仔の村に育たぬのも、共に弘法大師を欺いたから斯うなつたと云はれて居る(土俗考(三) 一四)。この種の頰項を極めた呪咀と呪詛には、諷刺傳説の類知したものも少ないので、何故この古風なる詛回神の實蹟が、全國一様に弘法大師の奇蹟に附會されるに至つたかを考へて見る必要がある。四國道者の風習は、何時頃始まつたものか明かないが、あの地方の聖地には、何れも大師に不親切であつた老婆子の口碑を存し、頰腫の徒は種々これを「話の種(三期)」に携へて行つたといふことであり、或は予説又は喉子芋の傳説も亦同様で、或はこの方面の旅人の中には各地の説話を同化させる力を持つて居たものがあるかも知れない。身なりの悪い旅人を輕蔑して制裁を被つたといふ話も、ちやうど輕蔑せられさうな旅人がしてあるといふのは、今ならば如何にも氣のさすやうなことであるが、實際昔の旅人はそれ位の驕奢な者が多かつた。こんな汚ない旅人坊主でも、事によると弘法大師が隠れてゐるに傳説の元かも知れぬと人が言ふと、南無三あはれた

と云つたといふ笑話もある(讀書。兎に角に所謂高野聖の徒は、この石芋系の説話傳説に、無關係だつたと云はないやうである。而も他の一方に、「常陸風土記」に見る宮城守波の大津波傳説、もしくは「備後風土記」の豫備にある蘇民・且且の兄弟の説話などが、夙く存在しなかつたら、突如として起るまじき傳説でもあつた。安房の海岸に近い青木村の芋井戸、或は上州太田の芋の爲めに、溝き泉を出して與へたいといふ話があつて、そこへ投げ棄てたと稱して石芋が水の中に茂つて居る。大國岡村の尻無川、筑前立石村の大根川等では、大根を所望して芋に成つて居る。このことが出来なくなつたと傳へて居る。全國何百箇所もある弘法水(三期)の傳説は、石芋の場合にもなほその痕跡を留めて居るのである。大師實蹟の口碑の最も古いものは、恐らくこの原始的なる生活需要、即ち水の恵みの問題に發し、弘く農作の全般に及んだものと考へられる。

【参考】 日本傳説集(アス刊) ○(藤田田村) 石川五右衛門一代噺(「義経又巻」)を以て見よ。 ○(藤田田村) 石川三四郎(「かきくさ」)評傳(「開眼」) 明治九年五月二十三日(埼玉縣見沼郡見沼村)山王堂に生れた。賢學館(今の賢學大)及び法學院(今の中央大學)に學び、同四十年、平民新聞の創立に参加し、初期の社會主義運動の一指筆者として、重要な役割を演じた。大正二年三月一日、密かに日本を脱出し、ベルギ



石川啄木(いしかわ たくき) 歌人【本名】(本姓) 石川啄木(ししかわ たくき) 歌人【本名】(本姓) 石川啄木(ししかわ たくき) 歌人【本名】(本姓) 石川啄木(ししかわ たくき) 歌人【本名】(本姓)

七歳の時、達に入道學して上京したが、翌年二月病を得て郷里に歸つた。これを機として詩興に湧き、二社に立ち「徳意」に相次いで新聞の長詩を新聞誌の編輯(明治)に發表した。それらを讀んで同三十八年五月、詩集「あこがれ」を出版。上田敏は序詩を、續詩は跋を寄せ、少年詩人の聲名はいよいよ高くなつた。翌月相思の相合節子と新妻とを感同市路に會ひ、雜誌「小天地」を創刊したが、物質生活の苦難に堪へず、流民村に退いて同村小學校の代用教員となつた。月手當八圓。當時友人に送つた書簡のうちに「詩人のみ眞の教育家なるべし」といひ、「詩人の眞實の友は、詩人ならず、讀者ならず、讀者ならざるべし」といひ、神のごとく無邪氣なる田圃の兒女あるのみ」といひ、小學校員としての使命を感じたことが窺はれる。偶々第二詩集の出版を計策して上京し、自然主義運動漸く盛んならんとするに會し、新聞の小説を讀む機會を得て、小説の創作に志し、「初もかげ」(「雲は天才である」「非列」)などを執筆したが、生活の衰を得るには至らなかつた。流民村に歸り、再び代用教員となつたが、校長柿原のストライキを起して職を去り、窮乏の極、北海道に放浪し、まづ函館にとゞまつて、同地の新聞社同人が發行しつゝあつた雜誌「紅首」を主宰し、職を演習業會議所に得たが、間もなく辭して、同地學生小學校代用教員となり、久しく離散の運命にあつた一家を創め

官物の傍系作品。義経滅亡の衣川合戦に關聯した秀衡の三男三郎忠衡夫妻の忠烈を物語る史實を基礎とし、義曲「錦戸」と同村。同じ舞曲の「高嶺」と姉妹篇の観を成す。

【参考】判官が高嶺の御所に移られて早や三年、秀衡入道を始め奥州五十四郡の大名小名苦心を寄せていつき願く。源氏は、源兄弟和陸せば源氏の遺恨に對する復讐の免れざるを怖れ、若宮の別當正に判官調伏を執り行はせると、論は秀衡の上現れて重荷となつた。

火を掛けさせ、二人の童に防矢を命じて燃やと切腹した。夫の死様を見届けたまは横いて自害し、その他の者共も同じ火中に投じた。

【参考】近古小説新編(初編) (泉鏡花) 泉鏡花(本名) 鏡太郎 泉鏡花(本名) 泉鏡太郎



泉鏡花

たり、全部十五巻、昭和二年七月を以て完成した。四年には、時事新報に「山海評判記」を連載した。今尚ほ依然として筆を執つてゐる。

【参考】最近の小説家 田中江江(員遊放第一) 第三、第四、水島上、信仰の作者同大、田中江江(員遊放第一)

【参考】泉鏡花(本名) 泉鏡太郎 泉鏡花(本名) 泉鏡太郎

【参考】和泉式部日記(一名和泉式部物語) 和泉式部日記(一名和泉式部物語)

合に參與してゐる。兎に角、これら泉式部...

【名】刊本として解へられたものは、たいてい...

明交文庫御伽草紙 日本文学大系第十九巻等...

【和泉式部集】歌集【卷】正集は、五巻二冊...

十七巻、合計八百三十九首である。續集は上...

びに變化があつて彈力と反響があり、(二)重...

によつて、和泉式部の作でないとする確證...

日本を、後人の轉寫したものである。『和泉式...

して大なるものでもなく、内容もたゞ一機受...



和泉式部日記の写本(東京西園三)...

【和泉式部】和泉式部日記(寛永)大坂市圖書...

【和泉式部日記】日記 一巻...

【和泉式部集】歌集【卷】正集は、五巻二冊...

【和泉式部集】歌集【卷】正集は、五巻二冊...

【和泉式部集】歌集【卷】正集は、五巻二冊...

待ちにしてゐるのだ。主人の病臥してゐるこの家の元日は淋しかった。おけんの語る新田村が途切れると一層三人の心を暗くした。幸

神樂舞を主とする宗教的及び政治的組織に裏づけられてゐるに對し、出雲系神話は、水及び雷を発生原動力とする諸神格の神性を中心とした宗教的及び政治的組織の産物である。

いたものである。慶長四年の頃、この流布は幾多の歌舞伎女を生じ、京都から諸國へ向け下

の断等は、古語を存して有数の文學である。歌謡は採録してゐない。

の新任式が行はれた後に、神祇官廳に於て貨幣の鑄造儀式がある。その時國造に關する品は、金鑄刀一口、銀二十匁、銅十匁、銅幣二十匁、銀二十匁である。

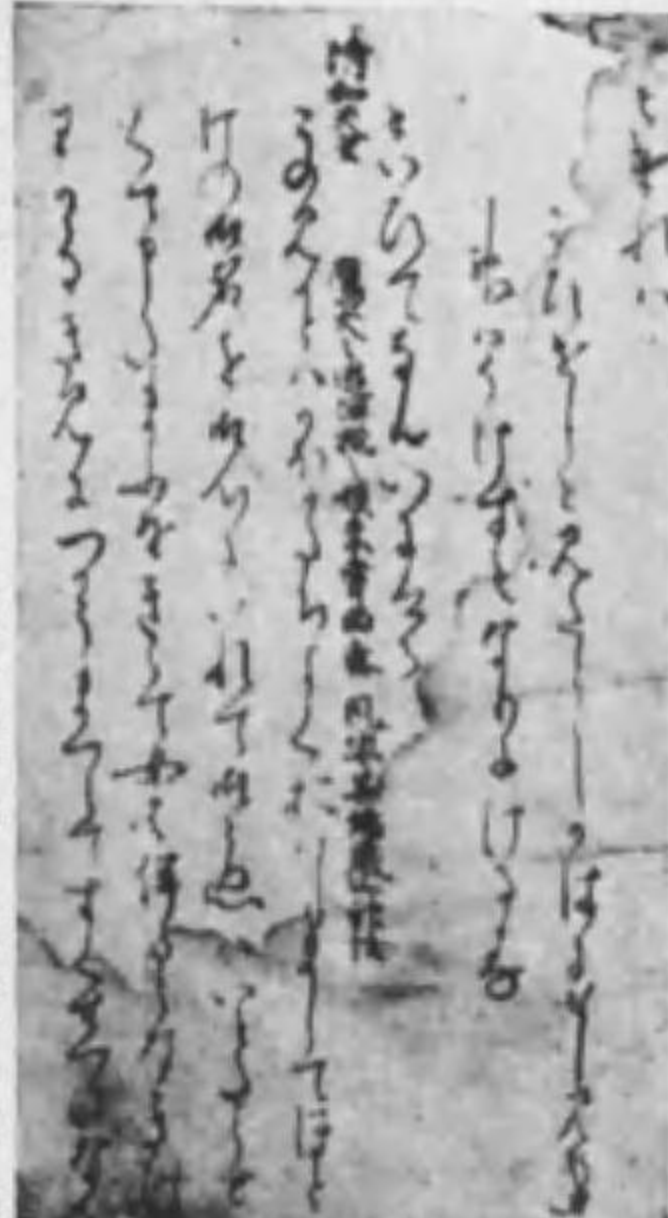
を、それ、帝都の近き守神として價めて置く。此等が國造の神傳であつて、記の如き官撰の國史の記載と著しく相違してゐる。

居室長全集所載「内容」本書は、その師範の著は批評を加へず、且つ内容と評述したもので、記述の形式、研究方法等は、凡て大體

を生み奉つたが、八つにて奉じ給うた。親王の御事を「拾遺集」に、生み奉りたけける親王

に見たてての見え。
【脚色】多くの材料を集め、この時代の脚本の
特徴を發揮してゐる。序幕は主として「保元物

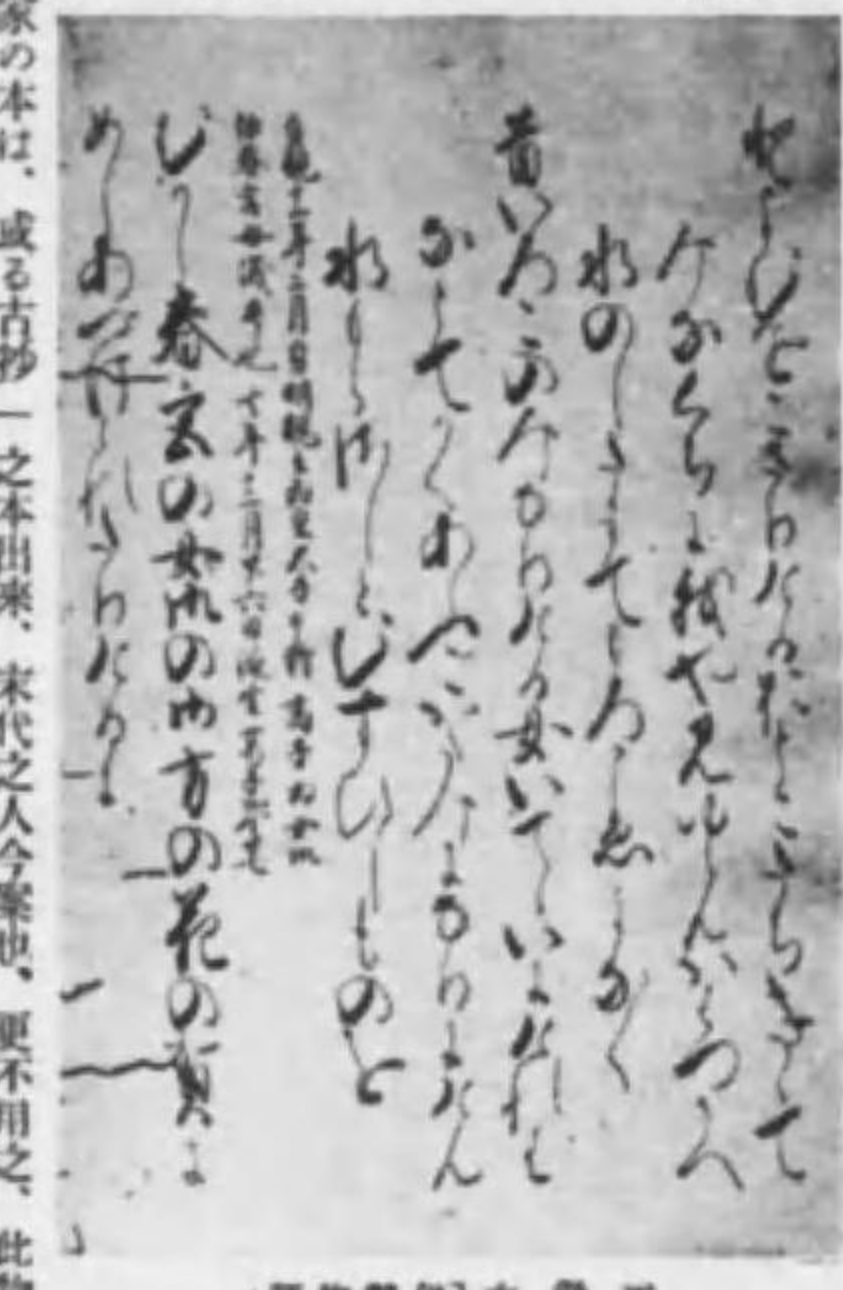
なほこれに聯關して、伊勢や日向の物語とい
ふ説もあるが、調査を要する。(四)伊勢齋宮
の記事から書名が出たとすもの。この説は



(藤原為家) 伊勢物語 本古

これ等の諸説は徳川時代に至り、賀茂眞淵の
「伊勢物語古書」によつて、嚴正に批判せられ

未だ生れない以前の記事も存する事から推し
て、「古今集」又は「後撰集」以後のものである



伊勢物語 本最正

之語無難者也 寛文四年初冬 冷泉左中将
爲清」とある。藤原朝從所收本が即ちこれ

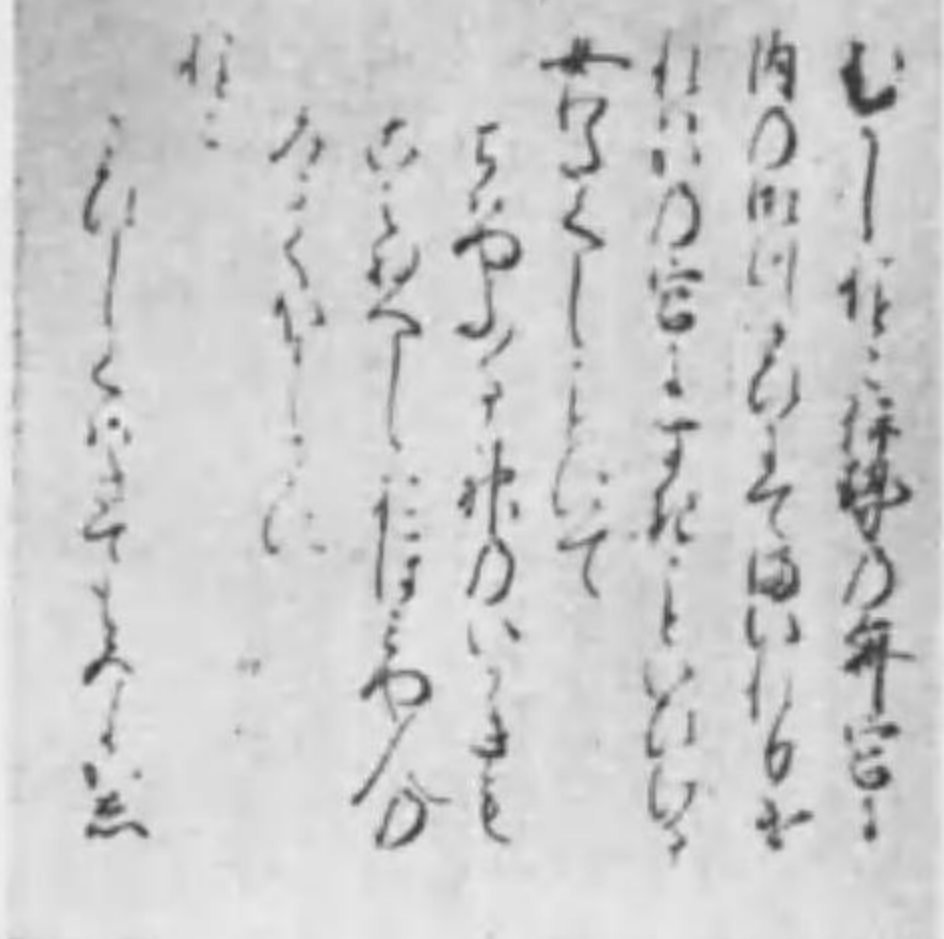
運が頼朝し、それから藤原親元、遺物として
送られたが、親元の没後、再び三條西家へ歸

へられたからである。第三に、定家自筆の「伊
勢物語」と稱する系統の本が一本ある。それ

してある。これには、諸本異本六條本など
分け、少しでも違つたところは悉く列挙して

翻案したものであろうと思はれる。即ち自記の家集の如きものを、日記の形にするため、初冠の段を前にし、臨終の段を後にして順序を立てたのが、今の諸本ではなからうかと思はれる。なほ、ありさうもない神異怪奇な説話があり、又もと單なる叙景の歌があつて、それに物語の内容が附加されたと思はれるやうな説話もあり、又中には、「萬葉集」その他の歌そのまゝを變形して取つて来て、主人公即ち昔あつての男の歌となすが如き説話もある。これ等によつて考へて見ると、「伊勢物語」の中には、純粋な物語が、物語の一部に編入されるか、或は抒情詩が、物語として展開するか、二つの新しい傾向を示されてゐる。而してかくの如き傾向は、葉平自身にあつたか、或は後人によつてなされたか、恐らくは、兩者共にあつたのではないと思はれる。

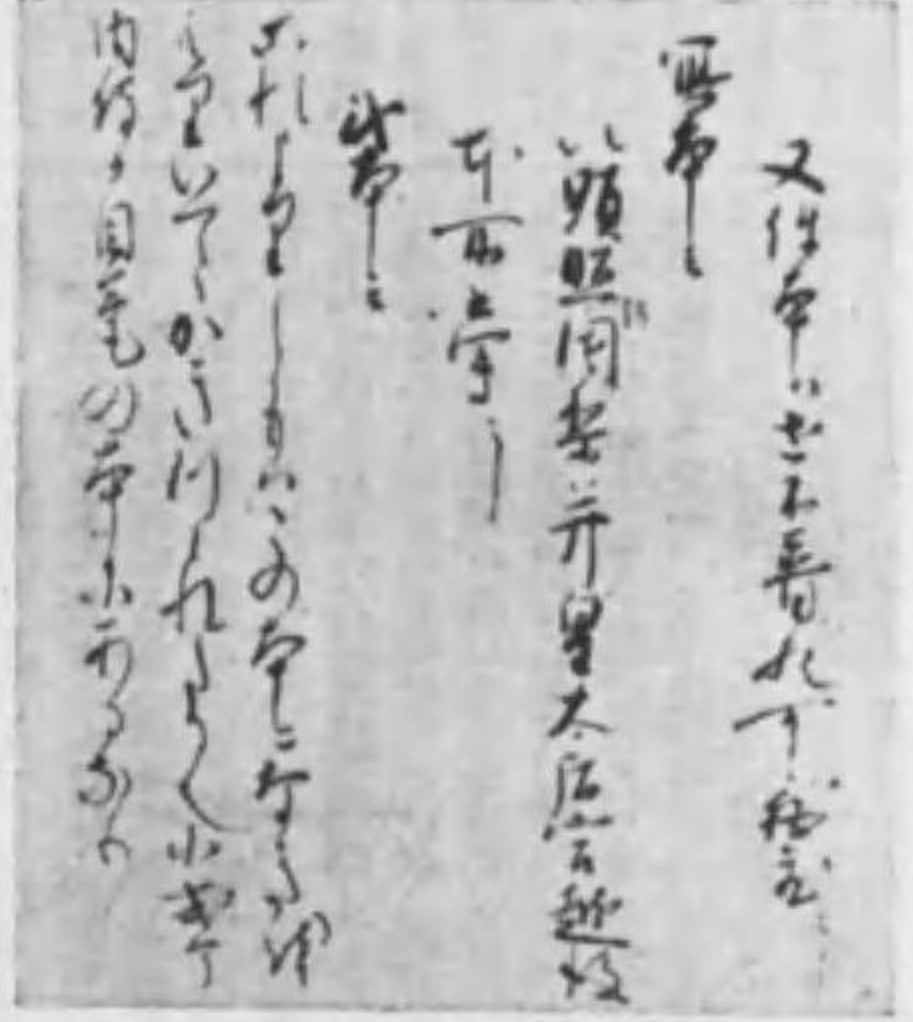
【史的地位】「伊勢物語」が後世の日本文学に大きな影響を興へたことは、「竹取物語」以上である。その構想の幻想的である點から云へば、「竹取物語」に劣り、雄大である點から云へば、「源氏物語」に劣る。しかし多種多様な藝術的要素が、歌文相持つて藝術的氣品を具へてゐることは、決して前記二者に劣らない。一つ一つの説話が、いづれもまたなる生活の姿を物語り、哀愁と微笑とを讀者に與へる。かきりけなく表現せられた生活の多様を貫く純眞な情緒が「伊勢物語」のもつ大きな魅力である。この物語の文學史的に注意すべき事は抒情詩が敘事詩的なものに展開して行く



古原保春會本伊勢物語

傾向である。和歌が物語の題材となる心理的過程はこの時代の文化意識を反映する。平安朝の散文は、この意識の中に發展したと思はれる。次にこの物語が、後世の文學に與へた影響と感化とは可なり大きく、「源氏物語」の作者を始めとして、中古以下の作家にして、この物語を讀まざるは、學問の方面に於ても、「源氏」「古今」と共に諸家の間に研究せられて、藤田鳴鶴「伊勢物語の歴史」(明治三九年)ら、これが抄又は聞書は、「源氏物語」のそれのやうに多數である。もし日本文学の研究史の系統を分つことが出来たら、「源氏」「伊勢」「古今」の三大部門に分つて出て来るであらう。近世以後、この物語は好んで女子に愛讀せられ、刊本の數は古典文學中首位を占むに至り、この書に題材を取つた多數の類書小説、戯作等があらはれてゐる。

讀は今見ることを得ない。定家は、「明月記」によれば、この物語を謄寫し校正したらしい。定家自筆と稱せられる三種の「伊勢物語」の奥書は、たゞ定家自ら書いたのではなくとも、少くともその流を汲むもの所爲であらう。爲家、爲相またこの物語を謄寫したかの如く傳へられてゐる。尤も定家以前に葉平の男言泰が、父の流を傳へて七體の體面を撰したと稱せられる「伊勢物語體面」がある。併しこの書に伊勢の二字を男女と訓ませた如きは、全く後人の僞作たることを暴露したものである。又、源經信の作と傳へる「伊勢物語知類抄」(又は是れが奇體の説を、取るに足らぬものである。「一條兼良」の「愚見抄」は、「伊勢物語」の學術的研究として最初ならはれたもので、發見に「知類抄」の僞書なる事、この物語の作者の事、「萬葉集」の歌をそのまゝ載せた事、葉平の小傳等を掲げ、卷末に「三代實錄」所載の葉平の傳、定家御講本の奥書等を載せてゐる。「伊勢物語」に所謂「富津」の解說これである。宗祇は兼良と共に二條家の歌道を再興し、「山口抄」を著し、「愚見抄」の誤謬を正し、次で舟橋宗元「三條西實錄」から相傳の説を受けて「推古抄」を著し、實相は宗祇の説を受けて「實相抄」を作つた。細川幽齋は、東院院藏大覺寺准后法親王・聖護院准后道智宗・宗榮・相巴等より傳はりての説に、兼良・宗元等相傳の説を參考して「關原抄」を大成した。一華堂切菰は「關原抄」の誤を正し、三條西實錄以來の説を主として諸説を集成し「集註」を著した。加藤聖善の「初冠」(後水尾院の勅撰抄)は、何



眞原保春會本伊勢物語

れもこれ等の諸註を踏襲したものである。しからに幽齋に學びたる松木貞徳の門下北村季吟は、諸註を集大成し、自説を加へて頭書とした。故事の考證和漢に互つて詳密、口授傳説と稱せられたる舊説を集めて世に示した。次いで契沖は「伊勢物語」を著し、新學風を起して諸註を批判し、この物語の内容・體面・作者等について自由なる考證を試みた。實茂源酒は、「古意」に於て、物語といふ名の事、伊勢物語と名づけたる事、葉平朝臣の自記ならぬ事、伊勢の御の書きたらぬ事、時代のたがへる事、作れる時代の事、古本文作者の事、むかし男といふ事の體面八箇條に於て、創見を述べ、學術的研究の大綱を示した。なほこの外、荷田春滿の「伊勢物語童子問」(上田秋成の「よしやあしや」)五井緜圃の「伊勢物語」(實茂源の「傳註」、清水濱臣の「伝註」、伊勢貞文の「別動」、尾代弘賢の「傳註序」、相似雲の「殘考」、市岡猛彦の「別會」、齊藤彦麿の「伊勢物語抄」等は、傳來の諸説を整理訂正して發達したものである。

のである。藤井高尙の「新釋」は、これ等の中で最も學術的であつて、朱雀院藏原本によつて本文を比較し、諸註の宜しきを選び、自らの創見をも加へた又抄守部の「伊勢物語箋」、佐佐木弘樹の「便言解」等も亦注目すべきである。【註釋書】主なるものを左に掲げる。

- 伊勢物語傳本二卷(寫) 傳在東洋書院
伊勢物語傳本一巻(寫) 傳在東洋書院(五十一)
伊勢物語傳本十巻(寫) (兼良) (重三引)
伊勢物語傳本一巻(寫) (兼良) (重三引)
伊勢物語傳本一巻(寫) (兼良) (重三引)
伊勢物語傳本一巻(寫) (兼良) (重三引)
伊勢物語傳本一巻(寫) (兼良) (重三引)
伊勢物語傳本一巻(寫) (兼良) (重三引)
伊勢物語傳本一巻(寫) (兼良) (重三引)
伊勢物語傳本一巻(寫) (兼良) (重三引)

伊勢物語別本一巻(寫) 伊勢貞文
伊勢物語別本一巻(寫) 伊勢貞文(文化九)
伊勢物語別本一巻(寫) 伊勢貞文(文化九)
伊勢物語別本一巻(寫) 伊勢貞文(文化九)
伊勢物語別本一巻(寫) 伊勢貞文(文化九)
伊勢物語別本一巻(寫) 伊勢貞文(文化九)
伊勢物語別本一巻(寫) 伊勢貞文(文化九)
伊勢物語別本一巻(寫) 伊勢貞文(文化九)
伊勢物語別本一巻(寫) 伊勢貞文(文化九)
伊勢物語別本一巻(寫) 伊勢貞文(文化九)

物段編識といふ著者不明の二巻、繪水筆詞行伊筆と傳ふる三巻、住吉如慶筆といふ二巻などがあるが、その名は著者古書體にも擧げられてゐるが、殊に注目されてゐるのは原富太郎氏所蔵の殘本一巻である。同書は初め二段に存するばかりで以下は繪のみ連ねてある。描寫は極めて細い麗しいもので、つくり際が足利朝に下る製作用であらう。高階隆一その他伊勢物語を主題とした繪卷形式のものでは益田勇剛男爵、田中勲兵衛氏及び東京美術學校に收藏されてゐる梵字體の下繪が著名である。白描畫であつてこれに詞書を添へてあるが、繪詞其の上には梵字を一杯に捺印してある下繪繪として興味深いもので、鎌倉末葉の製作であらう。(田中八三)

筆者所蔵の寛正五年の書寫とおぼしき古寫本は、この系統のものであるらしく、流布本に比するに、著しく簡明である。後者は、古本に假名の奥書あるに對し、漢文の奥書をもつてゐる。この原本は、大内政弘に傳へられたが、文明十二年、從一位藤原公教が、大内氏から借覽して、周防國藤野寺に於て書寫するに至つて、一般に流布したものと、流布本には、全文平假名で記されたものと、註のみに假名で記されたものとの二種あるが、本文は異同はないやうである。原本としては、續群書類從卷五一二三所收の本と、寛文十三年、田中理兵衛板行の五冊本とがある。

伊勢物語見抄(一) 兼良(名稱) 異本「伊勢物語見抄」の奥に「長祿四年冬末の末かた後物語をひらきみ侍る次に、愚見の及ぶところを、いさゝかするしだい侍り(中略)桃の花の坊にすみ侍る翁が筆のすまみに書き侍り」とある所から名づけられたものであらう。【成立】寫本の奥書に據ると、長祿の末年(異本の奥書によつて四年であることが分る)この物語の註が成り、後宗良に於て校合を加へ、更に文明六年再修を試みたものである。文明八年七月、兼良自筆の「愚見抄」は大内政弘に傳へられた。「諸本」「愚見抄」は大別して二種の異本がある。一は古本系統であり、二は流布本系統である。前者は、異本と見るべきもので、初稿本を傳へたものであるらしい。

伊勢物語見抄(二) 兼良(名稱) 異本「伊勢物語見抄」の奥に「長祿四年冬末の末かた後物語をひらきみ侍る次に、愚見の及ぶところを、いさゝかするしだい侍り(中略)桃の花の坊にすみ侍る翁が筆のすまみに書き侍り」とある所から名づけられたものであらう。【成立】寫本の奥書に據ると、長祿の末年(異本の奥書によつて四年であることが分る)この物語の註が成り、後宗良に於て校合を加へ、更に文明六年再修を試みたものである。文明八年七月、兼良自筆の「愚見抄」は大内政弘に傳へられた。「諸本」「愚見抄」は大別して二種の異本がある。一は古本系統であり、二は流布本系統である。前者は、異本と見るべきもので、初稿本を傳へたものであるらしい。

この書は「伊勢物語」の學術的研究として、最初に現はれたもので、「伊勢物語體面」「伊勢物語知類抄」等の奇様な妄説を打破し、定家に復歸する意味に於て、新説を擧げた點は、研究史上注目すべきである。一々の語釋中には、なほ誤謬が少くないが、語釋研究の初期

に於ては、已むを得ない事であらう。【附記】「伊勢物語」二巻、中院通の著と傳へられる。「愚見抄」に少補したものである。巻頭の順序ともいふべき一文に「此物語の本書に知照集と云ふは、大納言信朝の筆作といひつたへたり。其外色々抄もありといへども、ことごとく捨て、愚見抄をつくり給へり。是則後成恩寺殿御作也。大かた世も心来れるは肯聞とあり。又伊勢抄とあり。これ當世の抄にて是にてことよりはつきぬるもの也云々」とある。

【伊勢物語七ヶの秘訣】「伊勢物語」が古今集と共、歌道の教科用の如くなつてゐたのは、久しいことである。その中の秘訣七ヶを立てるに至つた。一、思ふは思ふの如くしなむじき物には袖をしつゝもの歌の意。二、月やあらねや昔の春ならぬ我身一つはもと身にしての歌。三、芥川は所と見てはならぬといふ歌。四、藤原は在原平を指す云々。五、肥後はいふは原三上山といふ歌。六、あまのさかでは人を祖よ時のわがといふ歌。七、雲の「影」は道とよの解世の歌のこと。この秘訣には民部卿爲人入道から長子爲人へ傳へられた書があるが、なほつと後のものであらう。中に撰津の芥川を引いた歌の中の「芥川」を地名と見ないとか、都鳥は葉平と説くが如き強説の説もあり、是利の末期以降、若しくは徳川時代の初期に何人が定めたものであらう（歌道史編考）。

【伊勢物語拾遺抄】「愚見抄」の註釋書五巻【著者】北村季吟【名籍】著者の説拾遺抄に基く。【成立】寛文三年の年號を記した漢文の跋があるから、それ以前の成立である。【諸本】延寶八年八月、藤野九郎兵衛梓とある板本、及びこれを轉寫した本の外、異本は見當らない。但、ものと板本は五巻五冊に分れてゐるらしいが、中には、巻数はものと異なり、形だけ上下二冊に分けたものもある。

【伊勢物語新釋】「愚見抄」の註釋書六巻【著者】藤井高向【成立】文化十年一月【諸本】流布本は、文政元年戊寅九月、似鳥能會藏板とある六冊本である。又明治廿七年大

久保初雄の標註を加へた本もあり、著者自筆の稿本から直接寫し傳へたと思はれる寫本もある。しかし何れも注意すべきほどの異同はない。

【内容】文政板本には、巻一の巻頭に、文化十二年三月、門人後藤重豊の跋があり、巻六の巻尾に「伊勢物語新釋奥書」として源野なる人の署名の一文がある。巻首に「伊勢物語」に關する論議と署名がある。この論議中に、古本を註釋と署名がある。この論議は、古本の未だ起らざる頃のものにて、云ふに足らぬ難き説多し、契沖の語、眞淵の古意はすべられたる註釋書なれど、なほ誤謬も少からず、季吟の拾遺抄は、右二書に比して劣れども、條により説も無きにあらざると云ひ、次に底本につきては、契沖は流布の假名本を用ひ、眞淵は眞名本を用ひたれど、共にかたよりて、原代私置所持の朱雀院藏本の中に、よき事の見ゆれば、これに清水源氏所持の「知照抄」の寫本を合はせ、その中よしと思はれるを取りて校合した由を述べてゐる。次に題辭に關しては、上田秋成が「よしやあしや」に云へる伊勢物語との書事に關係ありといふ説に賛し、伊勢の御主人の伊勢の作ならぬ事、又ことさらに時代を違へて書きたるよしなどは「古意」の説に従へることを斷り、用なき故事の考證等はくしく書かず、あくまで文學としての「伊勢物語」を讀する由を述べて古本の註釋の考證に隨したるを難し、一家の見識を示してゐる。註釋は本文を小節に分けて掲げ、これに一々詳細なる解釋を加へてゐる。語釋は、廣く古書を用ひ「體斷二古意」等の説を批判し、宣長・信友・重豊等の説を

【伊勢物語】「伊勢物語」の研究としては、最も完備に近いものである。その諸抄を渉覽せし點に於て、語句の解釋が細微に入れる點に於て、異本の本文を比較校合し、點に於て、あるのみに比すれば、その進歩著しきものである。殊に物語文の研究には、單に學術的な考證のみに満足せず、進んで情緒の問題に着眼したのは特筆すべきことである。唯本文を校訂する際、私意を加へて妄りに本文を改めたのは、大なる缺點である。【附記】「伊勢物語新釋拾遺」の書は、高向の隨筆の落葉に書いてあるやうに、「新釋の補訂として著される筈であつたらしい。井上通泰氏の高尚によれば、この業は完成に至らずして止んだが、伊勢物語新釋拾遺と表書せる本が保存してゐる由で、それは、義門、友安三冬、楠瀬大枝、清水宣昭等の考を集めたものであるといふ。

【伊勢物語】「伊勢物語」の註釋書五巻【著者】北村季吟【名籍】著者の説拾遺抄に基く。【成立】寛文三年の年號を記した漢文の跋があるから、それ以前の成立である。【諸本】延寶八年八月、藤野九郎兵衛梓とある板本、及びこれを轉寫した本の外、異本は見當らない。但、ものと板本は五巻五冊に分れてゐるらしいが、中には、巻数はものと異なり、形だけ上下二冊に分けたものもある。

笑はず。ばか吉は、江戸つ子は嫁ひだと女に言はれて怒り、亭主まで呼出して女を取代へたり、土地の習慣の祝儀を若い者から取られたりして憤慨したりする。他の部屋では客同士が...

徒然草

徒然草(松風)を見よ。...

キタ・セクスアリス

小説(作者) 森崎外(發表) 明治四十二年七月(スバル)...

「徒然草」の三篇は「デカメロン」の翻譯乃至翻案である。「デカメロン」以外のものでは、エドモンド・ド・アメイヌ(Edmond de Ameynes)の「クオ...

年少の漢は、その運命のものに狙はれてゐたが、シニクな同業者の加害で彼等の襲ふ所とならずに済んだ。その頃「徒然草」を讀んだり...

伊丹風

伊丹風(名義) 元祿前後 撰津伊丹に起つた俳風。...

伊丹發句合

伊丹發句合(名義) 俳諧集 一冊。...

「徒然草」の三篇は「デカメロン」の翻譯乃至翻案である。「デカメロン」以外のものでは、エドモンド・ド・アメイヌ(Edmond de Ameynes)の「クオ...

藝術作品を成してゐると共に、作者の自傳としての價値と、明治初期の風俗史的興味とを併せ備へてゐる。なほこの作を掲載した「スバル」は發售禁止になつた。

一翁四哲集

一翁四哲集(名義) 俳諧集 二冊。...

市川小團次

市川小團次(四代)(名義) 俳諧(初名)榮藏・米藏・米十郎(俳名)米升(家號)...

「徒然草」の三篇は「デカメロン」の翻譯乃至翻案である。「デカメロン」以外のものでは、エドモンド・ド・アメイヌ(Edmond de Ameynes)の「クオ...

「徒然草」の三篇は「デカメロン」の翻譯乃至翻案である。「デカメロン」以外のものでは、エドモンド・ド・アメイヌ(Edmond de Ameynes)の「クオ...

「徒然草」の三篇は「デカメロン」の翻譯乃至翻案である。「デカメロン」以外のものでは、エドモンド・ド・アメイヌ(Edmond de Ameynes)の「クオ...

「徒然草」の三篇は「デカメロン」の翻譯乃至翻案である。「デカメロン」以外のものでは、エドモンド・ド・アメイヌ(Edmond de Ameynes)の「クオ...

「徒然草」の三篇は「デカメロン」の翻譯乃至翻案である。「デカメロン」以外のものでは、エドモンド・ド・アメイヌ(Edmond de Ameynes)の「クオ...

